

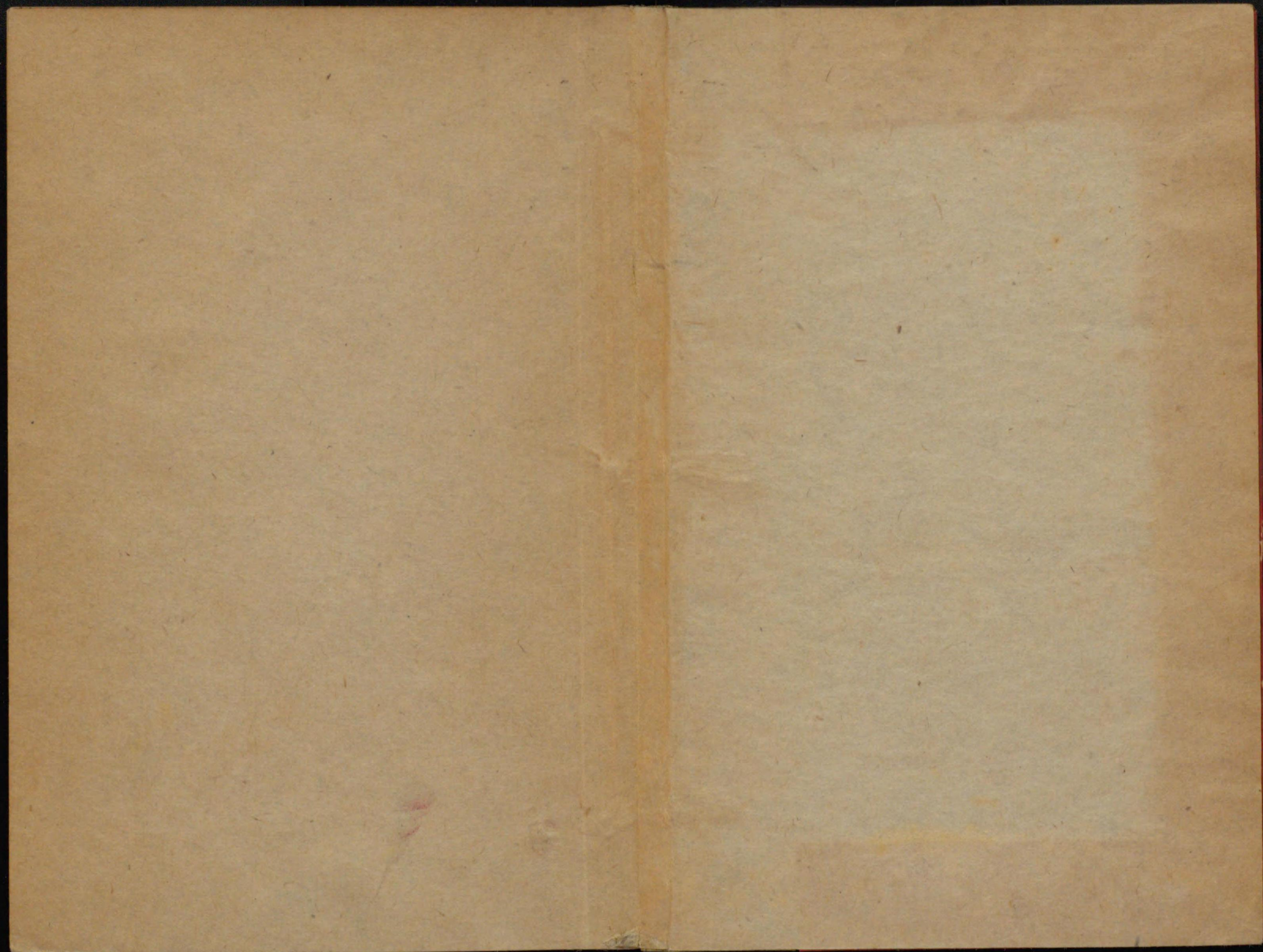
569-141



1200501516957

569

41



140

岩波文庫

36—38

569
14

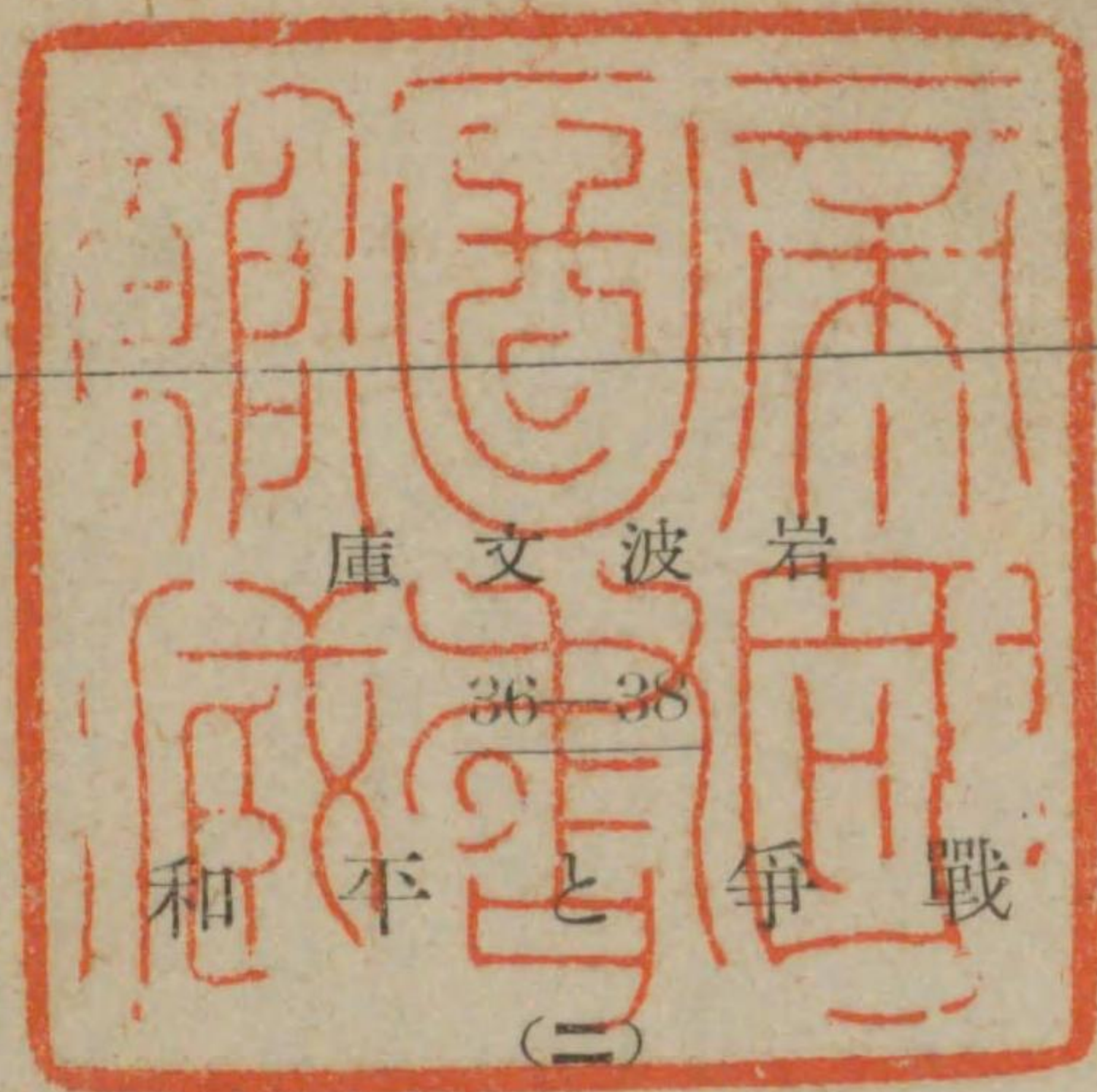
和平と争戦

(二)

作イトスルト
譯夫正川米

130

岩波書店



作イトスルト
譯夫正川米



店書波岩



第二編

千八百五年の十月、露西亞軍隊は埃太利大公國の村や町を充たしてゐた上に、なほ新しい隊が續々露西亞から到着するのであつた。そして自分たちの駐屯によつて住民を苦しめつゝ、ブラウナウ要塞の附近に散在してゐた。ブラウナウにはクトゥゾフ元帥の本營があつた。

千八百五年十月十一日、丁度ブラウナウへ着いたばかりの歩兵聯隊の一つは、町から半哩へだてた地點で總指揮官の檢閲を待つてゐた。土地や環境（果樹園、石垣、瓦葺の屋根、遠くに見えぬ山なみ）もの珍しげな兵士を眺める住民など、すべての風物が露西亞と異つてゐるにも拘らず、この聯隊はまるで中部露西亞のどこかで檢閲の準備をしてゐる、普通の露西亞軍隊と同じ外觀を呈してゐた。

昨夜、最後の進出のあひだに、行軍中聯隊を檢閲するといふ總指揮官の命令が達した。この命令の語句が聯隊長には不明瞭に思はれた。どんな風に命令の言葉を解釋したものか——行軍隊形をとるべきか否かといふ問題が生じたけれど、「お辭儀はし足りないよりも、し過ぎた方がまだましだ」といふ説によつて、正式の閱兵隊形をとることに大隊長會議で決められた。

で、兵士らは三十露里ゼルススタの行軍の後に、一晚中まんじりともしないで、修繕したり手入をしたりするし、副官や中隊長たちは點檢に點檢を重ねるのであつた。朝明けの頃にはもう聯隊は前日の行軍の時のやうな、だらけた不秩序な群衆ではなく、二千の人間の整然たる一團となつてゐた。しかもその中の一人々々が、おのれの位置と仕事を呑み込んでをり、一人々々の體についた釦や革紐に至るまで、悉く位置を誤らず清潔に輝いてゐた。それも單に外側ばかり整頓してゐるのみならず、もし總指揮官が服の下を覗いて見ようと、一人々々の體には一様に清潔なシャツが見出されるばかりだし、一人々々の背囊には兵隊どもの所謂「お針道具に洗濯道具」などいふ物品が、規定の數だけ發見されるであらう。たゞ一つ安心のできない事があつた。それは靴である。兵の過半は踏みくづした靴を穿いてゐた。しかしこの不備も敢て聯隊長の過失から生じた譯ではない。といふのは、再三再四の請求に拘らず、奥太利の當路者が下附してくれない上に、聯隊は既に千露里ゼルススタの道程を歩いて來たのである。

聯隊長は眉と頬髭の灰色をした、大分年を取つてゐるけれど、多血性らしい肉つきのいゝ將軍で、肩と肩との間より寧ろ胸と背中の間が廣いくらゐる。彼は仕立おろしの、襷のきちんと落着いた軍服を付け、どつしりと厚みのある肩章の金を光らしてゐたが、その肩章は彼の肥えた肩を下へ押し附けるといふよりも、寧ろ上へ引き上げてゐるやうな工合であつた。聯隊長は、自分の生涯中もつとも莊重な事業を、愉快に行つてゐる人のやうな顔附をしてゐた。彼は正面前列を歩き廻つてゐたが、歩きながらちよつと背中を曲げて、一步毎にびくり／＼と身慄ひする。見

受けたところ、この聯隊長は自分の聯隊に見とれてそれを幸福に感じ、すべての精神力をたゞ聯隊のみに打ち込んでゐるらしい。けれどそれにも拘らず、その身慄ひするやうな歩きぶりは、彼の心中で、軍隊の興味以外に社會生活の興味や女性なども、少からぬ場所を占めてゐる事を語るやうであつた。

『なあ君、ミハイラ・ミートリッチ、』と彼は一人の大隊長に話し掛けた（大隊長は微笑を含みながら前へ進み出た。見たところ、彼等は二人とも自分を幸福者と感じてゐるらしい）。『昨夜は随分ひどい目にあつたぢやないか。だが、別に缺點はあるまいね、大して悪い聯隊の方でもなささうだね……うむ？』

『はあ、ツァリーツイン・ルীগに出ても、追ひ出されるやうな事はありますまい。』

『何だつて？』と聯隊長は言つた。
この時、ところ／＼信號兵を配置した町へ通ずる道路に、二人の騎馬兵が現はれた。これは副官とその伴をする哥薩克であつた。

この副官は、昨日の命令ちゆう表現の明瞭でない箇所を、正確に聯隊長に傳へるため參謀本部から使者に立つたのである。つまり總指揮官の望むところは、行軍中と全然同一隊形——即ち、外套を著て武器に蔽ひ布をかぶせたまゝ、何の準備もしてゐない聯隊を見る事であつた。その譯は、前日クトゾフ總指揮官の所へ、軍事會議局カクシイグス・ラートの議員が維納からやつて來て、出來る

だけ早くフェルデナンド大公やマック將軍の軍勢と合するやう提議し、かつ要求したのである。クトゥゾフはこの聯合を有利とは思はなかつたので、自分の意圖を貫徹するに都合の好い實證の一つとして、露西亞の軍隊が如何に哀れな状態で行軍して來たかを、奧太利將軍に示さうと企てたのである。かうした目的をもつて聯隊を迎へる考へなのであるから、聯隊が悲惨な状態にあればあるほど、總指揮官の御機嫌がいゝ譯である。副官もかういふ巨細こさいの事情は知らないが、とにかく兵士らが必らず外套を著け、武器に蔽ひ布を被せてゐるやうにといふ、總指揮官の要求を聯隊長に傳へ、もしそれが實行されなかつたら、總指揮官は不満足に思はれるだらうと述べた。この言葉を聞いて聯隊長は首を垂れ、黙つて肩を突き上げながら、元氣のいゝ身振で兩手をばつと左右に開いた。

戦 争 と 平 和

『飛んだ事をしてつた!』と彼は言ひ出した。『ミハイラ・ミートリッチ、だから俺が言つたぢやないか、行軍隊形、つまり外套を著けたまゝだつて。』彼は咎めるやうに大隊長の方へ向つて言つた。『あゝ困つたな!』と附け足して、彼は決然と前へ進み出た。『中隊長集まれつ!』と號令に馴れた聲で叫ぶ。『特務曹長を集めろ! 間もなくお見えになりませうかね?』と彼は恭しく慇懃な表情を浮べて、副官の方へ振り向いた。その表情は明らかに、いま口にしてゐる上長官に對するものらしい。

『約一時間後だと思ひます。』

『服の著換へが間に合ひませうかね?』

『分りませんです、閣下……』

聯隊長は自ら列に近寄つて、また外套に著換へさせるやう命令した。中隊長はばらばらと自分の中隊をさして駈け出すし、曹長等は忙しさに騒ぎ始めた(外套はあまりきちんとなつてゐなかつたので)。同時に、以前規律たゞしく、げんご聞として聲のなかつた四邊形が急に動揺し、擴がり、がや／＼と騒々しく話し始めた。四方八方から兵士が駈け出したり駈け寄つたりした。そして後ろから肩をはづして頭から背囊を抜き、外套を取り出し、高く兩手を上げて袖を通すのであつた。三十分の後、再びすべては元の秩序を回復した。たゞしかし、以前黒かつた四邊形が一樣に鼠色に變つた。聯隊長はまた身慄ひするやうな足どりで隊の前へ進み出て、遠くからそれを見廻した。

『あれはまたどうした事だ? あれは何だ?』彼は俄かに足を止めて叫んだ。『第三中隊長を編 呼べ!』

『第三中隊長殿、聯隊長殿が御用です! 中隊長殿、閣下のお呼びであります。第三中隊長殿、聯隊長殿が御用であります!』といふ聲々が列伍の間に聞えた。副官はこの愚圖々々して出て來ない將校を探しに駈け出した。

一生懸命な聲の響きが、もう「將軍を第三中隊へ」などと間違へながら、やつと當人まで届いた時、呼ばれた將校が第三中隊の後ろから出て來た。もういゝ加減な年配で、あまり走りつけない

い男だつたので、危かしく爪先を絡ませながら、駈足で將軍の方へやつて来た。この大尉の顔は練習して来なかつた問題を言はされる小學生のやうな、不安の表情を帯びてゐた。赤い鼻（明かに不衛生のためらしい）の上には斑點が現はれ、口は一定の位置を知らない様子でもぐぐくしてゐた。大尉が次第に歩度を緩めながら、喘ぎ喘ぎ近寄つた時、聯隊長は頭のとつ邊から足の爪先まで、じろくくと彼を眺め廻して、

『君は今に兵隊にサラファンでも著せるつもりなんだらう。これは一たい何事だね？』下頤を突き出しながら、ほかと違つた色の上質羅紗で作つた外套を著てゐる、第三中隊の列中の一兵士を指さしながら、聯隊長はかう叫んだ。『それに君自身どこにゐたのかね？ 總指揮官が今にもお見えにならうといふ場合、自分の部署を離れるなんて？ うむ：：一つわしが教へてやらうかな、檢閲の際兵士に哥薩克外套なんか著させると、どんなものかつて事を！：：うむ？』

中隊長は長官から目を離さないで、自分の二本指をますく強く帽子の庇に押し當てた。恰もこの場合、たゞこれ一つに救助の道を認めたかのやうに。

『うむ、なぜ君は黙つてるのかね？ 一體あの君の部隊で、匈牙利人のやうな服装をしてるのは誰だね？』と聯隊長は嚴しい調子で洒落るのであつた。

『閣下……』
『うむ、「閣下」とは何かね？ 閣下！ 閣下！ 一たい閣下がどうしたんだか、ちつとも分りやせん。』

『閣下、あれは奪官されたドーロホフであります。』と大尉は小聲で言つた。

『全體あれは奪官されて元帥になつたのか、それとも兵隊になつたのか？ 無論、兵隊だ。それなら皆と同じ制服をつけてゐるべき筈ぢやないか。』

『閣下、閣下御自身、行軍中だけ許可されたのであります。』

『許可した？ 許可した？ それだ、君たち若い連中はすぐもうそれだ。』幾分鼻じろみ乍ら聯隊長は言つた。『許可した？ 本當にちよつと何か言へば、すぐ君達は……』聯隊長は暫く言葉を切つた。『君達にちよつと何か言へば、もう……どうだね？』またもや苛々しながら彼は續けた。『さあ、部下の兵士に規定通りの服装をさせてくれ給へ……』

聯隊長はかう言つて、副官の方を振り向きながら、例の身慄ひするやうな足取りで聯隊の方へ赴いた。見受けたところ、彼は自分で自分の痛癢が大いに氣に入つたらしく、聯隊ぢゆうを歩き廻りながら、何か口實を設けては、自分の忿怒に出口を興へようとした。ある一人の將校を徽章が磨いてないと言つて叱り、またもう一人を列の正し方が悪いと言つて譴責して、彼は第三中隊に近寄つた。

『なアんといふ立ち方だ？ 足をどこに置いてるのだ？ どこに足を？』まだ五人も間を隔てた手前から、青みがかつた外套を著たドーロホフに向つて、聯隊長は聲に苦痛の表情を響かせながらかう叫んだ。

ドーロホフは曲げてみた足を悠然と伸ばしてから、例の薄色の傲慢な眼附で將軍の顔を眺めた。

『何のために青い外套を著とるのか？ 捨ててしまへ！……曹長！ この男に著換へさせる……このやくざ……』と彼がしまひまで言ひ終らぬ中に、

『閣下、わたくしは命令を實行する義務を有してありますが、決して……』とドーロホフは早口に言った。

『列中で話をするんでない！ 話をするんでない！ 話をするんでない！……』

『侮辱を黙つて聞いてゐる義務はありません。』と大きな響の高い聲でドーロホフは言ひ切つた。

將軍の目と兵卒の目はびたりと出會つた。將軍は窮屈な飾帶を、腹立たしげに下の方へ引つ張りながら、暫く無言でゐた。

『何うかお著換へ下さい、お願いします。』そこを離れながら彼は言った。

二

『おいでであります！』このとき信號兵が叫んだ。

聯隊長は急に赤くなつて馬の方へ駆け寄り、顫へる手で鐙につかまり、ひらりと身を返して馬に跨がつた。居住ひを直してから刀を抜き、幸福らしい斷乎たる顔つきで、口を少し曲げて開き

ながら、號令を掛ける用意をした。聯隊は梢に居住ひを直す鳥のやうに、ばた／＼とはた／＼めいたが、すぐに静まり返つた。

『氣を付けえーえーえ！』と聯隊長は魂を揺り動かす様な聲で叫んだ。その聲は自分に取つては悦ばしく、隊に對しては嚴めしく、近づく上官に對しては歓迎の意を表するものであつた。兩側に竝木を植ゑた、石を登いてない、廣い大道路に沿うて、六頭だての水色をした高い維納式の輓馬車が、微かに螺旋を鳴らしつゝ、威勢のいゝ駆足で進んで來た。馬車の後からは隨行員の一群と、クロアイト騎兵の護衛隊が駛つて來る。クトゥヅフの傍には塊太利の將軍が坐つてゐたが、白い軍服が露西亞の黒い服の中に交つて異様に見える。馬車は聯隊の傍で止つた。クトゥヅフと塊太利の將軍は小さな聲で何やら話してゐた。クトゥヅフは馬車の踏段から重々しく足をおろした時、微かにほゝ笑んだ。その様子は息を殺して自分と聯隊長を見詰めてゐる二千人の兵士が、さながら眼中にないかのやうであつた。

號令の聲が響き渡ると、再び聯隊はがちや／＼と音を立てて震動し、捧げ銃をした。死んだ様な静寂の中に總指揮官の弱い聲が聞えた。聯隊は轟くやうな聲で、『閣下の健康を祈る！』『祈る』と言ふ言葉は丁度「オール」といふやうに響いたと叫ぶと、また元の静けさに返つた。聯隊が動揺してゐる間、クトゥヅフは一つ所にじつと立つてゐたが、やがて隨行員を引き連れて白服の將軍と共に、徒歩で列の間を廻り始めた。

聯隊長がひたと吸ひつくやうに相手を見つめ、反り返つて傍へ近寄りながら、總指揮官に敬禮をした様子から言つても、體を前の方へのめらせるやうにして持前の身慄ひするやうな歩きぶりを辛くも壓へつけないが、將軍たちの後ろから列伍の間を歩き廻る恰好から見ても、總指揮官の一言一行毎にちよ／＼と走り寄る風つきから察しても、彼は上官としてよりも寧ろ部下としての義務を果す方に、より多くの快感を覺えるらしかつた。聯隊は聯隊長の嚴格と努力のお蔭で、同時にブラウナウへ着いた他の聯隊に較べると、立派に整つてゐた。落伍者や病人はたつた二百十七人しかなかつた。そして靴を除いては何もかもきちんとしてゐた。

クトッゾフは列の間を歩き廻りながら時々立ち止つて、土耳其戦争で顔を知つてゐる將校や、稀には兵卒に迄、二こと三こと優しい言葉を掛けた。靴を眺めて、彼は幾度か沈んだ顔つきで首を振り、この事は別に誰を咎める譯にも行かぬけれど、どうもその不體裁を見ないではゐられぬ、といったやうな表情を浮べて、奧太利の將軍に指して見せた。聯隊長はその度に、自分に關する總指揮官の言葉を、一言でも聞き洩らすのを恐れるかの如く、急いで前の方へ走り出た。

クトッゾフの後からは、どんな低い聲で發せられた言葉でも聞き分ける事が出来るほどの距離を置いて、隨行員が二十人ばかり歩いてゐた。隨行の人々はめい／＼仲間同志で話し合ひ、時には笑ひ聲すら立てた。總指揮官に最も近く寄り添うて、一人の美しい副官が歩いてゐた。これはボルコンスキイ公爵であつた。彼と並んで行くのは同僚のネスギーツキイといふ、恐ろしく肥つて脊の高い、人の好ささうな、始終にこ／＼顔をした、目に沾ひのある佐官であつた。ネスギー

ツキイは、自分の傍に居る色の黒い輕騎兵將校に突つつかれて、をかしくて堪らないのをやつとの事で怵へてゐた。輕騎兵將校は目をじつと据ゑたまゝ少しも表情を變へず、眞面目くさつた顔をして聯隊長の背中を眺めながら、その一舉一動を眞似るのであつた。聯隊長が身慄ひして前の方へ首を伸す度に、彼はそのまま一分一厘の相違なく、身慄ひして前の方へ首を伸す。ネスギーツキイはくす／＼笑ひながら、この面白い冗談ものを見ろといふやうに、他の者を突つつくのであつた。

第 眼窩から飛び出すくらゐ一心に上官を見成つてゐる幾千の目の傍を、クトッゾフは靜かに大儀さうに歩いて行つた。第三中隊へ來かゝつた時、彼は不意に立ち止つた。これに氣つかないで進んでゐた隨行員たちは、危く總指揮官にぶつかりさうになつた。

二 『あ、チモーヒン！』例の青い外套の一件で苛められた赤鼻の大尉にふと目を止めて、クトッゾフはかう言つた。

聯隊長に注意された時チモーヒンは、もうこれ以上そり返る事は出來まいと思はれるほど反り返つたが、いま總指揮官が彼に言葉を掛けた時、もし總指揮官がもう暫く彼を眺め續けてゐたら、とても持ちこたへられまいと思はれるくらゐ、激しく反り返つた。でクトッゾフは彼の立場を了解し、出来るだけ大尉を樂にさせようと望むらしく、急いで顔をそむけた。負傷のために醜くなり腫んだクトッゾフの顔を、見えるか見えないかの微笑が掠めた。

『イズマイル攻撃時分の友達だ。』と彼は言つた。『勇敢な將校だよ！ 君、この男に満足して

「みるかな？」とクトゥゾフは聯隊長に訊いた。

聯隊長はまるで鏡に映るやうに、輕騎兵將校に自分の動作を一々くり返されるのも知らないで、びくりと身慄ひし、前へ進み出て答へた。

『非常に満足してをります、閣下。』

『我々は誰でも弱點のない者はないが、』クトゥゾフは微笑して、その場を離れながら言った。

『あの男は酒神バウカスに忠義すぎてなあ。』

聯隊長は、これについて自分に責任があるのではないかと吃驚して、返辭をしなかつた。輕騎兵將校はこのとき鼻の赤い、腹のへこんだ大尉の顔に氣がついて、またすぐにその顔と姿勢とを眞似たが、それが實に巧みに髣髴としてゐるので、ネスギーツキイは堪らず噴き出して了つた。クトゥゾフは後ろを振り返つて見た。察するところ、この將校は自分の顔附を、思ひ通りに操ることの出来る人と見え、クトゥゾフが振り向いた途端に、早くもその變にしかめた顔を直して、眞面目な、恭しい、罪のない表情を浮べたのである。

第三中隊は最後の中隊であつた。クトゥゾフは何やら思ひ出さうとするらしく考へ込んだ。アンドレイ公爵は隨行員の中から進み出して、佛蘭西語で低聲に囁いた。

『閣下はこの聯隊にゐる、あの奪官されたドーロホフの事を、注意してくれと御命令でございましたが。』

『ドーロホフはどこにゐるかな？』とクトゥゾフは訊いた。

もう灰色の兵隊外套に著換へたドーロホフは、呼び出されるのを待つてゐなかつた。亜麻色の毛に、明るい水色の目を持つた兵士のすらりとした姿が、列から前へ進み出た。彼は總指揮官の傍へ近寄つて、捧げ鉢をした。

『請願かな？』ちよつと顔を顰めてクトゥゾフは訊ねた。

『これがドーロホフです。』とアンドレイ公爵は注意した。

『あゝ！』とクトゥゾフは言った。『あの教訓がお前を匡正してくれる事とわしは信じてをる。しつかり勤務に従ふのだぞ。皇帝陛下は御仁恵に渡らせられるから、もしお前にそれだけの功績があつたら、わしも決してお前の事を忘れやせん。』

水色の明るい目は聯隊長を眺めた時と同じく、大膽に總指揮官の顔を見つめた。それは自分の表情で、この一兵卒と總指揮官を遙かに隔ててゐる階級の幕を、引き破らうとしてゐるやうであつた。

『たつた一つお願がございます、閣下』彼は持前のよく響くしつかりした聲で、せき込まずに言った。『どうぞわたしの罪を償つて、皇帝陛下および露西亞帝國に對する信服の念を、證據だてる機會を與へて下さいまし。』

クトゥゾフは顔をそむけた、その顔には先ほどチモーヒン大尉から目をそらした時と、そつくり同じ微笑がちらと掠めた。彼は顔をそむけ眉根に皺を寄せた。それは今ドーロホフの言つた事

* ドウナイ河口の港、露土戦争の際大いに露軍を悩ました土耳古の要塞所在地

も、また自分がドーロホフに言ひ得る事も、みんなずつと以前から承知してゐる、そんな事にはもう飽き飽きして了つた、それは自分の必要とする所とまるで違つてゐる——と、クトゥヅフの舉動はかう言つてゐるやうに見えた。彼は踵をめぐらして幌馬車の方へ赴いた。

聯隊は中隊毎に分れて、ブラウナウからほど遠からぬ指定の宿舎へ赴いた。そこへ行けば靴も穿き換へるし、困難な行軍の疲れを休める事も出来る、人々は楽しんでゐた。

『君、僕に氣を悪くしないでくれ給へ、チモーヒン君。』聯隊長は宿營地へ向けて動いて行く第三中隊を迂回し乍ら、先頭に立つて歩むチモーヒン大尉に馬を近づけてさう言つた（聯隊長の顔は檢閲が無事に済んだために、隠しきれぬ悦びの色を湛へてゐた）。『職務は公の事だから……あんな事ぢや困るよ……またこの次にあんな事があつたら、列前でも何でも痛癢玉を破裂させるよ……がまあ、僕の方から先に謝る、君は僕の氣性を知つてゐるだらう……いや、非常に禮を言つて行かれたよ！』と彼は中隊長に手を差し伸ばした。

『何を仰しやるんです、將軍、わたしがそんな事を思ふなどと！』と大尉は答へて、鼻を赤くしながらほく笑んだが、その拍子に、曾てイズマイルの戦ひに銃の床尾で打ち折られた前齒が、二本不足してゐるのを露はした。

『それからドーロホフ君にも、わしは決してあの人を忘れないと、さう傳言してくれ給へ。そして安心するやうにつてね。あゝそれから、どうか一つ聞かしてくれ給へ。僕は始終たづねて見ようと思つてゐたのだが、あの男はどんな風かね、品行はどうだね、そして……』

『勤務の方は非常に嚴正であります、しかし……性質がどうも……』とチモーヒンが言つた。『どうしたね、性質がどうだと言ふんだね？』と聯隊長は訊ねた。

『閣下、その日その日で氣分が變るのであります。』と大尉が答へた。『時には利口で、學問があつて、親切ですが、時にはまるで獸です。波蘭では危く一人の猶太人を殺すところでありました、御承知でせうけれど……』

『なるほど、なるほど。』と聯隊長は言つた。『何と言つても、不幸に落ちてゐる青年だから、憫んでやらなくちやならない。實際、なか／＼立派な友達や親戚を持つてゐるんだから……君もその……』

『承知しました、閣下……』閣下の御希望はよく分つてをります、といふ事を微笑で知らせながら、チモーヒンはかう言つた。

編

『いや、よろしい、よろしい。』

聯隊長は列中にドーロホフを探し出して、馬を止めた。

『こんど手柄を顯すまでだ、辛抱しろ。その時は肩章がつけられる。』と彼は言つた。ドーロホフは振返つたが、何ひとつ言はず、例の嘲るやうな薄笑ひを浮べた口の表情を、變へようともしなかつた。

『いや、これでいゝ。』と聯隊長は續けた。『兵隊どもにわしからヲートカを一杯づつ振舞つてくれ。』と兵士らに聞えるやうに言ひ足した。『みんな有難う！ やれ／＼だ！』彼は第三中隊を

追ひ越して、別の隊へ進んで行つた。

『いや、あの方は全くいゝ方だ。あの方となら一緒に勤めて行けるよ。』自分の傍を歩いて行く下級將校に向つて、チモーヒンはかう話しかけた。

『一口に言へば、「金無垢」でありますね。』(聯隊長は金無垢の王様といふ綽名をつけられてゐたのだ)と下級將校は笑ひながら言つた。

檢閲後の長官の浮々した気分は、兵士らにも移つて行つた。中隊は楽しさうに進んだ。四方から言葉交す兵士らの聲が聞えた。

『何だつてクトゥゾフは眇だ、片目だつて言ふんだらうなあ?』

『さうでねえか? 本當に眇でねえか。』

『なんの：お前より餘ほど目があるぜ：靴から脚絆からすつかり見て行つたもの。』

『おい、閣下が俺の足をじろつと見た時によ：：どうだ! おれは本當に：：』

『それからもう一人の塊太利人なあ、閣下と一緒にゐた奴よ、まるで白墨を塗つたみてえぢやないか、粉のやうに白かつたぜ。たぶん軍器を磨くやうに磨いて貰ふんだらうよ!』

『おい、フェデシヨウ：あの人が何と言つたつて? いつ戦争が始まるつて? お前すぐ傍に立つてたぢやないか? ブルノフ(ウラウナ)にブナパルトがある、とかいふやうな噂がしきりにあつたぜ。』

『ブナパルトがをる! 馬鹿なこと言ふない、畜生! 分り切つた事を知らねえ奴だなあ!』

この頃普魯西亞の奴が一揆を起したので、塊太利人がそいつを取つちめに行つてゐるのさ。その方が片づいたら、ブナパルトの戦争も始まるのよ。それなのに、ブルノフにブナパルトがをるなんて言ひやがる! だからすぐお里が知れつちまふのよ。貴様もつとよく聞いて来いよ。』

『くそつ、設營官のやつ、人を馬鹿にしやがつて! 見る、第五中隊はもう村の方へ曲つてゐる、彼奴らが粥を炊き上げた時分に、俺達はまだ宿舎にも着いちやるねえんだ。』

『堅ばんを寄越せ、こん畜生。』

『なるほど、昨日煙草をくれたかな、御尤もだ。ほら来た、もう知らんぞ。』

『せめて休止でもありやいゝのに、もう五露里も飲まず食はずに歩いてるんだ。』

『獨逸人のやつらが馬車でも寄越してくれりや、有難いんだがなあ。さうしてこんな風に乗り返したら、大威張りよ!』

『この邊の人間はみんな變てこな野郎ばかりだ。少しあつちの方は露西亞の領分で、波蘭人ばかりだつたが、こゝはもう誰も彼も獨逸人ばかりよ。』

『唱歌手は先頭に出ろ!』といふ大尉の聲が聞えた。

方々の列から二十人ばかりの兵士が出て、中隊の先頭へ向けて駈け出した。唱歌長の鼓手は唱歌手の方へ顔を向けて、手を一ふりすると、間の延びた軍歌をゆつくり唄ひ始めた。それは「曉ならずや太陽は赤み初めたり……」といふ文句に始まつて、「あゝわが同胞よ光榮は、カメンス

* この言葉は同時に「ダイヤのキング」をも意味する

キイ將軍と、我等が上に來るべし……」の言葉で終つてゐる。この歌はかつて土耳其戰爭の際に作られたものであるが、今はたゞ『カメンスキイ將軍』の代りに、『クトゥゾフ將軍』といふ字を嵌めただけの相違で、この奥太利で唄はれてゐるのであつた。

鼓手はこの最後の一句を兵隊式に引つ千切るやうに唄ひ捨てて、何か地へたへ抛りつけるやうに兩手を振ると、彼（四十ばかりの、乾き切つた顔をした美しい兵隊）は、嚴めしい顔附で唱歌手の方を眺め、目を細めた。それから一同の視線が自分の方に集中されたのを確めて、なにか貴重な物を兩手でそつと頭上（つばさ）に捧げるやうな身振をした。これが約二三秒つづくと、彼は不意に、その目に見えぬ貴重な物をやけに抛り出した。

と 争 『あゝなれ、わが住み家、わが住居！』

平 『わが新しき家居こそ……』と二十の聲がこれに和した。四つ竹打ちの兵隊は軍器の重いにも拘らず、足輕に前へ飛び出し、中隊の先頭に立つて後ろ向きに歩きながら、肩をひよこく動かししたり、四つ竹で友達を脅かしたりした。兵士らは歌の拍子に合わせて兩手を振り、我ともなしに足拍子を踏みつゝ、大股に進んで行つた。中隊の後ろから車輪の響、發條の軋み、馬蹄の音などが聞え出した。それはクトゥゾフとその隨行員が、町へ歸つて行くのであつた。總指揮官は兵士らに向つて、自由に歩いていゝといふ合圖を與へたが、唱歌の聲を聞き、踊り狂ふ四つ竹打ちや、樂しげに元氣よく進む中隊の兵士らを見ると、彼の顔にも隨行員の顔にも、いかにも満足げな表情が浮んだ。馬車は右翼の方から中隊に追ひついて進んで來たが、それから二番目の列にゐる、

例の水色の目をしたドーロホフは、自然と人の目につくのであつた。彼は歌の拍子に合わせて、殊に元氣よく氣取つた足取で進みながら、馬車に乗つて通り過ぎる人々を眺めた。その表情はまるで、こんなとき中隊と一緒に歩かない人は、みんな氣の毒なものだといつた風に見えた。クトゥゾフの隨行員で、例の聯隊長の眞似をした輕騎兵少尉補は、馬車からちよつと離れてドーロホフに近寄つた。

第 輕騎兵少尉補のジェルコフは一時彼得堡で、ドーロホフの牛耳を執つてゐた暴れもの仲間に入つてゐた。彼は外國へ來てから、一兵卒となり下つてゐるドーロホフに、一度出會つた事があるが、強ひて氣の附いた様子をする必要もあるまいと考へた。けれども今日は、クトゥゾフがこの奪官將校に聲を掛けた後なので、彼は如何にも舊友らしい悦びを現はしながら話し掛けた。

二 『おい君、どうだい？』自分の馬の足掻きを中隊の足音に合せながら、唱歌の響く中で彼はかゝう訊ねた。

『俺がどうかつて？』ドーロホフは冷かに答へた。『御覽の通りさ。』

元氣のいゝ歌の響は、ジェルコフの打ち解けた愉快さうな調子と、ドーロホフのことさらに冷やかな答に、一種特別な意味を與へた。

『長官との折合はどうだい？』ジェルコフは訊く。

『別にどうも。皆いゝ人だよ。しかし君はどうして、參謀へもぐり込んだい？』

『派遣されたのさ、當直をやつてゐる。』

二人はちよつと黙つた。

『鷹を放ちぬ右の袖より。』

自然と勇ましく楽しい感情を人の心に呼び醒ましつゝ、歌の文句はかう語つた。もし二人がこのやうな唱歌の響の聞えない時に話したら、その會話の調子は恐らく全然別様の趣を示したであらう。

『どうだ本當かい、奥太利がやられたつてのは？』とドーロホフは訊ねた。

『あいつらのこと分るもんかね。そんな話だ。』

『痛快だね。』ドーロホフは唱歌の要求する通り、簡單明瞭に答へた。

『どうだい、いつか晩に遊びに來給へ、ファラオンでも賭けようよ』とジェルコフが言つた。

『君、金でもうんと溜めたかい？』

『來たまへ。』

『駄目だ。誓を立てたんだ、復官するまでは、酒も歌留多もよすつて。』

『ぢや、仕方がないね、勳功を待つてるよ……』

『その時になつたら分るさ。』

また彼等は沈黙に陥つた。

『君やつて來給へ、何か要るものがあつたら。參謀部では君のために、何でもお役に立つよ。』

とジェルコフ。

ドーロホフはにたりと笑つた。

『そんな心配せんがいよ。何か要るものがあれば、人に無心しないでも、自分で手に入れろ。』

『何もそんなに、僕はたゞその……』

『さうか、僕もたゞそのだ。』

『失敬。』

『たつしやでゐ給へ……』

『遙けくもまた高く』

故郷をさして……』

ジェルコフは馬に拍車を一つ當てた。馬は激して、どちらから踏み出していか分らないやうに、二三度足ぶみしながら身構へすると、やがてこれも同じく唱歌の拍子に合わせて、中隊を追ひ越し、馬車を追ひ掛けながら、まつしぐらに駆け出した。

三

檢閲から歸るとクトゥヅフは、奥太利の將軍と共に自分の書齋へ通つた。そして副官に聲を掛けて、目下續々到着してゐる露西亞軍の狀況に關する若干の書類と、先發隊の指揮をしてゐるフェルデナンド大公の手紙を持つて來るやうに命じた。アンドレイ・ボルコンスキイ公爵は命ぜ

られた書類を持つて、總指揮官の書齋へ入つて來た。卓の上に擴げられた地圖の前には、クトゥゾフと奥太利の軍事會議局の議員とが對坐してゐた。

『あゝ……』とクトゥゾフはボルコンスキイの方を振り返つて言つた。それは丁度この言葉で少し待つてくれといふ意を副官に傳へるかのやうであつた。そして絲口を切つた會話の續きを佛蘭語で始めた。

『わたしがたゞ一つ申し上げたいのはですね、將軍。』クトゥゾフは自分のゆつくりと繰り出す一語々々を、あくまで相手に傾聴させなければやまぬやうな、氣持のいゝ優美な表情と發音でかう言ふのであつた（見受けたところ、クトゥゾフ自身も、我とわが言葉に耳を傾けてゐるらしかつた）。

『わたしがたゞ一つ申し上げたいのはですね、將軍、もしわたし一個人の希望で、事を左右し得るならば、フランツ皇帝陛下の御希望も疾くに實行されてゐたはずです。わたしは疾くに大公の軍に合してゐるに相違ありません。どうかわたしの偽りのない言葉を信じて下さい。今わたしよりも遙かに老練な將軍に（かういふ方は奥太利に大勢ゐられますが）、さういふお方に最高統帥權を引き渡して、すべての苦しい責任から肩を抜くのは、わたし一個に取つても非常な悦びなのです。しかし事情は往々人間よりも強い事がありますからね、閣下。』

かう言つてクトゥゾフはにつこり笑つたが、その表情は、「あなたはわたしの言ふ事を本當にしないでよいのです。あなたはその權利を持つていらつしやる。またわたしにしても、あなたが本當になさらうとなざるまいと、どつちにしたつて同じ事なんです。けれどあなたは、その疑を口に出すべき理由を持つていらつしやらない。そこがつまり肝腎な點なんですよ。」と言ふやうに思はれた。

奥太利の將軍は不満らしい様子をしてゐたが、やはり同じやうな調子でクトゥゾフに答へざるを得なかつた。

『それどころではありません。』と彼は氣むづかしげな怒りつばい聲で言つたが、それは愛想のいゝ言葉の意味を完全に裏切つてゐた。『それどころではありません、閣下が大局に干與して下さるのは、陛下の深く希望してをられる所であります。けれど目下のやうに荏苒日を移されるのは、光榮ある軍隊およびその指揮官をして、今日まで諸所の戦ひで常に獲得してをられた月桂冠を、空しく失はしめるやうなものだと我々は考へますが。』といかさま前から用意して來たらしい言葉を結んだ。

クトゥゾフは微笑を變へずに頭を下げた。

『わたしは以前から固く信じてゐましたし、またフェルデナンド大公殿下から戴きました最近の手紙によりまして、マック將軍のやうな老巧な參謀官の指揮を受けてゐる奥太利軍が、今回見事な勝利を占めたのはもはや疑を容れません。ですから、露西亞軍の援助など既に必要ないと存じますが。』とクトゥゾフは言つた。

奥太利の將軍は眉を顰めた。奥太利軍が敗れたといふ確かな報知はまだなかつたが、全體とし

て不利な風評を確める事情は多過ぎるくらゐであつた。それ故、クトゥゾフの墮軍戦捷の想像は、寧ろ嘲笑のやうに聞えたのである。しかしクトゥゾフは依然として、例の「わたしはかういふ想像をする権利をもつてゐます」といつたやうな表情を浮べ、つましやかに微笑した。事實、彼が最近マック將軍から受け取つた手紙は、その軍隊の勝利と、戦術上もつとも有利な陣地を報じてゐるのであつた。

『その手紙をこゝへ持つて來たまへ。』クトゥゾフはアンドレイ公爵の方へ向いて言つた。『ちよつとこれを御覽なすつて下さい。』

とクトゥゾフは唇の兩端に冷笑的な笑を浮べつゝ、フェルデンナンド大公から受け取つた獨逸語の手紙のうち、次の一節を墮太利の將軍に讀んで聞かせた。

『我等は約七萬人より成れる、完全に集中されたる兵力を有す。しかるが故に、もし敵にしてレ^{*}へ河を渡らんとせば、わが軍はこれを攻撃し粉砕するを得べし。またわが軍はウルム市を占據せるが故に、ドゥナイ兩岸の制壓權掌握の利を有す。従つて、もし敵軍レ^{**}へを越えずしてドゥナイを渡らんと欲すれば、我は常にその交通線を襲ひ、下流よりドゥナイを越ゆるを得べし。而して敵軍もしその全力を、わが信義深き同盟軍に集中せんと試みんか、わが軍は彼をしてその企圖を遂げざらしむる事を得。かくの如くして、我等は露西亞皇軍が完全に準備を終るの時を待ち、その後、相共に敵を當然の運命に陥るゝの可能を見出すこと、極めて易々たるを思ふ。』

クトゥゾフはこの一節を讀み終つて、重々しく吐息をつきながら、注意ぶかく愛想のいゝ眼附

で軍事會議局の議員を眺めた。

『しかし閣下、閣下はあの「常に最悪を豫想せよ」と教へる原則を御存じでせう。』明かに冗談はこれくらゐにして、そろ／＼本題に入りませうと言ひたげな調子で、墮太利の將軍はかう言つた。

彼は思はず副官の方を振り返つた。

『ちよつと御免下さい、將軍。』とクトゥゾフは遮つて、これも同じくアンドレイ公爵の方へ振り向いた。『ねえ君、友軍の斥候の報告をすつかり、ユズローフスキイの所から取つて來てくれ。この二通の手紙はノスチツ伯爵から、これはフェルデンナンド大公から、それからこれは、』

彼は幾通かの書類を取つて公爵に渡しながら、『この書類の中から綺麗に、佛蘭西語で控書にして——つまり我々が墮太利軍の行動に關して受け取つた報告を、全部一目瞭然と分るやうに覺え書にしてくれ。そして閣下の御覽に入れるがいゝ。』

アンドレイ公爵は單にクトゥゾフが言つた事のみならず、言はんとし言ひ得なかつた事まで、最初の數語で了解したといふ印に頭を下げた。そして二人に對する會釋を一つして書類を集めると、靜かに毛氈の上を歩きながら、控室へ出て行つた。

アンドレイ公爵が露西亞を出てから、まだ幾程もたゝないけれど、彼はこの間に非常に變つて

* ドウナイ河右岸の支流

** ドウナイの左岸に在る都會、要塞地

来た。彼の顔の表情、動作、足どりなどに、以前のやうなわざとらしさも、疲れただるさうな様子も殆どなくなつてゐた。自分が他人に如何なる印象を與へるか、といふやうな事を考へる暇さへなく、たゞひた向きに愉快な面白い仕事に没頭してゐる人のやうな様子をしてゐた。彼の顔はむしろ自分自身、ならびに自分を取り圍む人々に對する満足の情を表はし、その微笑と眼附は前にも増して樂しげに、人を牽きつけるやうであつた。

彼はクトゥゾフに波蘭で追ひ附いたが、總指揮官は優しく彼を迎へ、決して彼の事を忘れないと約束し、ほかの副官以上に拔擢して、自分と一緒に維納へもつれて行き、人よりも重大な任務を與へるのであつた。維納でクトゥゾフは、曾ての同僚であるアンドレイ公爵の父に手紙を送つた。

和 平 と 争 戦
『貴下の御息は』と彼は書いた。『事務の運轉に長けたる、意志の堅固なる、義務の遂行に忠實なる點に於て、儕輩に抽んでたる將校たるべき希望充分に御座候。小官はかくの如き副官を左右に置き得る事を幸福とするものに候。』

クトゥゾフの司令部に於ける同僚の間でも、また一般軍隊に於ても、アンドレイ公爵は彼得堡と同様に、全然相反した二通りの評判を取つてゐた。少數の一部分は、アンドレイ公爵を何か特別な、自分達をはじめすべての人間と違つた者のやうに考へて、前途に偉大なる成功を期待し、彼の言葉に従ひ、彼に隨喜の涙をこぼし、彼の言行を模倣した。これらの人々に對しては、彼も淡泊で氣持のいい態度を取つた。ところが、他の大多數はアンドレイ公爵を好まず、氣取りやで

冷淡な不快な男だと言つた。しかしこの人達に對してもアンドレイ公爵は、單に自分を尊敬させるのみならず、進んで恐れさせるやうにさへ振舞つた。

クトゥゾフの部屋から控室へ出ると、アンドレイ公爵は書類を携へて、當直副官をしてゐる同僚のコズロフスキイに近づいた。こちらは本を持つて窓の傍に腰掛けてゐた。

『え、何だね、公爵？』とコズロフスキイは訊ねた。

『なぜ我軍が前進しないかといふ事で、覚え書を作るやうに命じられたのさ。』

『それはなぜだい？』

アンドレイ公爵は肩をちよいと竦めた。

『マックから報知はないかね？』コズロフスキイは訊いた。

『ない。』

『もしマックが破れたといふのが本當なら、報知がありさうなものぢやないか。』

『さうだらうね。』と答へ、アンドレイ公爵は出口の扉の方へ進んだ。

けれども彼と出會ひ頭に、外からやつて來たらしい脊の高い奥太利の將軍が、扉をノド手荒に開いて控室へ入つて來た。黒い布で頭を纏帶し、フロックの上からマリヤ・テレーゼの勳章を首に懸けてゐた。アンドレイ公爵は立ち止つた。

『クトゥゾフ大將は？』外來の奥太利將軍はあたりを見廻しながら、少しも立ち止らずに書齋の戸口へ進み寄り、ごつ／＼した獨逸式の發音で早口にかう言つた。

『大將は今御用談中です。』と、急ぎ足に見知らぬ將軍に近寄つて、戸口に通ずる道を塞ぎながら、コズロフスキイは言った。『何とお取次ぎしませう?』

見知らぬ將軍は、『どうして俺を知らずにみられるのだらう?』と驚いたやうに、脊の低いコズロフスキイを輕蔑したらしい眼附で上から見おろした。

『大將は御用談中です。』とコズロフスキイは落着き拂つて繰返した。

將軍の顔は苦々しさうになり、唇はびくりと吊つて慄へ始めた。彼は手帳を取り出して、手早く何やら鉛筆で認め、その一枚を引き千切つて渡すと、急ぎ足に窓へ近寄り、椅子の上にどかりと身を投げた。そして、なぜお前達は俺の顔を見るのだ? と訊ねるやうな眼附で、部屋に居合と人々を眺め廻した。それから將軍は頭を擡げ、何やら言ひ出しさうに首を伸したが、すぐ口の中で鼻歌でも歌ふやうに、何やら異様な音を發した。が、それも忽ち途切れてしまつた。と書齋の扉が開いて、闕の上にクトゥゾフが姿を現はした。頭を卷いた將軍は、まるで危難を免れるやうな風情で、瘠せた足を大腿に擴げ背中を屈めながら、急がしげにクトゥゾフの方へ近寄つた。

『Vous voyez le malheureux Mack. (あなたは目の前に立つてゐる不幸なるマックです)』と彼は引つ千切つた様な聲で言つた。

書齋の戸口に立つてゐたクトゥゾフの顔は、暫く不動のままであつた。臆て、不意に一脈の皺が波の如くその顔を走り、額は滑らかなになつた。彼は恭しく頭を下げ、眼を閉ぢてマックを中へ招き入れ、自分で後手に扉を閉めた。

第 二 編

奧太利軍の敗北及びウルムに於ける全軍の降伏に關しては、既に前から風評が擴つてゐたが、今やそれが事實として現はれた。三十分後にはもう凡ゆる方面へ副官が命令を以て駈け出した。それは今まで無爲に過してゐた露西亞軍も、程なく敵を迎へねばならぬ事を證明するものであつた。一般の戦局に自分のおもなる興味を向けてゐる將校は、軍司令部にも極めて少いが、アンドレイ公爵はその一人であつた。マックを見、またその敗滅の詳細を聞いた時、彼はこの戦役が既に半ば敗北に歸したことに、それに附隨して露西亞軍の立場の困難なことも了解した。そして如何なる運命がわが軍を待ち設けてゐるか、また自分はその中の一員として、如何なる役を勤めねばならぬかを、まざ／＼と想像したのである。かの自ら恃むこと篤き奧太利が敗滅して、一週間後にはスプーロフ將軍以後はじめての、佛蘭西と露西亞の衝突に身みづから參加し、親しくその實況を見る事が出来る——彼はかう考へると、我ともなく波立つ様な歡喜の情を覺えた。しかし彼はまたボナバルトの天才を恐れた。或ひは露西亞全軍の勇氣より、彼一人の方が更に強いかも知れぬと心配したが、それでも己れの崇拜する英雄の屈辱を想像することが出来なかつた。

かういふ想念に激昂したり、いら／＼したりしながら、彼は毎日の日課としてゐる父への手紙を書くために、自分の部屋へ赴いた。と、廊下で同宿のネスギーツキイと、例の冗談もののジェルコフに行き會つた。二人はいつもの如く、何がかしいのか笑ひ興じてゐた。

『君、何だつてそんな濼い顔をしてるんだい?』蒼い顔をして目を光らしてゐるアンドレイ公爵に氣が附くと、ネスギーツキイは聲を掛けた。

『浮かれる事なんか少しもないさ。』とボルコンスキイは答へた。

アンドレイ公爵がネスギーツキイとジェルコフに行き會つた時、廊下の一方の端から、露西亞軍の糧食状況を視察のため、クトゥゾフの司令部に編入されてゐたシュトラウフといふ奥太利の將軍と、前日到着した軍事會議局ホウクリグスライトの議員が、彼等の方へ向けてやつて來た。廣い廊下は、二人の將軍が三人の將校をやり過すべく、充分の餘地があつた。しかしジェルコフは肘でネスギーツキイを突きながら、息はずませて言つた。

『やつて來るよ……やつて來るよ……よけ給へ、通り路だ！ さあ通り路だ！』

將軍たちは、自分らとして苦しい敬禮を受けたくないと言つた様子で、わきを通り抜けようとしました。冗談者のジェルコフの顔には、不意に愚かしい悦びの微笑が現はれ、それを抑へる事が出來ないと云つた風である。

和 平 『閣下。』彼は前へ進み出て、奥太利將軍の方へ向きながら、獨逸語で言つた。『謹んでお祝ひ申し上げます。』

彼は小首を傾けて、つい近ごろ舞踏を習ひ始めた子供のやうに、無器用な恰好で片足つつ代るがはる足摺りを始めた。

軍事會議局評議員の將軍は、むづかしい顔をして彼を眺めた。しかしその愚かしい微笑の眞面目さを見て取ると、たゞ一瞬の注意を拒むことが出來なかつた。彼は目を細めながら、聞いてゐるよといふ心を示した。

『謹しんでお祝ひ申し上げます。マック將軍も全く無事で到着なさいました。たゞちよつとこんなところを、少しばかりお怪我なすつただけで。』と満面を笑み輝かしながら、彼は自分の額を指さして言ひ足した。

將軍は眉を蹙めて顔をそむけ、さつさと歩き出した。

『Gott, wie naiv! (お、いとふ)』二三歩はなれた時、彼は腹立たしげにかう言つた。

第 一 ネスギーツキイはからりと笑ひながら、アンドレイ公爵に抱きついたが、ボルコンスキイは一そう蒼くなつて、毒々しい表情を顔に浮べながら、彼を突きつけ、ジェルコフの方へ振り向いた。マックの姿、その敗報、露西亞軍を待ち設けてゐる運命を思ふ心、これ等のものに呼び醒まされた神經的な忿激が、ジェルコフの場所がらを辨へぬ洒落に對する怒りの中に、はけ口を見出したのである。

編 『君、もし君が、』と下頤を軽く顫はせながら、刺すやうな聲で彼は言つた。『もし君が道化師になりたいといふなら、僕はその邪魔をする譯にや行かない。けれど豫め君に言つとくが、もし君が僕のある所で、二度とあんなふざけた眞似を敢てしたら、僕は君に紳士たる者の作法を教へて上げるから。』

ネスギーツキイとジェルコフは、この言葉にひどく度膽を抜かれて、目を圓くしながら黙つてボルコンスキイを見つめてゐた。

『何も君そんなに、僕はたゞちよつとお祝ひを言つただけなんですよ。』とジェルコフは言つた。

『僕は君に冗談を言つてやしないんだよ、黙り給へ！』とボルコンスキイは叫んだ。そしてネスギーツキイの手を取つて、何と答へる言葉も知らず茫然と立つてゐる、ジェルコフの傍を離れた。

『まあ、君一體どうしたんだね？』とネスギーツキイは宥めるやうに言つた。

『どうしたとは何だね？』とボルコンスキイは興奮のあまり立止つて言つた。『君は分つてらだらうね、我々は皇帝並びに國家に仕へ、友軍全體の成功を喜び、その失敗を悲しむ將校なのか、それとも主人の事には何の關係もないボーイなのか、一體どつちなんだ？』 Quarante mille ho-

mmes sont massacrés et l'armée de nos alliés détruite, et vous trouvez là le mot pour rire

と

彼は言つた。『C'est bien pour un garçon de rien comme cet individu dont vous avez

和 fait un ami, mais pas pour vous, pas pour vous. (これも君が自分の友達にしてゐるあの男みたいで、あんな

君には出小僧つどもならあんな風に巫山戯るのもいゝさ。』とアンドレイ公爵はこれだけ露西亞

来ない。ふのに、君たちはよく巫山戯たり何ぞ出来るね）語で言つたが、まだジェルコフの耳に入りさうだったので、小僧つ子といふ言葉を、佛蘭西風の

下を出て了つた。彼はこの少尉補が何か返事するだらうと思つて待つてゐたが、少尉補はくるりと踵を返して廊

四

パヴログラード輕騎兵聯隊はブラウナウから二哩の所に屯してゐた。ニコライ・ロストフが見習士官として勤務してゐる中隊は、ザルツェネクといふ獨逸の村に配置されてゐた。全騎兵師團にザシカ・ヂェニーツフの名で響き渡つてゐる中隊長ヂェニーツフ大尉には、村でも好い方の宿舎が當てがはれてあつた。見習士官ロストフは波蘭で聯隊に追ひついて以來、中隊長と同居してゐた。

二 十月十一日、即ちマック敗戦の報知に依つて、本營内が何もかも一時に騒ぎ立つた當日の事、騎兵中隊の參謀部では行軍生活が舊によつて穩かに流れてゐた。一晚ぢゆう歌留多で負け續けたヂニーツフは、まだ宿舎へ歸つて來なかつた。この時ロストフは、朝早く馬糧徴發を終つて、馬上で歸隊した。見習士官の制服を著けたロストフは入口に近づくつと、馬をとんと一突きして、青年らしいしなやかな身振で片足を抜き、片足で暫く燈の上に立つたまゝ、馬と別れたくないやうな風情であつたが、到頭ひらりと飛びおりて傳騎を呼んだ。

『おい、ボンダレンコ、やつこさん！』一散に彼の馬を目がけて走つて來る輕騎兵に向つて、彼は叫ぶのであつた。『少し引き廻してくれ、な。』幸福を感じてゐる瞬間に人のいゝ青年が誰にでも示すやうな馴々しい、樂しげな優しい調子で、彼はかう言つた。

『かしこまりました。』と愉快さうに頭を振りながら、小ロシヤ生れの兵士が答へた。

『よく氣を付けて引き廻すんだぞ！』

いま一人の兵隊がやはり彼の馬の方へ飛んで来たが、もうボンダレンコが小鞆の手綱を後ろへはね返して了つた。察するところ、見習士官がたつぷり酒手をくれるので、この人に忠勤をほげむのは得になるらしかつた。ロストフは頸から胴へかけて馬を撫で、入口の階段に立ち止つた。

「素敵だ！ 中々いゝ馬になるだらう！」と彼は考へた。そして微笑を含んで刀を握り、拍車を鳴らしながら、玄關の階段を駆け昇つた。ジャケツを着て頭巾を被つた獨逸人の家主は、又木を持つて肥料を掻き出してゐたが、このとき牛小屋から顔を覗けた。ロストフの姿が目に入るや否や、獨逸人の顔は急に晴ればれしくなつた。彼は愉快らしく微笑し、目をぱちくりさせて、

『Schön, gut morgen! Schön, gut morgen.』(結構な朝ですな) 彼はこの青年に聲を掛けるの

と

が、いかにも愉快だといつたやうな調子で繰り返した。

『Schon, Heissig』(大變御精が) 生き生きした顔から暫しも消えぬ悦ばしげな微笑をもつて、ロ

ストフはさう言つた。【Hoch Oestreicher - Hoch Russen - Kaiser Alexander's】 彼はこの獨逸人がよく

いふ言葉を繰り返して、家主の方へ向いた。

獨逸人は笑ひながら、たうとう牛小屋からすつかり出て来て、頭巾を引つたくつて頭の上で振

る。『Und die ganze Welt hoch』(世界萬歳) と叫んだ。
ロストフ自身も獨逸人と同じやうに、帽子を頭の上で打ち振り、『そして全世界萬歳！』と笑

ひながら叫んだ。もつとも、牛小屋を掃除してゐる獨逸人に取つても、小隊を連れて秣を取りに
行つたロストフに取つても、特にこれといふ歡喜の原因はなかつたが、兩方とも幸福らしい喜悅
と、隔てのない愛情をもつて互に顔を見合せ、互に愛し合つてゐる印に頭を振ると、笑ひ笑ひ別
れて入つた——獨逸人は牛小屋へ、ロストフはデニースフと一緒に間借りしてゐる百姓家へ。

『大尉殿はどうなすつた？』聯隊ぢゆうでも有名な横着もので通つてゐる、デニースフの從
卒ラヴルシカに、ロストフはかう問ひ掛けた。

『昨夜からお歸りになりません。きつとお負けなすつたんでせう。』とラヴルシカは答へた。
『わつしはよく知つてますよ。もし勝つたのなら、早く歸つて自慢なさいませ。ところが、朝
になるまでお見えにならなかつたら、つまりやられなすつたんですよ。今にぶり／＼して歸つて
來られますから。珈琲を差し上げませうか？』

『うん、くれ、くれ。』

十分ばかりして、ラヴルシカは珈琲を持つて來た。『お見えになりましたよ！ さあ、大變
だ！』と彼は言つた。ロストフが窓を覗いて見ると、家へ歸つて來るデニースフが目に入つた。
デニースフは小柄な男で、顔は赤く、目は黒く／＼と輝き、髪も鬚もくしやく／＼して黒か
つた。彼は釦を外した輕騎兵服に、襜の伸びた廣い輕騎兵洋袴を穿き、皺くちやになつた輕騎兵
帽を阿彌陀に冠つてゐた。彼は頭を垂れて、暗い顔つきをしながら玄關へ近づいた。

『ラヴシカ』と彼は叫んだ（彼はRの發音が出来なかつたのである）。『さあ、脱がさんか、
間拔野郎！』

『さう仰しやらなくたつて、脱がしてゐるぢやありませんか。』とラヴルーシカの聲が答へる。

『あゝ！ 君はもう起きたのかね。』部屋へ入つて來ながら、デニースフは聲をかけた。

『えゝ、ずつと前ですよ。』ロストフは言つた。『僕はもう乾草を取りに行つて、マチルデ嬢を見て來ました。』

『へえさうかい！ 俺は昨夜すっかりやられちやつたよ。まるで様さまあないや。』とデニースフは叫んだ。『何ちふ運の悪いこつた！ 何ちふ運の悪いこつた！ 君が行つちまふとすぐ、そんな風になつて了つたんだよ。おい、茶だ！』

デニースフは微笑でもするやうに、短い堅固な歯を現はして顔を顰め、指の短い両手で、森のやうに逆立つた濃い黒髪を、滅茶々に引つ掻き廻し始めた。

『何でまた俺はあんな鼠(ある將校の綽名)の所へ行つたんだらう、忌々しい。』兩手で額や顔を撫でながら彼は言つた。『考へても見給へ、一枚も、たつた一枚の歌留多も俺に當らんのだからなあ。』

デニースフはこのとき火をつけて渡されたパイプを取つて、雁首を拳の中に握りしめ、火をばつぱつと散らしながら、そのパイプで床を叩いて叫び続けるのであつた。

『下らん物を賭けて、二倍賭けの物を殺してしまやあがる。』
彼は火をそこいらぢゆうへ撒きちらして、パイプを叩き割るとそのまま抛り出して了つた。

デニースフは暫く黙つてゐたが、不意にきら／＼光る黒い目で、愉快さうにロストフを眺めた。

『せめて女でもありやいゝんだけれど、あそこでは飲むよりほかに仕方がないぢやないか。ああ戦争でも早く始めやいゝんだがなあ。おい、そこにあるのは誰だい？』と彼は扉の方へ聲をかけた。扉の外に立ち止つた重い靴の音と、拍車のがちや／＼といふ響きと、そして恭しい咳拂ひの聲が聞えたので。

『曹長殿です。』とラヴルーシカが言つた。

デニースフは一そう顔を顰めた。

『いやだな。』と彼はいくらかの金貨を入れてある墓口を抛げ出した。『ロストフ、いゝ子だから、幾ら残つてるか勘定して、そして墓口を枕の下へ押し込んでくれ。』と言ひ捨てて、彼は曹長の方へ出て行つた。

ロストフは金を取つて、古いのや新しいのや入りまじつた金貨を機械的に別けて、綺麗に揃へながら勘定を始めた。

『あゝ！ チェリヤーニンか！ 御機嫌よう！ 俺は昨日裸にされちやつたよ。』といふデニースフの聲が次の間から聞えた。

『誰の所で？ ブイコフの所ですか、あの鼠の？……わたしも知つてみましたよ。』いま一人の細い聲が響くと、續いて部屋の中へチェリヤーニン中尉が入つて來た。やはり同じ中隊の將校である。

ロストフは枕の下へ墓口を押し込んで、差し出された小さなじめ／＼した手を握りしめた。チェリヤーニンは出征前に何かの譯で、近衛師團からこちらへ移されたのである。聯隊での彼は品行方正であつたが、人々は彼を好まなかつた。その中でも殊にロストフは、この將校に對するいはれなき嫌悪の念を、抑へることも隠すことも出来なかつた。

『どうです君、僕のグラッチクはどんな風に君に仕へてみますか？』と彼は訊いた。(グラッチクは、チェリヤーニンがロストフに賣つた豫備の乗馬である。)

中尉は決して話してゐる當の相手の目を見た事がない。彼の目はいつも絶えず物から物へ轉じてゐた。

戦 争 と 平 和

『僕は今日君が乗つて行くのを見ましたよ……』

『いや別に、中々いゝ馬です。』とロストフは答へたが、その實、七百留で買つたこの馬は、半分の値うちもなかつたのである。『たゞ左の前足が折れ出しましてね……』と彼は言ひ足した。

『それは蹄が割れたんですよ。何でもありません。わたしが君に教へませう、どんな鎧を打つたらいいか。』

『えゝ、どうぞ教へて下さい。』とロストフは言つた。

『教へますとも、教へますとも、祕密でも何でもありません。全くあの馬に對しては君は僕に感謝しますよ。』

『ぢや、早速つれて来るやうに吩咐けませう。』ロストフはたゞチェリヤーニンの傍を逃げた

さにかり言つて、馬を引いて来るやう吩咐けに行つた。

玄關ではデニソフがパイプを銜へて鬨の上に蹲んだまゝ、何やら報告する特務曹長の言葉を聞いてゐた。ロストフの姿を見ると、デニソフは眉を顰め、チェリヤーニンのゐる部屋を肩ごしに親指で示しながら、ちよつと顔をしかめて厭らしさうに身慄ひした。

『いや實に、あのやつこそさん大嫌ひだ。』と彼は特務曹長がゐるのも構はずに言つた。

ロストフは「僕もです、しかし仕方がありません！」と言つた風に肩を竦めた。そして指圖を置いて置いて、チェリヤーニンの方へ歸つた。

チェリヤーニンは、ロストフが出て行つた時と同じ物臭さうな恰好で、小さな手を擦りながら坐つてゐた。

「よくこんな風な厭味な顔があるものだ！」部屋へ入りしなにロストフは考へた。

『どうです、馬をつれて来るやうに吩咐けましたか？』とチェリヤーニンは立ち上つて、さりげなく邊りを見廻しながら言つた。

『吩咐けました。』

『どうです、それより自分で行つて見ようぢやありませんか。わたしはたゞ昨日の命令の事を、デニソフ大尉殿に訊いて見ようと思つて、ちよつと寄つて見ただけなんです。あなたは命令を受け取られましたか、大尉殿？』

『いや、まだまだ。君はどこへ？』

『いや、わたしはこの人に、装蹄の仕方を教へようと思つて。』とチェリヤーニンは答へた。二人は支關へ出て厩の方へ行つた。中尉は留釘の作り方を教へ、自分の宿舍へ歸つて了つた。ロストフが歸つて見ると、卓の上にはフォトカの壘が置いてあり、腸詰なども轉がつてゐた。デニエソフは卓の前に坐つて、ペンをがり／＼鳴らしながら何か書いてみた。彼は沈んだ顔をしてロストフを見上げて、

『彼女に遣るんだ。』と言つた。

彼はペンを持つた手で卓に頬杖つきながら、自分がいま書かうとしてゐる事を、すつかり口で手取り早く言つて了ふ機會が來たのを悦ぶかの如く、自分の手紙の内容をロストフに喋つてしまつた。

『ねえ、さうだらう、君。』と彼は言つた。『我々は戀をしない間は、ぼんやり眠つてるやうなものだ。我々は塵芥の子と言つてもいゝくらゐだ。……ところが、一たん戀に陥ると、我々は神だ、我々は創造の第一日の如く清淨無垢だ。……一たい誰がやつて來たんだ？ 追つ拂つちまへ。いま忙しい！』と彼はラヴルシカに向つて呶鳴りつけたが、こちらは些かもひるまず彼のそばへ寄つた。

『誰がほかに來るもんですか。御自分で來いと仰しやつたんですもの。曹長殿がお金を取りに來られたのです。』

デニエソフは眉を蹙めて、何か呶鳴りつけようとしたが、黙り込んで了つた。

『困つた事になつたぞ。』と彼は獨りごとのやうに言つた。『あの金入の中に幾ら残つてたかね？』と彼はロストフに訊いた。

『新しい金貨が七枚に、古いのが三枚。』

『あゝくそ、困つたぞ！ おい、何をぼんやり立つてるんだ、しかし野郎！ 曹長をこゝへ寄越せ！』とデニエソフはラヴルシカに叫んだ。

『どうぞ大尉殿、僕の金を使つて下さい、僕んここに少しあるんですから。』とロストフは赧くなつて言つた。

『部下の者から借りるのは厭だ、厭だよ。』とデニエソフはぶつ／＼ぼやいた。

『もしあなたが友達として僕の金を使つて下さらなければ、僕を侮辱することになりますよ。全く僕少々持つてるんですから。』ロストフは繰り返した。

『厭だといふのに。』

デニエソフは枕の下から金入を出さうと、寢臺に近寄つた。

『君どこへ置いたんだい、ロストフ？』

『下の方の枕の底へ。』

『ところが、ないぜ。』

デニエソフは枕を兩方とも床の上へ抛り出した。金入はなかつた。

『こいつは奇態だ！』

『待つて下さい。あなた落しやしなかつたですか?』と言ひ、ロストフは枕を一つづつ持ち上げて、それを振つて見た。

彼はまた掛蒲團を取つてふるつても見た。が、金入はなかつた。

『ぢや、僕が忘れたのか知らん? いや、僕は
大尉殿がいつも寶物か何ぞのやうに、枕の下へ入れるのを思ひ出して』とロストフが言つた。『それで僕もあそこへ入れて置いたんです。一體どこにあるのだ?』彼はラヴルシカに問ひかけた。

『わたしはこゝへ入らなかつたのですから、あなたがお置きになつた所にある筈です。』

『だつて、ないぢやないか?』

『あなたはいつも出たら目な所へ投げ出して、そして直ぐ忘れてお了ひなさるんですよ。衣囊かぶしを御覽なさいまし。』

戦 争 と 平 和

『いや、もし僕が寶物の事を思ひ出さなかつたら、とにかくだけれど、』とロストフは言つた。『僕はこゝへ置いたのを覚えてゐるんだ。』

ラヴルシカは寢床をすつかり引つくり返して見たり、寢臺や卓の下を覗いて見たりして、部屋ぢゆうを掻き廻した後、部屋の眞ん中へ突つ立つた。デェニソフは無言のままラヴルシカの動作を見守つてゐたが、やがてラヴルシカが「どこにもありません」と言つて、びつくりしたやうに両手を擡げた時、彼はロストフの方へ振り向いた。

『ロストフ、子供のやうな眞似はもう……』

ロストフは自分の上にデェニソフの視線を感じ、ちよつと目を上げたが、またすぐその瞬間に伏せて了つた。今までどこか咽喉の下の邊に閉ぢ込められてゐた血が、一時に彼の顔と目へ押し寄せたのである、彼は息をつくことが出来なかつた。

『それに部屋の中にも、中尉殿とあなたのほか、誰一人ゐなかつたのですから。どこかその邊に……』とラヴルシカが言ふ。

第 一
『さあ、貴様、こん畜生、よくその邊をきり／＼舞して探して見ろ。』デェニソフは顔を紫色にしながら、今にも從僕に飛び掛りさうな、恐ろしい身振をしてから叫んだ。『金入を出せ、さもなくば打ちのめすぞ! どいつもこいつもみんな打ちのめしてくれ!』

第 二
ロストフはデェニソフを見廻しつゝ、服の釦を掛け始めた。そして刀を吊つて帽子を被つた。『さつきから言つてゐるぢやないか、金入が出なかつたら承知しないぞ。』とデェニソフは從卒の肩を掴んで振り廻しながら、壁へぐん／＼押し附け押しつけ呶鳴るのであつた。

編
『大尉殿、そいつを打つちやつてお置きなさい。僕は誰が取つたか知つてゐます。』ロストフは戸口へ近づきつゝ、やはり伏せた目を上げないでかう言つた。

デェニソフは立ち止つてちよつと考へたが、ロストフの暗示を了解したらしく、急いでその手をつかまへた。

『馬鹿な!』彼は繩のやうな血管が首筋や額に浮くほど、大きな聲で叫んだ。『おい、君は一たい氣でもちがつたのか、俺はそんな事をさせやしない。金入はこゝにあるんだ! 俺が今この

極道ものの生皮をひん剥いてくれるから。今に出して見せるよ。』

『僕は誰が取つたか知つてゐます。』とロストフは慄へ聲で繰り返し、戸口へ向けて歩き出した。

『俺の言つてる事が分らんのか、そんな馬鹿をさしやせんぞ!』ヂェニソフは若い見習士官を止めようとして、飛び掛りながら喚いた。

しかしロストフはその手を振りほどいた。そして、まるでヂェニソフが自分に取つて、不倶戴天の敵でもあるやうに、さも憎々しげに眞正面まともにきつと彼を見つめた。

戦 争 『大尉殿は自分で自分の言つてる事が分りますか?』と彼は慄へ聲で言つた。『僕より他には、誰も此部屋の中にゐなかつたぢやありませんか。だから、もしさうでないとすれば、つまり……』

和平 彼は終ひまで言ふことが出来ず、そのまゝ部屋を駆け出して了つた。

和 『ちよつ、こん畜生、勝手にするがい、どいつもこいつも。』といふのが、ロストフの聞いた最後の言葉であつた。

ロストフはヂェリヤーニンの宿舎へやつて來た。

『中尉殿はおいでになりません。司令部へお出掛けになりました。』とヂェリヤーニンの從卒が言つた。『それとも何か變つた事でも出來たのでありますか?』見習士官のたゞならぬ顔色に驚いて、從卒はさう訊いた。

『いゝや、何も。』

『つい先ほどお出掛けになつたばかりです。』と從卒は言つた。

軍司令部はザルツェネックから三露里ばかりの距離にあつた。ロストフは宿舎へも寄らずに、馬を借りて司令部の方へ出かけた。司令部の置いてある村に、將校連を常客にしてゐる酒場があつた。ロストフはその酒場へ行つてみた。と、入口の階段の傍にヂェリヤーニンの馬が繋いであつた。

第 酒場では奥の方の部屋に、ウインナ・ソーセエジの皿と葡萄酒の壺を前に据ゑて、中尉が陣取つてゐた。

二 『あ、君もやつて來ましたね!』と、高く肩を吊上げてほゝ笑み乍ら、ヂェリヤーニンが言つた。

編 『えゝ。』とロストフは應へたが、この一言を言ふのに非常な努力を要したらしかつた。彼は隣の卓に座を占めた。

二人は暫く無言であつた。部屋の中には二人の獨逸人と、一人の露西亞將校があつた。みんな一様に黙り込んで、刀ナイフの皿に當る響と、中尉がむしやく口を動かす音が聞えるのみであつた。ヂェリヤーニンは食事を了へると、衣囊ポッケットから二重づくりの墓口を取り出して、振り返つた小さな白い指で、食ひ違ひになつた口金を押し開き、金貨を一つ撮み出し、眉を吊り上げながら、給仕ボーイに渡した。

47 『どうか早くしてくれ給へな。』彼はかう言つた。

金貨は新しかつた。ロストフは立ち上つて、チェリヤーニンに近寄つた。

『ちよつと僕にその墓口を見せて下さい。』と彼は低い、聞えるか聞えないかの聲で言つた。チェリヤーニンは目をきよろ／＼させながら、それでもやはり肩を高く吊り上げたまゝ、墓口を渡した。

『さう、ちよつといふ墓口ですよ……さう……』と彼は言つたが、不意にさつと蒼くなつて、『さあご覧下さい。』と附け足した。

戦 争 羅 士 托 夫 は 墓 口 を 手 に 取 っ て、その墓口と、中に入つてゐる金と、チェリヤーニンを代るがはる見較べた。中尉は例の癖であたりを見廻してゐたが、急に恐ろしく愉快さうな顔つきになつた。

と 『維納へ着いたら、何もかもそつくら撒いて行くんだが、今こんなやくざな町にばかりゐる中はまるで費ひ途がないですよ。』と彼は言つた。『さあ、返して下さい、君、僕はもう出掛けるから。』

和 平 羅 士 托 夫 は 押 し 黙 っ て ゐ た。

『君、どうしたんです？ やはり食事をしようと言ふんですか？ 中々うまく食べさせてくれますよ。』とチェリヤーニンは語り續けた。『さあ、寄越しなさいと言ふのに。』

彼は手を伸ばして墓口を掴んだ。ロストフはそれを手から放した。チェリヤーニンは墓口を取つて乗馬袴の衣囊ホッケツツにしまひながら、肩を吊り上げ、かすかに口を開いた。その様子は、「左様、左様、自分で自分の墓口を衣囊に藏つてゐるんですよ。全くのところ、つまらんお話で、何も人の

知つた事ぢやないです。」と言ふやうであつた。

『え、どうです、君？』彼は歎息して、吊り上げた肩の下から、ロストフの目をちらと見て言つた。

何か一種の光が電光の閃きにも似た早さをもつて、チェリヤーニンの目からロストフの目の中へ流れ込んだ。と、今度はその反對に、またその反對に……而もそれがほんの一轉瞬の間に行はれたのである。

第 一 『こつちへ来て下さい。』ロストフはチェリヤーニンの手を取つてかう云つた（彼は殆ど相手をしよ曳くやうにして、窓の傍へつれて來た）。『これはデュニソフ大尉の金です。あなたはこれを取つて來たのです……』と彼は相手の耳の上で囁いた。

編 二 『何ですと……何ですと……どうして君はそんな失敬な事を！ 何を言ふんです……』とチェリヤーニンは呟いた。

しかしこれらの言葉は哀れつばい絶望の叫びか、赦しを求める歎願のやうに響いた。この聲の響きを聞くや否や、ロストフの心から大きな疑惑の石がとれたやうな氣がした。彼は歡喜の念を覺えたが、それと同時に、自分の前に立つてゐるこの不幸な男が、可哀さうにもなつて來た。しかし一たん火蓋を切つた事件は、結着まで持つて行かねばならなかつた。

『こゝでは人が何を考へるか分らないから、』チェリヤーニンは帽子を取つて、小さな空間あきまへ足を運びながら呟いた。『よく分るやうに話をしなければ……』

『僕知つてゐます。僕證明してお目に掛けます。』とロストフが言つた。

『僕は……』

おびえたやうな蒼白いチェリヤーニンの顔の筋肉は、一本々々ふるへ始めた。目は依然としてきよときよと動いてゐたが、それはどこかずつと下の方で、ロストフの顔まで上らなかつた。と、急にすゝり泣きの聲が聞えた。

『伯爵……未来のある若い男の一生を滅さないで下さい……さあ、こゝにあの因果な金があります。どうぞ取つて下さい……』と彼は卓の上に金を抛り出した。『わたしには年取つた父と母があるんです！』

とロストフはチェリヤーニンの視線を避けながら、金を拾ひ上げ、一言も發しないで部屋を出て行つた。が、戸口の所で立ち止つて、またつか／＼と引つ返した。『あゝ本當に、』と彼は兩眼に涙を浮かべながら言つた。『君はどうしてそんな事をする氣になつたんです？』

『伯爵……』チェリヤーニンは見習士官の方へ近寄りながら言つた。

『僕に觸らないで下さい。』とロストフは身を避けながら口走つた。『もしお入用なら、この金を取つてお置きなさい。』彼は墓口を相手に投げつけて、酒場から駈け出した。

五

その晩、デニエーソフの宿舍へ中隊の將校たちが集まつて、熱した烈しい調子で何やら論じ合

つてゐる。

『分らん、ロストフ君、君は聯隊長に謝罪しなけりやならんと云つてゐるんだよ。』脊の高いい二等大尉が、興奮して眞赤になつてゐるロストフに向つてかう言つた。毛の胡麻鹽になりかかつた、鼻髭の大きな人で、皺がよつてゐるけれど輪廓の大まかな顔だちである。

この二等大尉キルステンは決闘のために、二度まで奪官されて列兵になり下り、二度とも勤め上げて復官した人である。

第

『僕はたとへ相手がどんな人であらうと、嘘をつくなどと言はれて、黙つてゐる譯に行きませぬ！』とロストフは叫んだ。『聯隊長が僕を嘘つきだと言はれたから、僕も聯隊長を嘘つきだと言つたんです。えゝ、その事實は依然として變りありません。當番なら毎日でも僕に吩咐けるが、禁錮にされたつて構やしない。だが、僕は誰が何と言はうと謝罪なんかしやしません。もしあの方が聯隊長だからつて、僕に満足を與へる價値がないと考へるなら……』

編

『まあ君、待ち給へ、まあ君、僕のいふ事を聞き給へ。』と二等大尉は長い髭を撫でながら、持前の低聲でまた遮る。『君はほかの將校のゐる前で、ある一人の將校が泥棒を働いたなんて、聯隊長に言つたぢやないか……』

51

『ほかの將校のゐる前で、ふいと話がそちらへ外れたんだから、何も僕の罪ぢやありません。いや、或ひは他の將校の前で話すのは、いけなかつたかも知れませんが。しかし僕は外交家ぢやありませんから。それがために僕は輕騎兵になつたんですよ。僕はこゝへ來れば、そんな微妙な

「駄引きは不必要だと思つてみました。それなのに聯隊長は、僕が嘘をつくなんて言ふんですもの……いや、僕は聯隊長に満足の出来る方法を講じて貰ひます……」

「それはみんなその通りだよ、決して誰も君の事を、臆病者だとも何とも言やしない。それに問題はそんな所にあるのぢやない。まあ君、デューニソフ大尉にも訊いて見給へ。そもく見習士官が聯隊長に満足を要求するなんて、一體なんといふことだらう……」

デューニソフはこの話に干渉したくないらしい様子で、沈みがちな顔附をし、口髭を噛みながら傍聴してゐたが、二等大尉の間に對しては頭を振つて見せた。

「君は他の將校のゐる前で、あんな醜聞を聯隊長の耳に入れたから、ボクダーヌイチも（みんな聯隊長の事をボグダーヌイチと呼んでゐた）、君をやり込めたんだよ。」と二等大尉は續けた。

「やり込めたんぢやありません。僕が嘘をつくと言つたんです。」

「しかしまあ、君も隊長に随分ばかな事を言ひ散らしたんだから、やつぱり謝罪する必要があるよ。」

「決して、決して！」とロストフは叫んだ。

「どうも君がそんな事を言はうとは思ひ掛かなかつたよ。」と二等大尉は眞面目な嚴かな調子で言つた。「君は謝罪しないと云ふけれどね、君は隊長一人に對してのみならず、聯隊全部、僕ら一同に對して責任があるんだよ。それはかういふ譯だ。もし君がよく思案して、この事件に就いて如何なる態度を取るべきか、みんなに相談してくれたら免に角だが、君はいきなり、而も將

校たちの前で打ちまけて了つたぢやないか。この際、聯隊長はどうしたらいいか？ その將校を軍法會議に渡して、聯隊全部に泥を塗るべきだらうか？ たつた一人のやくざ者のために、聯隊全部の恥を曝すべきだらうか？ ぜんたい君の考へではさうなのかね？ ……ところが、僕等の考へはさうぢやない。そこでボグダーヌイチはさすがに感心だ、君が嘘をつくと言つたんだ。それは勿論、不快に相違ないさ。けれど君、仕方がないよ、君がそゝつかしいんだものね。で、今からして皆が事件を揉み消さうとしてゐるのに、君は何かしら下らん依怙地のために謝罪を拒んで、何もかも喋つて了はうとしてゐる。君は當直を命ぜられたのが口惜しいだらうけれど、あゝした年長の潔白な上長官に謝罪するのが一體なんだね？ ボグダーヌイチは何と言つても、とにかく高潔で勇敢な、世故に長けた聯隊長だ。それでも君は謝罪するのが口惜しいといふのかい？ 聯隊に泥を塗るのは何ともないのかい？」二等大尉の聲は慄へ始めた。「ねえ、君は聯隊の中では昨日今日の人間だ。今はこゝにゐるけれど、明日にもどこかの副官に轉任されて行つちまふ。だから君は、「バヴログラードの將校連の中には泥棒がある！」と言はれたつて構やしないだらう。ところが、僕等にとつては、どうだつていゝぢや濟まん。え、さうぢやないか、デューニソフ君？ どうでもよくはないだらう？」

デューニソフは時々そのぎらく輝く黒い目で、ロストフの方を見やりながら、始めから終ひまで黙つたまゝ身動きもしなかつた。

「君は自分の依怙地が大切だから、謝罪するのは厭だらうが、」と二等大尉は語をついだ。「わ

れわれ老人連はこの聯隊で成人して、事によつたら、この聯隊で死ぬかも知れないんだから、隊の名譽の方が大切だ。聯隊長もこの事をよく知つてゐられる。あゝ、本當に大切なんだよ、君！ね、君の考へはよくない、實際よくない！君が腹を立てようと立てまいと、僕はいつでも本當の事を言ふよ、實際よくない！』

二等大尉は席を立つて、ロストフに背を向けた。

『實際だ、違ひない！』とヂェニーソフは飛び上りながら喚いた。『どうだロストフ！ さあ、どうだ。』

戦

ロストフは赧くなつたり蒼くなつたりして、將校たちの顔を代るがはる見較べてゐた。

と

『違ひます。違ひます……皆さんそんな風に取らないで下さい……僕はよく分つてゐるんです。

和

僕の事をそんな風に考へて貰つては困ります……僕は、僕に取つて……僕は聯隊の名譽のために……えゝくそ、僕はそれを事實に於て證明します、僕に取つては聯隊旗の名譽が……いや、何のかの云ふことはない、全く僕が悪かつたです！』彼の兩眼には涙が浮んだ。『僕が悪かつたんです、何もかも僕がみんな悪いんです……さあ、この上どうしろと仰しやるんですか？』

『いや、さうなくちやならんよ、伯爵。』二等大尉はくるりと向きを變へて、大きな手で彼の肩を叩きながら叫んだ。

『だから俺が君に言つたのさ。』ヂェニーソフは喚いた。『この男は、實に可愛い、男なんだよ。』

『それでこそ、さすがに君だよ、伯爵。』今の告白に對して尊稱を用ひると言つたやうに、二等大尉はから繰り返した。『ちや、これから行つて謝罪して來給へ、ね、伯爵。』

『皆さん、僕は何でもします、誰にも口答へなぞしやしません。』とロストフは哀願する様な調子で言ひ出した。『しかし謝る譯には行きませんが、どうしても出来ません、何と思はれようと仕方がありません！ どうして僕に謝罪が出来ますか、子供みたいにお詫びが言へますか？』

ヂェニーソフは笑ひ出した。

第

『かへつて君のためならんよ。ボグダーヌイチ氏は意地わるく物事をよく覚えてゐるから、そんな強情を張ると仇を討たれるぞ。』とキルステンは言つた。

二

『誓つて強情ぢやありません！ これがどんな心持か、僕には言へないんです、とても言へない……』

編

『ちや、君の勝手にし給へ。』と二等大尉は言つた。『ときに、あの極道野郎はどこへ行つたね？』と彼はヂェニーソフに訊いた。

『假病を使ひやがつた。あす命令で除名になる筈だ。』とヂェニーソフが答へた。

『あれは病氣だね、ほかに解釋の仕様がな。』と二等大尉は言つた。

『病氣だらうと病氣でなからうと、もし今後おれの目にはひつて見ろ、ぶち殺してくれるんだ。』ヂェニーソフは猙獰な聲で呶鳴つた。

部屋の中へジェルコフが入つて來た。

『君どうして?』と不意に將校連はその方へ振り向いた。

『進軍だ! 進軍だ! マックが降伏して了つた。而も全軍を掲げてすつかりなんだ。』

『嘘をつけ!』

『この目で見て来たんだよ。』

『なんだ? 生きたマックを見たのかい? 手も足もついてる?』

『進軍だ! 進軍だ! こんな報告を持つて来たんだから、須らく一壘拔くべしだ。貴様どうしてこゝへやつて来たんだ?』

『實はマックの野郎のお蔭でまた聯隊へ戻されたんだよ。奥太利の將軍が苦情を言やがつたのさ。僕はマックの到着を祝つただけなんだがね。君どうしたんだい、ロストフ、まるで風呂から上つたやうな顔をしてさ?』

『うちでは君、もう昨日から豪いごつた騒ぎよ。』

やがて聯隊副官が入つて、ジェルコフの齎した報道を確めた。明日進出との命令である。

『諸君、進軍だぞ!』

『やれ／＼有難い、全く坐りくたびれちやつた。』

六

總指揮官クトッゾフはインナ河や、^{*}トラウン河の橋梁を、味方が渡り終ると共に破壊しながら、

維納に向つて退却した。十月二十三日ロシア軍はエンス河を渡つてゐた。軍の輜重や砲兵や歩兵の縦列が、その日の中頃にはエンスの町を貫いて、川の兩岸に續いた。

一それはなま暖い秋らしい雨もよいの日であつた。橋梁掩護のために砲兵中隊を置いた高地から、限りもなく展開されてゐる廣々とした遠望は、突然なゝめに降りつける雨のために、レース織りの帷を引いたやうになるかと思ふと、また急にかつと展けて来る。そして太陽の光に事々物々は、悉く漆でも塗つたやうになつて、遠く鮮かに見分けられるのであつた。足もとには白い家、赤い屋根、寺院、橋などを點綴した小さな市街が手に取るやうに見える。橋の兩側には露西亞軍の大集團がうよく／＼と流れ動いてゐる。ドゥナイ河の一曲りしてゐる所には、船や島や城などが見渡され、城の庭はエンスからドゥナイへ落ちる水に圍まれてゐた。ドゥナイの左岸は岩の多い切り岸になつてゐて、松の林がその上を蔽うてゐる。緑の梢が重なり合つてゐる遠い頂は神祕めかしい趣を帯び、^{ハヤ}峽になつて入り込んだ所は蒼みがかつて見える。斧を入れた事のないらしい野生の松林の蔭からは、僧院の塔が擡んで見える。エンス對岸の遠い山の上には、敵の斥候騎兵が指點された。

高地に据ゑた大砲の間には、後衛の指揮をしてゐる將軍が、幕僚の將校を一名つれて、望遠鏡で地形を觀望してゐる。それから少し後ろの方には、總指揮官から後衛へ派遣されたネスギーツ

* プラウナ市附近にあり
** リンツ市附近にあり

キイが砲身に腰を掛けてゐる。ネスギーツキイについて来た哥薩克が袋と水筒を渡すと、ネスギーツキイは將校たちに、菓子や本物のドッペリ・キューメリー酒を振舞つた。將校たちは膝をついたり、濕つた草の上に胡坐を組んだりして、嬉しさに彼を取巻いた。

『あすこへ城を建てた埃太利の王は、まんざら馬鹿でもなかつたと見える。中々いゝ場所だ！ どうして皆さん食べないのです？』とネスギーツキイは言つた。

『どうも有難う、公爵。』と一人の將校が答へた。察するところ、かういふ立派な司令部の役員と話すのが、愉快で堪らぬらしかつた。『實に見事な場所ですね。僕等もあの庭の傍を通りま

したが、鹿を二匹見つけましたよ。それに家も全く壯麗なものですよ！』

『御覽なさい、公爵』といま一人の將校が言つた。この男はもう一つ菓子を撮みたいのだけけれど、何だか氣が咎めるので、地形を観察してゐるやうな風をしてゐた。『御覽なさい、もう味方の歩兵があすこまで行つて了ひました。ほら、あの村の向うの草場で、三人の男が何やら引つ張つてゐますよ。あいつ等この宮殿を滅茶々々にして了ふでせうよ。』いかにもわが意を得たりといふやうに、彼はさう言つた。

『それもさうですね。』とネスギーツキイは云つた。『いや、しかしわたしの希望を打ち明けてお話するとですね。』美しい沾ひのある口で菓子を噛みながら彼は附け足した。『ほら、あすこへ入らなさい、彼はさう言つた。』

彼は山の上に見える塔のついた僧院を指さすのであつた。彼はかり云つてはゝ笑んだが、その

目は細くなつて輝き出した。

『どうです。面白いでせうな、皆さん！』

將校たちは笑つた。

『あすこの尼さんたちを、せめて、ちよつと脅かしてやりたいですね。何でも若い伊太利娘が大分ゐるやうな話ですよ。全くのところ、五年くらゐは棒に振つても構ひませんねえ！』

『實際、尼さん連だつて退屈でせうからなあ。』ほかの仲間より少し大膽なのが、笑ひながらかう言つた。

その間に、前に立つてゐた幕僚將校は、將軍に向つて何やら指さして見せた。將軍は望遠鏡を覗いて見て、

『ふん、果してさうだ、果してさうだ。』望遠鏡を目から離して肩を竦めながら、將軍は腹立たしげに言つた。『果してさうだ、渡河點を砲撃しようとしてゐる。あすこではまた、何故あんなに愚圖々々してゐるんだらう？』

對岸に敵がゐる、その砲兵隊が牛乳のやうな白い煙を立ててゐるのは、肉眼でもよく見えた。煙に續いて遠い發射の音が響き渡つた。そして味方の軍隊が渡河を急いでゐる様も目に入った。ネスギーツキイはふうと息をついて立ち上り、はゝ笑みながら將軍の方へ近づいた。

『閣下、一口めし上りませんか？』と彼は言つた。

『どうも工合が悪いな。』將軍は彼の言葉に返辭しないでかう言つた。『味方が愚圖々々してゐる

もんだから。』

『一つ出掛けて来ませうか、閣下?』とネスギーツキイは言った。

『さうだね、出掛けて見てくれ給へ、御苦勞だか。』もう前に一度くはしく命令した事を、また繰り返しながら將軍は言った。『それから、これはもう命令した事なんだが、輕騎兵にさう言つてくれ、最後に渡つて了つてから橋を焼くやうにな。あゝ、それから橋の上にある燃焼物體を、もう一遍よく見るやうに。』

『承知いたしました。』ネスギーツキイは答へた。

彼は馬をもつた哥薩克を呼び、袋や水筒を片附けるやうに命じた後、その重い體を輕々と鞍の上に据ゑた。

戦 争 と 平 和

『さあ愈々、尼さん達の所へ行きますよ。』微笑を浮かべながら自分の方を眺めてゐる將校達にさう言つて、彼はうね／＼した徑に沿うて山を下り始めた。

『どうだね、どの邊まで届くか一つやつて見るかね、大尉!』將軍は砲兵將校に向つて聲をかけた。『退屈さましになつてよからう。』

『集まれ!』と將校は號令を下した。

一瞬にして砲卒らは、愉快げに焚火の蔭から駆け出し、裝填を始めた。

『第一火砲うて!』といふ號令が聞えた。

と、第一號車が勢よく後ろの方へ跳ね返つた。金屬性の餘韻を引いて砲ががんと鳴つたと思ふ

と、榴彈は山の下にゐる友軍の頭上を、ひゆうと掠めて飛び去つた。が、遠く敵までは届かず、煙で落下の場所を示すと同時に、爆發した。

兵士の顔も將校の顔も、この音と共に急に愉快さうになつた。一同立ち上つて、たなごころ掌を指すやうに見える友軍の行動と、近づき來たる敵軍の行動を觀察にかゝつた。太陽はこの瞬間すつかり雲の間から出て了つた。そしてこの美しい一發の大砲の響と、まぶしい太陽の輝きは互に溶け合つて、一つの勇ましい浮々した印象を生むのであつた。

第 七

二 編
既に敵彈が二箇所かすめて行つたので、橋の上は恐ろしい混雜であつた。橋の中ほどではネスギーツキイが馬からおりて、肥満した體を欄干に押し附けられたまゝ立ち往生してゐる。彼は苦笑しながら、後ろに立つてゐる哥薩克を振り返つて見た。哥薩克は二頭の馬の手綱を控へて、三四歩うしろの方に佇んでゐる。ネスギーツキイ公爵がちよつと動き出さうとすると、すぐまた兵隊や輜重が突つ掛つて來て、またもや彼を欄干に押し附けるのであつた。彼はもう苦笑してゐるより仕方がなかつた。

『おい／＼、どうしようつてんだ、君!』車輪や馬のすぐ傍で押し合ひへし合ひしてゐる歩兵の方へ、車輛をもつて突つ掛つて來る砲兵輜重卒に向つて、哥薩克はかう言つた。『何て酷い奴だ! おい、待つてくれんか。見る、閣下の通り路がないぢやないか。』

しかし、砲兵輜重卒は閣下といふ呼び聲にびくともしないで、自分の道を邪魔する兵士等に呶鳴つた。『おい兄弟、左の方へ寄つてくれんか、おい、待て！』けれども兄弟等は肩と肩を摺り合し、銃剣と銃剣とをからませながら、蟻の這ひ出る隙もない一つの塊りとなつて、ぞろ／＼橋の上を動いて行く。ネスギーツキイ公爵が欄干から下を覗くと、あまり高くはないけれど騒々しい音を立てて、矢のやうに流れて行くエンスの河波が、相寄つて一緒になつたり、皺を作つたり、橋桁の所で曲線を描いたりしながら、互に追つ掛けつことをしてゐるのが目に入つた。眸を橋の方へ轉じると、こゝにも同じ單調な兵士の生きた波が動いてゐる。房のついた紐、日蔽の被さつた軍帽、背囊、銃剣、長い銃、軍帽の下から見える顴骨の高い、頬の肉の落ち込んだ、疲れ切つて無心の表情を浮べた顔、橋板の上に持ち込まれた粘々しい泥を踏んで動く足——かうした單調な兵士の波の間に、さながらエンスの河上に浮ぶ白い泡の如く、兵隊とは何處か違つた容貌を備へたマンントの將校が、兵士らの間を摺り抜けて行く。また時とすると、河面をくる／＼舞つて行く木片のやうに、徒歩の輕騎兵や從卒や町の住民などが、歩兵の波に取巻かれて橋上を流れて行く。またどうかすると、河を流れ下る丸太のやうに、ふちまで荷物を積み上げて、皮の蔽ひをかけた中隊行李、もしくは將校用行李が、四方から人波に取巻かれながら泳いで行つた。

『まるで堤防が切れたやうだなあ。』哥薩克は駄目だと言つたやうに、立ち止つてかう言つた。『まだ大勢あつちをるかね？』

『百萬に一人足りねえ！』折ふし傍ちかく通り掛つた、ぼろ／＼外套の剽輕な兵士が、瞬きしながらさう言つて姿を隠した。その後からまた別な年取つた兵士がやつて來た。

『今に見ろ彼奴が（彼奴とは敵の事である）この橋を目かけて火玉を浴びせるから。』老兵士は仲間の者に向つて、沈んだ調子で言つた。『身うちの痒いのも忘れて了はあ。』

やがてこの兵士も通り過ぎた。それに續いて、いま一人の兵士が貨車に乗つてさしかゝつた。

『どこへ脚絆を突つ込みやあがつたんだらう、こん畜生！』一人の從卒が跣足で車の後から歩いて走りながら、荷物の中を掻き廻し掻き廻しかう言つた。

と、この男も貨車と共に過ぎて了つた。その後から一杯ひつ掛けたらしい、陽氣な兵士が二人歩いて來た。

二

『どうだつたい、君、彼奴が床尾でもつて小つびどく擲りつけた事はどうだ、齒の眞上をよ……』高く外套の裾をまくし上げて、大きく手を振り乍ら、一人の兵士が嬉しさに言ふ。

編

『お、それよ、全く、結構なハムだつたよ。』いま一人がから／＼と笑ひながら答へる。この連中もまた行つて了つた。で、ネスギーツキイは、誰が齒の眞上を擲られたのか、ハムが一體何に關係してゐるのか、知ることが出来なかつた。

『何だつてかう慌てやがるんだらう。敵に熱い奴を一つお見舞されたので、みな殺しにされるところでも思つてるんだらう。』とある下士が腹立たしげな、非難するやうな調子で言つた。

『なあ、伯父貴、あの俺の傍をひうと飛んで行つた時はどうだつたらう、その、彈丸がよ。』大きな口をした若い兵隊が、やつとの事で笑を怵へながら言ふ。『俺ア氣が遠くなつちまつたぜ。』

全く本當におつ魂消ちやつたよ、桑原々々！』まるでこの兵隊は自分がおつ魂消たのを、自慢でもするやうな調子であつた。

これも忽ち通り過ぎた。その後から、今までのとすつかり風の違つた貨車が續いて來た。それは家一軒つみ込んだかと思はれるほど、かさばつた獨逸式のフォルシュパンが、二頭の馬に曳かれて來るのであつた。獨逸人の追つて行くこのフォルシュパンの後ろには、乳房の大きな美しい斑の牝牛が繫がれてゐた。羽根蒲團の上には乳呑兒を抱へた老女と、頬の紫色に見えるほど赤い、丈夫らしい若い獨逸娘が坐つてゐたが、これは見受けたところ土地の住民で、立退きのため特別に通行を許されたものらしい。兵士らの目は一齊に二人の女へ向けられた。そして車がのろのろと通り過ぎる間ぢゆう、兵士らの言葉は悉くこの女達に關係してゐた。人々の顔には殆ど一様にこの娘に關する淫な想念を現はす微笑が浮んでゐた。

『やい腸詰野郎、やはり立ちのいてやがるな！』

『別嬪さんを賣らないか。』言葉尻に力を入れて、いま一人の兵隊が獨逸人に向つてさう言つた。

こちらは伏目がちに腹立たしげな、しかし憎えたやうな風つきで、大股に歩いて行つた。

『ちえツ、めかしてる事はどうだ！ よう／＼、こん畜生！』

『フェドートフ、貴様あいつらんとこの宿舎に行つたらいゝだらう。』

『素敵でねえか、おい！』

『お前さんどこへ行くんだね？』林檎を食べてゐた歩兵の將校が、やはり半ばほゝ笑んで、美しい娘を眺めながら訊ねた。

獨逸人は目を閉ぢて、分らんといふ様子をして見せた。

『ほしかつたらやらうか。』と、娘に林檎を出しながら將校は言つた。

娘はにつこり笑つて受け取つた。ネスギーツキイは車が行つて了ふまで、多分に洩れず橋の上にあつたすべての人と同様に、女達から目を離さなかつた。女たちが通り過ぎて了ふと、またもや同じやうな兵士等が、同じやうな話をしながら、そろ／＼歩いてゐたが、遂に一同びつたり歩みをとめて了つた。よくある事だが、橋の出口の所で中隊行李の馬が濫り始めたので、群集は悉くそれを待つてゐなければならなかつたのである。

『何だつてぼんやり突つ立つてるんだい？ 規律も何もあつたもんぢやねえ！』と兵士らは罵つた。『何をそんなに押すんだい？ こん畜生！ ちつとも待つてることが出來ねえんだ。敵が橋を焼いたらいゝ面の皮だぞ。見ろ、將校を押し付けて了つたあ。』立ち止つた群集は互に顔を見合せつゝ四方八方からがや／＼騒ぎ立て、次第々々に出口の方へ押して行く。

橋の下のエンスの河水を見下した途端、不意にネスギーツキイは、自分に取つて新しい一種の音響を耳にした。それは何かしら急激に近づいて來る……何かしら大きな……何かしらばちやりと水の中に落ちた物の音であつた。

『やい、どこへ飛ばすんだ！』そば近く立つてゐた一人の兵士が、音のした方を振り返つて見

ながら、いかつい調子で言った。

『早く通つて了へつて元氣をつけてくれるんだよ。』といま一人が不安らしい聲で言った。

群集はまた動き始めた。ネスギーツキイは、今のは砲弾だったな、と氣がついた。

『おい、哥薩克、馬を寄越せ！』彼は叫んだ。『おいこら！ どうかんか！ 少しどいてくれんか！ 通してくれ！』

彼は一方ならぬ苦心をして馬の傍まで辿りついた。そして絶えず叫び續けながら進み始めた。

兵士らは彼に道を譲らうとして片寄るが、またしても足が挫め附けられて痛いほど、彼の方へ詰め寄せて来る。それも近くにゐる者が悪いのではなかつた。彼ら自身、まだく酷く押し附けられてゐたのである。

和平と

『ネスギーツキイ！ ネスギーツキイ！ おい、やつこさん！』この時うしろの方からかう呼び掛ける、しや嘎れ聲が聞えた。

ネスギーツキイは振り返つた。すると、ぞろ／＼動いて行く歩兵の生きた肉塊に隔てられたツシカ・デニーツフの赭ら顔が、十五歩ばかり後ろに見えた。黒い髪は蓬々として、軍帽を阿彌陀に被り、輕騎兵服は氣取つて肩の上にちよつと羽織つたばかりである。

『君、こいつらに——この畜生らに道を譲るやうに命令しないか。』デニーツフは發作的の興奮状態にあるらしく、白眼が血走り瞳が炭のやうに黒い目を輝かして四方に配りながら、顔と同じやうに赤い、手袋なしの小さな手で、鞘を拂はない刀を握つて振り廻しつゝ叫んだ。

第

『おい！ ヴーシャ』とネスギーツキイは嬉しさに答へた。『一體君はどうしたんだい？』
『自分の中隊を通過させる事が出来ないんだ。』憎々しげに白い齒を剝いで、逸りに逸つた美しい黒毛のベドゥインに拍車を當て乍ら、ツシカ・デニーツフは叫んだ。ベドゥインはのべつ銃劍がぶつ突かるので、耳をびく／＼と動かし、鼻を鳴らし轡から泡を四方に撥ねながら、蹄で橋板をこつ／＼蹴つてゐた。もし乗り手が許してくれるなら、欄干を越えて橋の外へ躍り出しもし兼ねない勢であつた。『これはまあ、何といふこつた。まるで羊だ！ 寸分たがはず羊だ！ どれろ……通さんか……止め、こら貨車、畜生！ 刀で叩き斬るぞ！』全く刀を抜き拂つて振り廻しながら、彼はかう呶鳴つた。

二

兵士等はびつくりした顔附で一塊りに寄り合つた。で、デニーツフはネスギーツキイと一緒になれた。

編

『君は今日どうしてきこしめさなかつたんだい？』デニーツフが近寄つた時、ネスギーツキイはさう言つた。

『一杯やる暇も戴けやしないんだ！』とツシカ・デニーツフは答へた。『一日ぢゆう、そらあつちだ、そらこつちだと、聯隊を引き廻されてばかりゐるんだよ。戦争なら戦争らしくやつたらいゝんだ、本當にこれは何といふこつた！』

『君は今日ばかりは、いからぢやないか！』彼の新しい上衣や鞍褥を見廻しながら、ネスギーツキイは言つた。

デエニーツフは微笑し、背囊から香水の匂ひのふん／＼する手巾を取り出して、ネスギーツキイの鼻先へ突き附けた。

『だつて君、これから晴れの戦争に出掛けて行くんだものな！ 鬚も剃つたし、齒もみがいたし、香水もつけたしよ。』

哥薩克を随へたネスギーツキイの堂々たる風貌と、刀を振り廻して亂暴にわめき散らすデエニーツフの權幕は大分き／＼目が見えて、彼等は遂に橋の向う側へ摺り抜け、歩兵の進行を止めることが出来た。ネスギーツキイは、命令を傳へるべき聯隊長を橋の袂で見附けた。任務を果すと、彼はそのまま後へ引つ返した。

と 争 戦
デエニーツフは通路を切り開いて、橋の入口に立ち止つた。友の方へ行かうとあせつて足踏してゐる牡馬を鷹揚に抑へながら、彼はこつちへ向けて動いて来る中隊を眺めやつた。ほんの二三頭の馬が疾驅するやうな、澄み渡つた蹄の音が橋板の上に響き始めた。將校を先頭にして、一列四人づつ並んだ中隊が橋の上に續いて、對岸へ出始めた。

行進を止められた歩兵連中は、橋の袂に踏みにじられた泥の中でうよ／＼しながら、兵科の違つた軍隊が一緒になつた時、普通感じ合ふやうな一種特別な反感と冷笑を抱きつゝ、整然と自分たちの傍を通り過ぎる、清楚な洒落た扮装をした輕騎兵を見やるのであつた。

『いよう、おめかしやの小僧さん！ ついでに見世物小屋へでも行つたら尙よからう！』

『あいつらが何の役に立つんだ！ たゞ看板に引つ張り出されるだけぢやねえか！』ともう一人

人が言つた。

『歩兵さわぐな、ほこりが立たあ！』とある輕騎兵がからかつたが、その馬がちよつと躍つたので泥が一人の歩兵にかゝつた。

『ふた行軍ばかり貴様に背囊つけて歩かしたら、その飾り紐が千切れつちまふんだぞ。』袖で顔の泥を拭きながら、歩兵が應じた。『何だ、そのさまは、まるで人間ぢやなくつて鳥が止つたみたいだ！』

第 『そこだ／＼、ちよつと貴様を馬に乗せて見たいよ。さぞいゝ恰好だらうなあ、ジーキン。』

と一人の上等兵が、背囊の重みで背中を曲げてゐる、瘠せた小柄な兵隊をからかつた。

二 『棒つ千切れを足の間に挟んだら、それで貴様の馬が出来らあ。』と輕騎兵はやり返した。

やがて残りの歩兵隊も入口で漏斗狀に澱みながら、押し合ひへし合ひ忙しげに渡り始めた。遂に貨車も渡り終つて混雜も少くなり、最後の大隊も橋に足を踏み入れた。たゞデエニーツフの中隊の輕騎兵だけ敵と對峙して、橋の向う側に踏み止まつてゐた。離れた對岸の山上から見える敵も、下の橋からはまだ見えなかつた。なぜといつて、河の流れである凹地から見ると、地平線は半露里とない前面の高地で終つてゐたからである。前方には荒れ野があつて、その上を味方の哥薩克の斥候隊が動いてゐた。突如前面に當つて、路が上り坂になつてゐる邊に、青い軍服を著た一

隊と砲車とが現はれた。これは佛蘭西軍である。哥薩克の斥候隊は蹶足で山麓へ退却した。ヂェニーソフ中隊では、將校も兵卒もみな他所ごとを言つたり、わき見をしたりしようと努めてゐたが、やはりこの高地に現はれたものの事を、絶えず考へ續けてゐた。そして地平線上に現はれた敵軍と認められる斑點を、絶えず振り返つて見るのであつた。空は午後になつて再び晴れ渡り、太陽はドゥナイ河と、それを取り圍む暗い連山の方へまぶしく落ちて行つた。あたりは寂としてゐた。たゞかの山の方からときをり喇叭の響と、敵の叫喚が傳はつて來るのみである。中隊と敵軍との間には、僅かな斥候の他もはや何物もなかつた。たゞ二千呎ばかりの空漠たる空間が、この兩者を隔ててゐるのみである。敵軍は射撃を中止したが、かへつてそのためにも兩軍を分つてゐる嚴肅な、恐ろしい、近寄ることも捕捉することも出來ない一線が、ひとしほ明かに感じられるのであつた。

「この生者と死者を分つ線、なにかある物を思ひ起させるやうな線を一步ふみ出すと——不可測の苦痛と死が待ち受けてゐる。あすこには——この原や、木や、太陽の輝く屋根の向うには、一たい何があるのだらう？ 誰があるのだらう？ それは何人も知らない、が何となく知りたい。この一線を越えるのは恐ろしい、が何となく越えて見たい。つまるところ、遅かれ早かれ一度はこの線を越えて、そこに——この線の向う側に何かがあるか知らねばならぬのだ。それはちやうど死の向う側に何かがあるかを、知らない譯に行かぬのと同じ事だ。ところで、おれ自身は強壯健康で、快活で、いら／＼してゐる。そして同じやうに健康で苛立たしい、活氣に充ちた人達に取り

卷かれてゐるではないか。」いま敵の面前にゐる各々の人はこんな風の事を、よし考へぬまでも直覺してゐた。而もこの感情は、今この瞬間に生じたすべての事柄に、輝かしい光彩と、悦ばしくけざやかな印象を與へるのであつた。

高地にゐる敵軍の中に發射の煙が現はれた。と、砲弾は唸りを生じつゝ、輕騎兵中隊の頭上を掠めた。一塊りに立つてゐた將校連は、各自の部署についた。兵士らは一生懸命に亂れる馬を整列し始めた。中隊は一時に鳴りを静めて了つた。一同は前方の敵を眺めると、號令を待ち設けるもののやうに中隊長を眺めてゐる。と、續いて第二第三の砲弾が飛び過ぎた。敵が輕騎兵隊を目かけて射撃してゐるのは、間違ひなかつた。しかし砲弾は高低のない調子で、規則たゞしく而も迅速に唸りながら、輕騎兵隊の頭上を飛び過ぎて、どこか後ろの方で爆發した。兵士等は振り返らうともしなかつたが、砲弾の飛び過ぎる音のする度に、單調で而も複雑な顔を含んだ中隊全部がまるで號令でも掛けられたやうに、彈丸の飛び過ぎる間、じつと息を呑んで鎧の上に棒立になり、それからまた腰を落す。兵士らは首を曲げないで横目を使ひながら、好奇の色を浮べて、友の受けた印象を探り當てようとした。各人の顔はヂェニーソフから喇叭手に至るまで、肩と腮との邊に同じやうな焦躁と、動揺と、相剋の表情が現はれてゐた。特務曹長は處罰してくれるぞと脅しつけるやうに、眉を蹙め乍ら兵隊共を睨め廻した。見習士官のミローノフは彈丸の飛んで來る度に首を屈めた。ロストフは、例の足を痛めてはゐるけれど見てくれのいゝグラッチクに跨りながら、左翼に立つてゐたが、その顔附は、大勢の前へ試験に呼び出されたが、優秀の成績で通過

する自信をもつた、小學生のやうであつた。彼は、砲彈に面して泰然と立つてゐるわたしに注意して下さい、とでもいつた風に、晴ればれと明るい顔をして邊りを見廻した。けれど彼の顔にもやはり同じやうな、何かしら今までになかつた嚴しい表情が、彼の意に逆らつて口もとに浮んでゐた。

『そこでお辭儀をしてゐるのは誰だ？ ミローノフ見習士官か？ いかんなあ！ 俺の方を見てをれ。』とデニエーソフは叫んだ。彼は一とところにじつと立つてゐる事が出來ず、中隊の前をぐる／＼乗り廻した。

戦 争 ヲシカ・デニエーソフの鼻の平たい髭の黒い顔や、小造りな壓しひしやがれたやうな全體の姿勢は（彼は毛のもぢや／＼生えた、指の短い、筋だらけの手首で、抜き放した軍刀の柄を握つてゐた）、いつも大抵お定りの晩酌で、二本の酒を飲み干した時にそつくりその儘であつたが、ただいつもより餘計に赤かつた。彼は鳥が水を飲む時のやうに、蓬々した頭を高くそらしながら、おとなしいベドゥインの横腹に、小さな足で容赦なく拍車を押しつけ、後ろへ倒れさうなほど反り返つて、中隊の反対側面へ駆けつけると、しや嘎れた聲で拳銃ピストルを檢めるやうに叫んだ。やがて彼はキルステンに近寄つた。二等大尉は幅のあるどつしりした牝馬に乗つて、竝足でデニエーソフの方へやつて來た。長い鼻髭を生やした二等大尉は、いつもの如く眞面目な顔をしてゐたが、ただ目だけ平生より餘計に光つてゐた。

『どうだね？』と彼はデニエーソフに言つた。『これではとても戦闘といふ所まで行かないぜ。』

今に見給へ、退却するやうになるから。』

『あん畜生、一たい何をしてやがるんだ！』とデニエーソフはぶり／＼して言つた。『あゝ！ロストフ！』見習士官の楽しさうな顔に氣が附いて、彼はかう喚いた。『どうだ、宿願が叶つたらう。』

彼はこの見習士官を見るのが嬉しいやうに微笑した。ロストフは自分を特別幸福なものに感じた。このとき長官の姿が橋の上に現はれた。デニエーソフはその方へ疾驅して行つた。

第

『閣下！ どうか攻撃を許可して下さい！ わたしが彼奴らを木つば微塵にしてやります。』

二

『攻撃などする必要がどこにある！』長官はうるさい蠅でも避けるやうに顔を顰めて、大儀さうな聲で言つた。『それになぜ君等はそこにじつとしてゐるのだ？ 見給へ、騎捜兵は退却してゐるぢやないか。中隊を後方へ移し給へ。』

編

中隊は一兵をも失はずして、橋を渡り砲撃の圏外へ出た。續いて散兵線にあつた第二中隊が渡り、最後に踏みとどまつた哥薩克が對岸を撤去した。

パヴログラード聯隊の二箇中隊は橋を渡つて、續々と山の方へ退却した。聯隊長のカルル・ボグダーノギッチ・シューベルトは、デニエーソフの中隊に乗り近づき、ロストフから程遠からぬ邊りを竝足で進んでゐたが、かのチェリヤーニン事件で衝突して以來、今はじめて顔を合せたにも拘らず、彼はロストフに何の注意をも拂はなかつた。ロストフはいま戰場へ出て見ると、自分がかね／＼悪いことをしたと感じてゐるこの人に、生殺與奪の權利を握られてゐるやうな思ひが

して、聯隊長の鬪士にも紛ふ背中や、亜麻色の後ろ頭や、赤い首筋などを瞬きもせず見つめてゐた。ロストフにはかうも思はれた。ボグダーヌイチは單に不注意を装つてゐる丈で、いま彼の目的は自分の勇氣を試す事のみに存するのではあるまいか——さう考へて彼は身を反らしながら、樂しげに邊りを見廻した。すると今度は又、ボグダーヌイチは自分の沈勇をロストフに示すために、わざとこんなに傍近く歩いて行くのではないか、とも思はれたし、また更に、自分に取つては敵に當るこの男が、自分即ちロストフを罰するために、中隊全部を無謀な突撃に赴かせようとしてゐるのではないか、とも考へられるのであつた。そして突撃の後にこの「敵」が負傷してゐる自分の傍へやつて来て、寛大にも和睦のしるしに、手を差し伸ばす姿など描いて見た。

バゾログラード聯隊の人々に見覚えのある、兩肩を高く聳やかしたジェルコフの姿が（彼はつい先ごろ聯隊を出たばかりである）、聯隊長の方へ近寄つて来た。彼は參謀本部を追はれて後も、參謀部にゐれば、何もしないでゐて餘計報酬が貰へるのに、前方勤務をして碌々としてゐるやうな馬鹿ではない、などと言ひ、聯隊にじつとしてゐなかつた。そして巧妙な手段を弄して、バゾラチオン公爵の傳令に入り込んだ。彼は後衛指揮官の命令を持つて、元の長官の所へやつて来たのである。

『聯隊長殿、』と彼は以前の同僚を見廻しつゝ、ロストフの「敵」に向つて、持前の沈鬱な眞面目な調子で言つた。『踏みとゞまつて橋を焼けとの命令であります。』

『誰命令だ？』と獨逸生れの聯隊長は不正確な露西亞語で、むづかしい顔をしてから訊いた。

『それは、聯隊長殿、誰命令だかわたしは知りません、』と騎兵少尉補は大眞面目で答へた。『たゞ公爵がわたくしに、「あすこへ出掛けて行つて聯隊長に、早速ひつ返して橋を焼くやうに言つて來い」と言はれただけであります。』

ジェルコフの後から幕僚將校が、同じ命令を持つて聯隊長の所へ來た。幕僚將校に續いて大兵のネスギーツキイが、哥薩克の馬に乗つてやつて來た。馬はやつとの事で彼を駈足で運んで來たのだ。

第 『どうしたんですか、大佐。』彼はまだ馬が走つてゐる中から叫んだ。『わたしは先刻、橋を焼いて下さい、と言つたぢやありませんか。それなのに、今度はもう誰かが出たら目な事を言つてゐる、こゝではみんな氣が狂つて了つたのだ、何が何だか譯が分りやしない。』

二 大佐は悠々と聯隊を止めて、さてネスギーツキイの方へ振り向いた。

編 『あなたはわしに燃焼物の事を言はれたけれど、』と彼は言つた。『焼くといふ事については何もお話なかつたです。』

『どうして君、』ネスギーツキイは帽子を取つて汗に濡れた髪を直しながら、馬を止めて言つた。『どうして君、燃焼物を置くやうに言つて置きながら、橋を焼くことを言はないなんて理窟があるもんですか？』

75 『少佐殿、わたしはあなたに君言はれる譯ありません。それにあなたはわたしに、橋を焼きなさい言はれなかつたです！ わたしは自分の職務知つてゐます！ わたしは命令を嚴重に履行す

る習慣あります。あなた橋焼くと言はれますが、誰が焼くんですか、わたしどうも了解できません。」

『ちよつ、いつでもからなんだ。』手を一振りしてネスギーツキイは言った。『君、どうしてここにゐるんだね?』と彼はジェルコフの方へ向つた。

『いや、御同様だ。君はしかしぶく／＼して来たねえ、一つ僕が絞つてやらうか。』

『あなたの言はれる所では……』大佐はまだ腹立たしい聲で續ける。

『大佐殿、』と幕僚將校は遮つた。『もう急がなくちやなりません。でない、敵が砲を接近させて、霰彈射撃に移りますよ。』

と 大佐は無言で幕僚將校から肥つた佐官、それからまたジェルコフと順々に目を轉じたが、やがて眉を顰めて、

和 『ではわたし橋を焼きませう。』と莊重な調子で言つた。それは丁度「自分は皆からいろ／＼不快な思ひをさせられたけれど、矢張りなすべき事はします。」と言つたやうな表情であつた。

まるで馬に一切の罪があるかのやうに、長い筋肉の發達した足で馬を蹴りながら、大佐は前方へ進み出て第二中隊——例のロストフがデューニソフの指揮下で勤務してゐる中隊に、橋へ引つ返せと命令した。

「あゝ、やはりさうだつた。」とロストフは考へた。「彼奴おれを試験しようとしてゐるんだ!」彼の心臓は縮こまつて、血は一時に顔へ上つて來た。「まあ見るがいゝ、おれが臆病者かどうか

!」と彼は考へた。

またもや中隊全部の人の快活らしい顔に、つい先ほど敵彈の下に立つてゐた時と同じやうな、生真面目な陰が現はれた。ロストフは聯隊長の顔の上に、自分の想像を確めるやうな物を發見しようとして、目も離さずに自分の敵——聯隊長を見つめてゐた。しかし大佐は一度もロストフの方へ向かないで、いつも列前に立つてゐる時と同じく、嚴格で莊重な顔附をしてゐた。やがて號令の聲が聞えた。

第 『敏活に! 敏活に!』彼の周りで幾人かの聲がかう言つてゐた。

二 刀を手綱に絡ましたり、拍車をがちや／＼鳴らしたりしながら、兵士らは自分たちがこれから何をするかも知らず、忙しさに馬から下りて十字を切つた。ロストフはもう聯隊長の方を見ようともしなかつた。そんな餘裕がなかつたのである。ひよつと兵士らに後れはしまいかといふ事が、彼に取つては一番おそろしかつた。心臓の凍るほど恐ろしかつた。馬を馬丁に渡した時、彼の手は顫へてゐた。血がづきん／＼と心臓へ迸つて來るのが感じられた。デューニソフは後ろの方へ反り返り、何やら大聲に呶鳴りながら、彼の傍を通り抜けた。ロストフは拍車を絡み合はしたり、刀を鳴らしたりして、周りを馳せ交ふ兵士のほか何も目に入らない。

『擔架だ!』と誰かの聲が後の方で叫んだ。

77
ロストフは擔架の要求が何を意味するかも悟らなかつた。彼はたゞ誰よりも眞先に立たうとのみ努めながら走つた。しかし足もとを見てゐなかつたので、橋のすぐ傍で、多くの足に蹂み躪ら

れたべと／＼の泥の中に踏み込んで、足と足とを絡まし両手を突いて了つた。他の者は彼をよけて駆け抜けた。

『大尉、両側面に。』といふ訛の著しい聯隊長の聲が聞えた。彼は前の方へ駆け出して、勝誇つたやうな愉快げな顔附で、橋からほど遠からぬ邊に立ち止つてゐた。

ロストフは乗馬袴で汚れた手を拭きながら、自分の「敵」を振り返ると、また先の方へ駆け出した。遠く出て行きさへすればいゝ、と云ふ氣がしたのである。しかしボグダーヌイチはよく見定められなかつたので、ロストフであるとは氣づかなかつたけれど、彼に向つて喚いた。

『橋の眞中を走つてるのは誰だ！ 右寄つて！ 見習士官、返つて来い！』と彼は腹立たしげに叫んだ。そして自分の膽力をひけらかすやうに、橋板へ踏み込んだデューニソフに向つて、

『何のためにそんな冒険するのだ、大尉！ 君、馬からおりるいゝだらう。』と大佐は言つた。『なあに！ やられる奴が因果なんぞさあ。』ヴシカ・デューニソフは鞍の上で振返り答へた。

その間にネスギーツキイとジェルコフと幕僚將校は、一緒になつて射程外に立ちながら、黄色い軍帽を被り、飾紐を縫ひつけた暗緑色の上衣を着、青い乗馬袴を穿いて、橋の邊りに蠢いてゐる人間の一團と、遙かかなたから次第に近づいて来る青い短衣シヤケツと、たやすく砲と見分けのつく、馬につけた物の一群とを、代るがはる眺めてゐた。

「橋を焼くだらうか焼かないだらうか？ 敵か味方か、どつちが先だらう？ 味方が早く走り

ついて橋を焼くか、それとも佛蘭西兵が霰弾射撃の距離まで近づいて、輕騎兵を塵にするか？」高地に立つて橋を見おろしてゐる大勢の軍隊中の一人々々が、心臓を凍らせながら我ともなしに、この疑問を胸の中で繰り返した。そして明るい夕日の光を浴びながら、橋の傍らなる輕騎兵と、銃劔や大砲を輝かせつゝ次第にほど近く押し寄せて来る青い短衣シヤケツとを、代るがはる見較べてゐた。

『おゝ！ 輕騎兵の方がやられるぞ！』とネスギーツキイは言つた。『もう霰弾射撃の距離になつた、それより遠くはない！』

『聯隊長があんなに大勢人をつれて行くのは間違つてる。』と幕僚將校は言つた。

『全くだよ！』ネスギーツキイは受けた。『あすこへは二人ぐらゐる元氣のいゝ兵隊をやつたら、それで同じことだつたんだ。』

『飛んでもない。御前、』ジェルコフは輕騎兵から目を離さずに口を入れたが、例の依然として子供らしい身振を見てゐると、彼の言つてる事が眞面目なのかどうか、てんで見當が附かなかつた。『飛んでもない御前、何といふ考へ方を遊ばすんです！ 二人ぐらゐる兵隊を遣ればいゝなんて！ それでどうして佩綬つきのヴラデーミル勳章が貰へますか？ そこなんですよ、よしんば滅茶々にやられたつて構はない、中隊全部を上奏して、自分一人勳章を貰つた方がいゝんですよ。わがボグダーヌイチ君はこの邊の消息をよく心得てます。』

『や、』と幕僚將校は言つた。『あれは霰弾だ！』

と、前車を外して忙しげに後へ退いた佛蘭西側の砲を指した。

大砲を備へた佛蘭西側の集團に煙が現はれた。と、殆ど同時にまた一つ、またく一つ——そして第一發の響がこちらへ達した瞬間に、また第四の煙が現はれた。二つの響が續いて聞える間もなく、また次の響が起つた。

『おゝ、おゝ！』幕僚將校の手を掴みながら、焼けつくやうな痛みでも感じたやうに、ネスギーツキイは叫んだ。『見給へ、一人倒れた、倒れた、倒れた！』

『二人らしいね？』

『もし僕が皇帝なら、決して戦争なんかしやしない。』とネスギーツキイは顔をそむけて言つた。

佛蘭西の砲兵隊は再び忙しげに装填を始めた。そして青い短衣ジャケツの歩兵は駈け足で橋の方へ押し寄せた。またもや（しかしまぢく／＼な間隔を置いて）幾つかの煙が現はれ、霰弾は橋の上でばちばち鳴り始めた。けれども今度はネスギーツキイも、橋上で何ごとが行はれてゐるか、見分けることが出来なかつた。橋から濃い煙が上り出したのである。輕騎兵は遂に焼き拂ふことが出来た。砲兵隊は最早その邪魔をするためでなく、單に砲の照準が出来て、目標もあるからといふだけの理由で、射撃を續けるのであつた。

佛蘭西軍は輕騎兵らが馬丁の傍へ歸りつくまでに、首尾よく三回の射撃を行ふことが出来た。初め二回の一齊射撃は不正確で、霰弾が遠く飛び越えて了つたが、その代り二度目のは輕騎兵群の真中に落ちて、三人の兵を倒した。

自分とボグダーヌイチの關係ばかりに氣を取られてゐたロストフは、何をしたいか分らず、橋のまんなかに立ち止つた。ぶつた斬らうにも（彼は戦争といふ事をいつもそんな風に想像してゐた）誰も相手がなないし、橋を焼く手傳ひをしようにも、他の兵士みたいに藥束を持つて來なかつたから、それも出来ない。彼は突つ立つたまゝ邊りを見廻してゐた途端、不意に胡桃を撒き散らすやうな音が橋の上に響いた。そして一番そばに立つてゐた一人の兵士が、呻き聲と共に欄干に倒れ掛つた。ロストフはほかの者と一緒に駈け寄つた。また誰か『擔架だ！』と叫んだ。四人の者が負傷者に手を懸けて、擡げにかゝつた。

『おおおお……うつちやつてくれ、後生だあ。』と負傷者は叫んだが、とにかく抱き起して擔架に乗せた。

ニコライ・ロストフは顔をそむけて、何か探し求めるやうに遠い景色や、ドゥナイの水や、空や、太陽を眺めた。空は何とも言へぬほど美しく見えた。何といふ蒼さ、静けさ、深さ！ また沈み行く太陽は、何といふ輝かしい神々しさ！ 遙かなドゥナイの水は何といふ柔かな光澤を帯びて、閃いてゐる事か！ また遠くドゥナイ河のかなたに蒼んで見える山々、僧院、神祕めかしい峽、はさま頂きまで霧のかゝつた松林、これらのものは更に見事であつた……あすこは静かで幸福に充ちてゐる……『もし俺があすこにさへゐたら、なんにも、なんにも望まなかつたらう、本當に何ひとつ望まなかつたらうになあ。』とロストフは心に考へた。『おれ一人と、そしてあの太陽の中には、無量の幸福がある。それだのにこゝは……呻吟と苦痛と恐怖と、そしてこのぼろとした

やうな、せか／＼した気分：ほら、また何やら呶鳴つてゐる。あつ、またみんな後ろの方へ駆け出した、そして俺も一緒に走つてゐる。あゝこれがさうだ、いま俺の頭の上や、俺のまはりに立ち塞がつてゐるのがさうだ——死だ：ちよつと目をばちつとさせる暇に、俺はもうこの太陽もこの水も、この峽はざまも見ることが出来なくなるのだ：」

折しも太陽は雲の陰に隠れ始めた。ロストフの前にまた別な擔架が現はれた、すると、死この擔架に對する恐怖、太陽と生命に對する愛——すべての物が一つの病的な、不安な感じの中に溶け合ふのであつた。

争 「あゝ、主なる神よ！ この空の上にあります父よ、我を助け、赦し、守り給へ！」とロストフは心の中に呟いた。

和 輕騎兵等は馬丁のゐる所へ駆けつけた。人聲は次第に高く穩かになり、擔架は目の前から隠れて了つた。

『どうだね君、火薬の匂を嗅いだかね：』耳の上でグシカ・ヂェニソフの聲がかう喚いた。「何もかも済んで了つた。しかし臆病者だ、俺は臆病者だ。」とロストフは考へ、重々しく吐息をつきながら、前足の膝を折るグラーチックを、馬丁の手から受取つて乗りに懸つた。

『あれは何だつたんです、霰弾ですか？』彼はヂェニソフに訊ねた。

『さうだ、おまけに凄く奴だつたよ！』とヂェニソフは叫んだ。『みんな勇敢に働いてくれた！ しかし厭な仕事だ！ 突撃つて奴は——ずばり／＼とやっつけるのは愉快なもんだが、今

のは何といふこつたらう、我々をまるで標的みたいに撃ちやがる。』

かう言つてヂェニソフは、ロストフの傍から遠からぬ所に立つてゐる聯隊長、ネスギーツキイ、ジェルコフ、幕僚將校などの一團をさして馬を進めた。

「けれど誰も氣がつかなくつたらしいな。」とロストフは心の中で考へた。實際、誰もなんにも氣が附かなかつた。なぜなら、一度も砲撃に遭つた事のない見習士官が、初めて經驗する感情は、誰もがよく心得てゐたからである。

第 『今に大佐殿の事が上申されますよ。』とジェルコフは言つた。『見ていらつしやい、わたしも今に少尉に任官されますから。』

二 『わたし橋を焼いたと公爵に報告ください。』聯隊長は意氣揚々と愉快げに言つた。

編 『で、もし損失の事を訊かれましたら？』

『些々たるものです！』と聯隊長は太い聲で答へた。『二人の兵士が負傷して、一人は落命しました。』落命しましたといふ美しい言葉を、響よく斷ち切るやうに發音しながら、幸福の微笑を制し得ず、彼はさも嬉しさに言つた。

九

ボナバルト麾下の十萬の佛蘭西軍に追撃され、到るところ住民から快からぬ感情をもつて迎へられ、もはや同盟軍に信頼することも出来ず、糧食の不足に脅かされ、豫期しなかつた條件の下

に行動を餘儀なくせられながら、三萬五千の露西亞軍はクトゥゾフの指揮の下に、ドゥナイ河の流れに沿うてどん／＼退却を續けた。そして敵に追ひ附かれると踏みとゞまり、重砲類を失はずして退却するに必要なだけ、後衛戦をもつてその場その場を切り抜けて行くのであつた。ランバツハ、アムシュテーテン、及びメルク附近で小戦闘が行はれた。そして敵にも認められるほど、勇猛頑強に戦つたにも拘らず、これら小戦闘の結果として、退却がいよ／＼急になつて行くのみであつた。ウルムの會戦で捕虜となることを免れた奥太利軍は、ブラウナウで一時クトゥゾフの軍に合流したが、今度また露西亞軍から分離した。で、クトゥゾフはたゞ味方の疲憊し盡した、微弱な兵力より他に頼るものなかつた。もう維納を守らうなどは、考へることすら出来なかつた。クトゥゾフが維納にゐた時、奥太利の軍事會議局（オーストリア）によつて授けられた最新戦術の法則に基づき深く考究された攻撃戦はさて置いて、たゞウルムに於けるマックの如く軍隊を破滅に陥れず、露西亞から急行しつゝある軍隊に合するといふ事が、今クトゥゾフの眼前に横はつてゐる唯一の、しかも殆ど到達する見込のない目的であつた。

十月二十八日、クトゥゾフは軍を率ゐてドゥナイの左岸に渡り、佛蘭西軍の主力と味方との間にドゥナイの流れを挟みながら、初めて停止したのである。三十日、彼はドゥナイの左岸に陣してゐる、モルチエの師團を攻撃して大敗させた。この戦闘で初めて戦利品が手に入つた。即ち軍旗一旒、砲數門、及び敵の將官二名であつた。二週間に互る退却後、露西亞軍は初めて踏みとゞまつて、軍に戦闘後戰場を控制し得たのみならず、そこから佛蘭西軍を一掃したのである。軍は

満足な被服もなく、疲憊し盡し、三分の一は落伍し、負傷し、戦死し、罹病して、戦闘力を削がれてゐるのみか、ドゥナイの對岸には味方の傷病者が、敵の仁俠心に訴へたクトゥゾフの書面を附けて遺棄してあるし、クレームスの大きな病院や人家は、悉く野戦病院に變へられて、而もそれさへ、すべての傷病兵を收容することが出来なくなつてゐたが、それら一切の状態にも拘らず、クレームスに於ける退却中止と、モルチエに對する勝利は、著るしく、全軍の士氣を鼓舞したのである。軍隊内でも參謀部でも、露西亞からの應援軍が近づいたの、奥太利軍がどこかで勝利を博したの、ボナバルトがびつくりして退却したのと、實に痛快ではあるが、不確かな怪しい風説が盛に行はれた。

二 アンドレイ公爵はこの戦闘の間ちゆう、この役で戦死した奥太利の將軍ジュミットの傍にいてゐた。彼は乗馬を傷つけられ、彼自身も手に軽く擦過傷を負つた。が彼はこの戦捷の報知を携へて、奥太利の宮廷へ派遣される事になつた。それは總指揮官の特別な愛顧の兆（しるし）である。當時、奥太利の宮廷は佛蘭西軍の脅威下にある維納から、早くもブリュンヌに移されてゐた。アンドレイ公爵は戦闘の夜興奮してゐたにも拘らず、疲勞を感じる事もなく（一見したところ、あまり丈夫さうな體格ではなかつたけれど、アンドレイ公爵は強壯な人より遙かに、肉體の疲勞を忍ぶ事が出来た）、ドフト、ロフ將軍の報告を携へて、騎馬でクレームスなるクトゥゾフの許へ駆けつけると、すぐその夜ブリュンヌへ急使として派遣された。急使に立つといふ事は所定の褒賞以外、昇任に向ふ重大な一步を意味してゐた。

暗い星月夜であつた。昨日——戦闘當日に降つた白雪の中を、道が一すぢ黒々と見えた。昨日の戦闘の印象を繰り返して見たり、戦勝の報告が到着地に與へる印象を、心うれしく想像したり、總指揮官や同僚の送別宴を思ひ起したりしながら、アンドレイ公爵は驛遞馬車に乗つて疾驅した。そして長いあひだ待ち焦れてゐた幸福の絲口を、遂に掴み得た人のやうな感情を経験した。目を閉ぢると同時に、耳の中で小銃や大砲の射撃の音が響き始め、それが車輪の軌みや、戦勝の印象と一緒に溶け合ふのであつた。どうかすると、露西亞軍が敗走して、彼自身も戦死したやうな心持がし始める。けれど、その途端に急いで目を醒まして、決してそんなことはないばかりか、反對に佛蘭西軍が敗走したのだといふ事を新たに確めて、幸福を覺えるのであつた。彼は更に味方の勝利と、戰場に於ける自分の沈勇を詳細に思ひ出し、やつと安心してまたうと／＼した。暗い星月夜の後に、輝かしく樂しげな朝が來た。雪は太陽の光に溶け、馬は疾風の如く走る。右にも左にも同じやうに新しい、いろ／＼趣を異にした森や、野や、村が目を探めて過ぎる。

ある一つの驛遞で、彼は露西亞の負傷兵を乗せた車の列に追ひついた。輸送隊を監視してゐる露西亞將校は、先頭の馬車にふんぞり返りながら、亂暴な言葉で大聲に一人の兵卒を罵つてゐた。長い獨逸式のフォルシュパンの中には、六人か、それよりもつと大勢の、泥に汚れた負傷兵が、繃帯を巻いて蒼白い顔をしなから、石ころのでこぼこ道を揺られてゐた。彼等のある者は話をししてゐるし（露西亞語の話し聲がアンドレイの耳に入つた）、ある者は麵麩を食べてゐるし、最も傷の重い者は無言のまま、つゝましましやかな、病的な、子供らしい興味をもつて、自分の傍を駆け抜ける急使を眺めてゐる。

アンドレイ公爵は車を止めさして、一人の兵隊にどこの戦闘で負傷したのか訊いて見た。『昨日ドゥナイ河の端で。』と兵隊は答へた。アンドレイ公爵は金入を取り出して、金貨を三つその兵隊にやつた。

『みんなにね。』と、彼は近寄つて來る將校に向つて附け加へた。『諸君、早くよくなつてくれ給へ。』と彼は兵士等に聲をかけた。『まだ／＼仕事はうんとあるんだから。』

『何ですか、副官殿、どんな報告ですか？』見受けたところ、何か話でもしたさうな様子で、將校はかう訊ねた。

『いゝ事ですよ！ さあ、やれ！』と彼は馭者に叫んで、また先へ急がせた。

アンドレイ公爵がブリュンヌへ入つた時は、もうとつぷり暮れてゐた。彼はいつしか高い家屋や、商店、人家、街燈などの灯や、鋪石道に騒々しい音を立てる美しい馬車や、その他すべて久しく陣中にあつた軍人にとつて常に懐かしい、賑やかな都會の雰圍氣に取り圍まれてゐる自分を發見した。アンドレイ公爵はあわただしい馬車の旅で、一晚中おち／＼眠らなかつたにも拘らず、宮廷へ近づきにつれて、前夜より一そり元氣づいたやうな思ひがした。たゞ目が熱病的な輝きを帯び、思想がおそろしく迅速明瞭に轉換する。またもや戦況の詳細が生き生きと心に浮んだが、それは彼が自分の想像の中で、フランツ皇帝に説明を試みたものとして、緊縮した形を探つてゐた。そして萬一、偶然に提出されるかも知れないと思はれる質問と、それに對する彼の答辯が、

同じく生き生きと心に浮ぶのであつた。彼はすぐにも皇帝に拜謁を仰せつかるやうに思つてゐた。けれども彼が宮殿の大きな車寄せに着いた時、一人の廷吏が走り出て、急使だと聞くと、別の車寄せに案内した。

『廊下から左の方へお出でなさい、そこに Euer Hochgeboren(閣下) 當直の侍従武官かをられますから。』廷吏は言つた。『その人が陸軍大臣の所へ御案内いたします。』

アンドレイ公爵を迎へた當直の侍従武官は、少し待つてくれと言ひ置き、陸軍大臣の所へ赴いた。五分の後、侍従武官は歸つて來た。そしてことさら慇懃に腰を屈めて、アンドレイ公爵を先へ通しながら、陸軍大臣の執務してゐる書齋の方へ、廊下を案内して行つた。侍従武官はその優雅な慇懃な態度でもつて、露西亞の副官が馴々しく持ち掛けるのを、防いでゐるやうに思はれた。アンドレイ公爵が陸軍大臣の書齋の扉に近づいた時、彼の歡ばしい感情は著しく薄らいだ。彼は侮辱されたやうな氣がし、この侮辱感はその瞬間、彼自身でも氣づかぬ中に、何の根柢もない輕蔑の念に移つてゐた。機に臨んで適應し得る彼の知性は、その刹那、自分はこの侍従武官や陸軍大臣を輕蔑する權利を持つてゐるぞ、といふ觀點を發見したのである。「大方この連中は火藥の匂を嗅いだ事がないから、勝利を占めるのは、何の造作もないやうに思はれるんだらう！」と彼は考へた。彼の目は輕蔑するやうに細められた。かうして彼は特にゆつくりと陸軍大臣の書齋へ入つた。大きな卓に向つて腰を掛けたまゝ、初めの二分間ばかり、彼に注意を向けないでゐる陸軍大臣を見た時、この感情は彌が上に強まつた。陸軍大臣は兩鬢の白くなつた禿頭を、二つの蠟燭の間に俯向けて、鉛筆で標をつけながら書類を讀んでゐた。扉があいて人の足音が聞えた時も、彼は首をその方へ向けずに讀み續けてゐた。

『これを持つて行つて渡してくれ給へ。』陸軍大臣は侍従武官に書類を渡し乍ら、なほも急使の方へ注意を拂はずにかう言つた。

アンドレイ公爵は心に感じた——いま陸軍大臣の頭を占めてゐる一切の事件の中で、クトゥゾフの軍隊の動靜は最も興味のないものであつて、大臣はそれを露西亞の急使に感得させる必要がある、と思つてゐるに相違ない。「しかしそれは俺に取つて全然風馬牛だ。」と彼は考へた。陸軍大臣は残りの書類を掻き寄せ、端と端をきちんと揃へると、やつと顔を上げた。彼の頭は賢さうでそして特色があつた。しかし彼がアンドレイ公爵の方へ向いた時、その顔の賢さうなしつかりした表情が、習慣的に意識してゐるらしい變化を示した。後から後へと請願者に接見してゐる人によくある、間の抜けた、わざとらしい、而もそのわざとらしさを隠さうともしないやうな微笑が、彼の顔に浮んだ。

『元帥クトゥゾフ將軍のお使者ですか？』と彼は訊ねた。『恐らく目出たいお知らせなんですか？ モルチェと衝突があつたんですつて？ 大勝利？ もうそろ／＼さうあつて然るべき時分ですよ！』

彼は自分の名あてになつてゐる急書を取り、沈んだ表情で讀み始めた。

『あつ、しまつた！ しまつた！ シュミットが！』と彼は獨逸語で言つた。『何といふ災難

だ！ 何といふ災難だ！』

急書を走り読みして、彼はそれを卓の上に置き、何やら思案するらしい風つきで、アンドレイ公爵を眺めた。

『あゝ、何といふ災難でせう！ あなたはこの戦闘を、決定的なものだと仰しやるんですな？ しかしモルチエは捕虜にならなかつたですな（彼はちよつと黙つてゐた）。が、目出たい報知を齎して下すつて大いに愉快です。尤もシュミットの死は、この勝利に對する高價な代價でしたがね。陛下は多分あなたに拜謁を仰せ附けられるでせうが、しかし今夜ではありません。いや、實に有難う、ゆつくりお休み下さい。明日は閱兵後の參内式に列して下さい。尤も更めて御通知はしますが。』

和平と

會話のあひだに消えてゐた間の抜けた微笑が、またしても陸軍大臣の顔に現はれた。

『左様なら。厚くお禮を申します。たぶん皇帝は謁見を仰せ附けられる事と思ひます。』彼はまたから繰り返して、頭を下げた。

アンドレイ公爵が宮殿を出た時、彼は戦勝によつて與へられた一切の興味と幸福が、陸軍大臣と慇懃な侍従武官の無關心な手に渡つて了つたやうな思ひであつた。彼の考へ方もまたがらりと變つて、何だかあの戦闘がずつと以前の、遠い記憶のやうな氣がし出した。

アンドレイ公爵は在ブリュンヌの露西亞外交官である、ビリーピンといふ知人の許に足を止めた。

『あゝ公爵、これより愉快的客はないよ。』とビリーピンはアンドレイ公爵を迎へながら言つた。『フランツ、おれの寢室へ公爵のお荷物を運んどけ！』ボルコンスキイを案内して來た召使に向つて彼はかう命じた。『なに、戦勝報知の使者？ それは結構。僕は御覽の通り病氣で引き籠り中さ。』

第

アンドレイ公爵は手水を使ひ著換を済ますと、外交官の贅澤な書齋へ入つて、準備してある食事の席に着いた。ビリーピンは悠然と壁爐カミンの傍に座を占めた。

二編

アンドレイ公爵は今度の旅行ばかりでなく、總じて生活の便宜と清潔と趣味とを悉く奪はれ通してゐた長い行軍の後、再び子供の時から馴れて來た贅澤な生活條件に取り巻かれて、はじめて心地よい休息感を味はつた。そのほかに、あゝした塊太利政府の態度を見せつけられた後で、たとへ露西亞語を使はぬまでも（二人は佛蘭西語で話した）、今や殊に烈しく感じられる露西亞人共通の反塊的感情を、ともに頷つてくれる筈の露西亞人と談話を交へるのが、彼には快く感じられたのである。

ビリーピンはアンドレイ公爵と同じ社會に屬する、三十五歳の獨身者であつた。彼等はまた彼得堡にゐるところから相識であつたが、最近アンドレイ公爵がクトゥゾフと一緒に維納へ來た時、一そう接近したのである。アンドレイ公爵が、陸軍の方で多望な前途を有する青年とすれば、そ

れと同様、いな、それ以上に、ビリーピンは外交界に多望な前途を期待されてゐた。彼はまだ若い男であつたけれど、もはや若い外交官ではなかつた。といふ譯は、十六の年から勤務を始めて、巴里にもコペンハーゲンにもゐた事があり、今では維納でかなり目醒ましい地位を占めてゐた。總理大臣もまた維納に於ける露國公使も、彼を知り尊敬してゐた。彼は外交官の大多數を占めてゐる連中のやうに、たゞ消極的な資格——即ちある種の行爲をなすべからずといふ規則を守り、佛蘭西語で話でもして、善良な外交家にならうと心掛けてゐるやうな、十把ひとからげの連中とは違つて、仕事を好みかつそれに堪能な外交家の一人であつた。だから性來もの臭い質であるにも拘らず、彼は時として一晩ぢゆうライテングレイブル書卓子で過す事もあつた。彼は仕事の内容がどんなものであらうと、いつでも同じやうによく働いた。彼の興味を惹くのは「なぜ」といふ問題でなく、「如何にして」の問題であつた。外交事件の目的が那邊に存するかといふ事は、彼に取つて没交渉であつた。巧妙に正確に優美に、廻状や覺書インブランドリウムや報告を作成することの中に、彼は大きな満足を見いだしたのであるが、かうした文書作成の外、上流の社會に出て交際したり、談話をしたりする技術にかけても、ビリーピンの功績は尊重されてゐた。

ビリーピンは仕事と同様談話をも好んだが、それは談話が都雅で機智に富んでゐる時に限つた。社交界でも、彼は常に何か素晴らしい事を言ふを狙つてゐた。これ等の條件を備へてゐない限り、彼は決して話に口を入れたかつた。彼の談話は常に警拔で機智に富み、しかも一般的興味のある完成された句に充たされてゐた。これらの句は社交界の有象無象がたやすく覚え込んで、

客間から客間へ持ち運ぶのに都合のいゝ様に、わざと拵へたやうに携帯に便利な性質を帯びてゐた。これはビリーピンの内部のアトリエで製作されるのであつた。そして事實に於ても、*Les mots de Bilbine se colportaient dans les salons de Vienne* (ビリーピンの名言は維納の客間々々に擴がつて) いはゆる重大な事件に影響を及ぼす事も屢々であつた。

瘦せてげつそりした黄色い彼の顔は、一面太い皺に掩はれてゐた。この皺は湯から上りたての指先のやうに、念を入れて綺麗に洗ひ上げたやうに見えた。そしてこの皺の運動が、彼の容貌の重要な變化を構成してゐるのだ。ある時は頬に廣い皺が寄つて、眉が上の方へあがるかと思ふと、今度はその眉が下へさがつて、頬の邊りへ太い皺が寄る。深く落ち込んだ小さな目は、眞直に愉快さうに正面を眺めてゐる。

『さあ君、君の功名譚を話して聞かしてくれ給へ。』と彼は言つた。
 ボルコンスキイは自分の事は嘸にも出さず、きはめて謙遜な調子で昨日の戦争と、陸軍大臣との接見を話した。

『*Il s'mont reçu avec ma nouvelle comme un chien dans un jeu de quilles* (あの人は、僕の報告を受け取つたやう)』と彼は言葉を結んだ。

ビリーピンはにつと笑つて顔の髪を伸ばした。

『*Dependant, mon cher* (ねかし)』彼は自分の指の爪を遠くから眺めながら、左の目の上に皺を寄せて言つた。『僕は正教の露西亞軍隊に對して、非常に尊敬を拂つてゐるけれど、それでも』

僕の考では、君がたの勝利は華々しいものぢやないやうだよ。』
 彼は輕蔑的に力を入れて言はうと思つた言葉だけ、露西亞語で發音しながら、始めから終ひまで佛蘭西語で話し續けた。

『さうぢやないか？ 君がたは一箇師團しかつれてゐないモルチェに、全軍をもつて當つたんだらう？ おまけにそのモルチェも網から抜け出したぢやないか？ どこが一たい勝利なんだい？』

戦 『しかし眞面目な話だ、』とアンドレイ公爵は答へた。『何れしても、ウルムの戦闘より少々氣が利いてると言つたところで、あながち自慢でもないだらう……』

と 『どうして君等は一人でも、せめて一人だけでも元帥を捕虜にしなかつたんだね？』

和平 『どうしてたつて、萬事豫想どほりに行かないからさ、觀兵式のやうに正確に行かないからだ。』
 和 『よ。今も話したやうに、我々は朝の七時までに敵の背面に出ようと計畫した、ところが、實際は晩の五時にさへ駄目だつたものね。』

『どうして朝の七時までに間に合はせなかつたんだい？ 朝の七時までに出不くちやならなかつたとすれば、』微笑しながらビリーピンは言ふ。『朝の七時までに背面へ出なくちや不可ぢやないか。』

『ぢや、どうして君等は外交術でポナバルトに、ゼノアを放棄した方がよい、といふ事を悟らせなかつたんだね？』アンドレイ公爵は相手と同じ調子でさう言つた。

第 『そりやあ僕も分つてる。』とビリーピンは遮つた。『かうして壁爐の前で長椅子に腰掛けながら、元帥連を擒にするのは何よりやさしい事だ、とかう君は考へてるんだらう。それは事實だ。がそれにしても、君等はどうしてモルチェを捕虜にしなかつたのだ？ 單に陸軍大臣のみならず、聖上陛下フランツ王さへこの勝利に、あまり幸福を感じなさらんからと言つて、びつくりするにや當らないんだよ。また僕にしても、この露西亞公使館のしがない一祕書官にしても、歡喜のしるしに家のフランツに一ターラアやつて、戀人と一緒にブラーテルへやらうといふ要求を些かも感じてないからね……もつともこのブリュンヌにブラーテルはないが。』

二 彼は眞直にアンドレイ公爵を見詰めて、不意に額の皺を消した。

『今度は僕が君に「なぜ」といつて訊く番だ。』とボルユンスキイは言つた。『僕は白狀するが、ふつ／＼合點が行かないよ。或はそこに僕の淺薄な智力を超越した、外交上の機微があるかも知れない。しかし僕には分らない。マックは全軍を失ふし、フェルデナンド大公もカルル大公も、生存のしるしを毫も見せないで、過失に過失を重ねてゐる。しかるにクトゥヅフ一人が、初めて疑ふ餘地のない勝利を博して、charme(愛)佛蘭西人どもを敗走させたところが、陸軍大臣は事の詳細を知らうといふだけの興味さへ示さないんだからね。』

『つまりそれがためさ、君。ねえ、よく考へて見給へ。萬歲、皇帝萬歲、露西亞萬歲、正教萬

* ドイツの銀貨

** 維納の大公園、種々なる娯樂の設備あり

歳い、いや何もかも美しく立派なこつた。けれど我々に取つて——つまり僕は奥太利の宮廷に代つて言ふのだが——君等の勝利がどうしたと云ふんだい？ 假りに君がカルル大公か、フェルゼナンド大公の軍が、御承知の通り、un archiduc vaut l'autre。(いづれも相劣らぬ人達なんだ)よしんばポナバルトの消防隊でもやつつけたといふ報知を齎して見給へ、我々は祝砲を鳴して喜ぶよ。ところが、今度のことは、まるでわざとのやうに奥太利を愚弄してゐるぢやないか。カルル大公は何一つ仕出ささないし、フェルゼナンド大公は恥の上塗りばかりしてゐる。剩へ君等は維納を棄てて、もうこのうへ防がうとしない。丁度「わたし達は自分で勝手にします。だからあなた方も、あなたの都も、どうなと勝手になさい。」と言はないばかりだものね。そのうへ例のシュミット將軍さ。我我はこの人を非常に愛してゐた。ところが、君等はこの人を弾丸の下へ導いてさ、我々に向つて戦勝の祝を言ふのぢやないか！ ねえ、さうだらう、君の齎した報知以上に人を馬鹿にした事は、到底考へつくことが出来ないよ。C'est comme un fait exprès, comme un fait exprès。(これは本底考へつくことが出来ないよ。)

和 平 戦 争 戦 争 戦 争 戦 争

『え、占領された？ 維納が占領されたつて？』

『單に占領されたのみならず、ポナバルトは今シエンブルンスにゐるんだよ。そして伯爵——』

わが敬愛するザルブナ伯爵は、彼の所へ御用を伺ひに出發しようとしてゐる始末さ。』

ボルコンスキイは旅の印象と、陸軍大臣の接見と、そして特に食後の疲れのために、自分の聞いてゐる言葉の意味を、充分に了解できないやうな氣持がした。

『今朝こゝへリヒテンフェルス伯爵が見えてね、』とビリーピンは語をついだ。『そして維納に於ける佛蘭西軍の閱兵式を、詳しく書いた手紙を見せてくれた。』ミューラー公や、その他いろいろな恐ろしい事が残らず書いてあつた……これでもう分つたらう、今度の戦捷が大して悦ばしいものでないつて事がね。だから、君も救世主のやうに迎へられる譯に行かないんだよ……』

第

『全くのところ、そんな事は僕に取つて没交渉だ。』クレームスの戦鬪に關する自分の報道は、奥太利の首都占領と言つたやうな出来事に比較して、まこと重大な意味を持つてゐないと感じながら、アンドレイ公爵はかう言つた。『が、どうして維納が占領されたんだらう？ あの橋は、あの有名な tête de pont(橋頭)はどうしたんだね？ そしてアウエルスベルヒ公爵は？ アウエルスベルヒ公爵が維納を防守してるといふ風評が、僕等の間で専ら行はれてゐるんだが。』と彼は言つた。

編

『アウエルスベルヒ公爵は、こちら側に——我々のゐる側に立つて防いでるよ。多分きはめて拙劣な防ぎやうだらうと思ふが、しかし、とにかく防いでゐる。ところが、維納の町は川の向つ側なんだからね。いや、橋はまだ占領されない、そして大丈夫とられる事はないと思ふよ。なぜ

* 維納の郊外にある王城

** 一七七一一一八一五年、ナポレオン麾下の元帥、後にナポリ王

つて、ちやんと地雷装置がしてあつて、萬一の場合には爆破の命令が出てるんだから。さもなかつたら、我々は疾くにボヘミヤの山中に逃げ込んでるし、君も君の軍隊も前後から砲火に挟まれて、僅かな間にもせよ酷い目にあつてゐる筈だよ。』

『が、それにしても戦争が終結した事にはならないよ。』とアンドレイ公爵は言つた。

『ところが、僕は終結してと思ふね。こゝにゐる間拔先生たちもさう思つてゐるが、たゞそれを言ひ出す勇氣がないだけさ。僕が戦争の初めに言つた事が實現されるんだよ。つまり事を決するの君等のデュレンシエ^{*}タインの小ぜりあひの力——即ち一般に火薬の力ではなく、火薬を發明した者なんだよ。』額の皺を伸してちよつと言葉を切り乍ら、ビリーピンは自分の警句の一つを繰り返すのであつた。『たゞアレクサンドル皇帝と普魯西亞王の伯林に於ける會見が、どういふ結果になるか、それが問題なんだよ。もし普魯西亞が同盟に参加して、on forcera la main a l'Autriche^{*}（無理に奥太利を立たすとする）また戦争だ。もしさうでなかつたら、第二のカムボ・フォルミオの最初の條項をどこで編纂するか、それだけが問題となる譯だね。』

『しかし何といふ非凡な天才だらう。』小さな手を握りしめて卓を叩きながら、突然アンドレイ公爵は叫んだ。『そして何といふ幸運な男だらう？』

『ビュオナパルトかい？』今にすぐ警句が出るぞと知らせるやうに額を皺めつゝ、ビリーピンは質問の調子でかう言つた。『Buonaparte^{ユオナパルト}かい？』彼は特にuの字に力を入れて言つた。『しかし僕の考へでは、彼がシェンブルンヌから奥太利に對して、法律を制定してゐる今となつては、

il faut lui faire grace de l'u^(このuの字を免じて)（そこで僕は斷乎として改正を行つてね、單にこれから彼をボナパルトと呼ぶ事にします。』

『いや、冗談はぬきにして、』とアンドレイ公爵は言つた。『一たい君は本當に戦争は終つたと考へるのかね？』

第

『僕の考へでは、奥太利は馬鹿を見ちやつたんだよ。而も今までそんな事に不馴れだつたんだからね。だから今にこの仕返しをするだらうよ。馬鹿を見たといふ譯は、第一に地方が荒された（正教聯隊は掠奪するから恐ろしいと言ふ者があるよ）。そして軍隊は全滅し首都は占領された。それといふのも、みんなサルデニヤの皇帝陛下を悦ばすためなんだよ。だからね——entre nous, mon cher. ^(この場合の語だけにと)——僕は直覺でもつて嗅ぎ附けた。奥太利は露西亞を出し抜かうとしてるよ。僕は直覺でもつてこの國と佛蘭西の關係や、また講和の計畫——露西亞から獨立して締結された祕密講和の計畫を嗅ぎ附けたよ。』

編

『そんな事が有るものか？』とアンドレイ公爵は言つた。『それは餘り陋劣だ。』

『Qui vivra, verra. ^(佛蘭西の俚諺——生きてゐるものは見ると、即ちそれは後で分るの意)』會話はこれで終つたと言ふしるしに、また皺を伸しながら、ビリーピンはかう言つた。

アンドレイ公爵が自分のために用意された部屋へ入り、さつぱりした寢間著を著、羽根いりの

* クレームス附近の山名

** 伊太利の一村落、一七九七年奥太利が佛蘭西と屈辱的平和條約を締結した所

床に潛り込み、香水を撒いて暖めてある枕に身を横たへた時、こんど自分が報告を齎した戦闘は、遠い遠い事のやうな感じがした。そして普魯西亞の同盟、奥太利の離反、ボナパルトの新しい勝利、それから明日の參内式、フランツ皇帝の拜謁、こんなものが彼の心を占めてゐた。

彼は目を閉ぢた。同時に、彼の耳の中で大砲の轟き、小銃の發射、砲車の車輪の軋みなどが響き始めた。と、再び山の上から、絲のやうに列を引いた銃兵がおりて来る、佛蘭西兵が射撃する。彼は心臓の跳るのを覺えた。彼は今シュミットと並んで前へ乗り出して行く。彈丸が周りで愉快げにひゆう／＼鳴つてゐる。彼は子供の時分から曾て經驗した事のないやうな、十倍されたる生の悦びを感じるのであつた。

ふと彼は目を醒ました：

和 平 と 争 戦
『さうだ、これはすつかりあつた事だ！……』さも幸福さうに子供らしく、自分で自分にほゝ
笑み掛けながらさう言つて、彼はたちまち若々しい深い眠りに落ちた。

一一

翌日、彼は遅く目を醒ました。過去の印象を新たにしながら、まづ第一に、フランツ皇帝に謁見しなければならぬ事を思ひ出した。次いで陸軍大臣、慇懃な奥太利の侍従武官、ビリービン、そして昨夜の會話を思ひ起した。絶えて久しく著けた事のない正服を、宮中へ出掛けるために著用して、生き生きと美しく元氣づいた彼は、片手を纏帶したまゝビリービンの書齋へ入つた。書

齋には外交團の人達が四人坐つてゐた。目下、公使館づきの書記官となつてゐるイッポリト、クラーギン公爵とは、ボルコンスキイも前から知合ひであつた。残りの三人はビリービンが紹介してくれた。

第 二 編
ビリービンの許へ出入する人達は、上流の若い裕かな陽氣な連中で、維納でもこゝでも特別な仲間を作つてゐた。その首領たるビリービンはこの仲間をわが黨、*Les notes*と呼んでゐた。殆ど外交家のみから成り立つてゐるこの仲間の人は、戦争や政治には何の共通點もない、どこかの婦人に對する關係だの、社交界の事だの、役所の勤めだの、そんなものを對象にした独自の興味を持つてゐるらしかつた。これ等の人々は見受けたところ、アンドレイ公爵を悦んでわが黨とし（さういふ取扱はごく僅かな人にしか與へなかつた）、この仲間へ迎へ入れたらしい。禮儀を重んずる心と、會話に入つて行く順序のために、彼等はアンドレイ公爵に向つて、軍隊や戰鬥に關する若干の質問をした後、會話は再び順序もない陽氣な洒落や、品定めなどに割れて了つた。

『しかし特によかつたのは、』仲間の外交官の失敗を物語りながら一人がかう言つた。『特によかつたのはかうさ。總理大臣があつたの男に向きつけて、君が倫敦へ轉任するのは寧ろ榮轉なんだから、君もさういふ風に考へるのが至當だ、と言つたんだよ。この時のあの男の恰好が目に見えるやうぢやないか？……』

『しかし諸君、何よりも悪い事がある、僕は一つクラーギンの祕密をすつば抜くよ。あの男は今不幸な身の上だらう、それをこのドン・ジュアンは利用してゐるんだ、實に恐ろしい奴さ！』

イッポリート公爵はブルテール式の肘椅子に身を横たへて、兩足を肘掛の上に重ねてゐたが、このとき急に笑ひ出した。

『Parlez-moi de ça. (それを僕に聞か)』と言つた。

『おゝ、ドン・ジュアン！ おゝ、蛇！』などといふ聲々が聞えた。

『君は知らないだらうがね、ボルコンスキイ君、』とビリーピンはアンドレイ公爵に向つて言つた。『佛蘭西軍の（あゝ、僕は危く露西亞軍のと言ふところだつた）、あらゆる暴虐も、この男が婦人の間に作つた罪と比べたら、全く何でもなくくらゐだよ。』

『La femme est la compagne de l'homme. (女は男の同伴者)』とイッポリート公爵は言つて、例の柄附眼鏡で自分の持ち上げた足を眺め始めた。

ビリーピンもわが黨も、イッポリートの目を眺めながら、腹をかゝへて笑つた。アンドレイ公爵は、自分がかつて妻のために嫉妬を感じた事のあるこのイッポリートも（これはどうしても自認しなければならぬ）、この仲間にとつては一箇の道化でしかない、といふ事を見て取つた。

『いや、僕は君にクラীগンを御馳走しなくちやならない。』とビリーピンは小聲でボルコンスキイに言つた。『政治を談ずる時のあの男と來たら、實に愛嬌だよ。鹿爪らしい様子を見のがさないやうにね。』

彼はイッポリートの傍に坐つて、例の額に皺を寄せながら、政治の話を開始した。アンドレイ公爵その他の者は、この兩人を取り巻いた。

『伯林内閣は同盟に關する意見を發表することが出来ないのだ。』とイッポリートは意味ありげに一同を見廻しながら言ひ出した。『かの最近の通牒に於ける如く……分るかね、諸君……分るかね……しかしだね、もし皇帝陛下が同盟の本質に背かれなければ……』

『待つて下さい、僕はまだ終ひまで言つてないんですから。』彼はアンドレイ公爵の手を掴まへてかう言つた。『僕の考では、干渉は非干渉よりも遙かに堅實なものです。そして……彼はちよつと言葉を途切らした。『十月二十八日附のわが飛報が拒絶されたので、それで萬事終れりと考へるのは不可能です。まあ、かういふ工合に一切の片は附くでせうな。』

彼はボルコンスキイの手を放し、それでもつて今こそすつかり言つて了つた、といふ事を知らした。

『デモステネス、汝がその黄金の口に隠せる小石によりて、我は汝を見分け得たり。』とビリーピンは言つたが、その帽子のやうに掩ひ被さつた髪の毛は、さも満足さうに頭の上で動いた。一同は笑ひ出した。イッポリートは誰より大きな聲を立てて笑つた。見受けるところ、彼は息が窒つて苦しさうであつたが、それでも粗野な笑ひを抑へることが出来なかつた。いつもじつとして動かない彼の顔は、その笑のために長くなつて見えた。

『ところでね、諸君、』とビリーピンは言つた。『ボルコンスキイ君はこの家でも、またブリュンヌでも大切なお客様だから、僕はこの土地の生活のあらゆる歡樂をもつて出来るだけ同君を饗

應したいと思ふ。もし我々が維納にゐたら、それは譯ない事だつたのだ。しかしこゝでは、dans ce vilain trou morave(このモラヴィヤの醜悪な洞穴の中では)、それが些か困難だ。で、僕は諸君に御助力を乞ふ次第なのよ。 Il faut lui faire les honneurs de Brunn.(この人にブリュンヌ市の尊敬を捧げなくちやならぬ) 君達は芝居を受け持つてくれ給へ、僕は社交界、イッポリート君、君は無論、女だ。』

『ボルコンスキイ君にアメリーを見せなくちやならんね、實に美人だ!』我黨レシトルの一人が指の端を接吻しながらさう言つた。

『全體にこの殺伐な兵隊さんを、』とビリーピンは言ふ。『もつと博愛的な見地に導く必要があるね。』

と 『けれども、僕は諸君の御饗應にあづかる事が出来るかどうか、非常に覺束ないです。それに今も出掛けなくちやならない時刻だ。』と時計を見ながらボルコンスキイは言つた。

和 『どこへ?』

『皇帝の所へ。』

『おや! おや! おや!』

『ぢや、左様なら、ボルコンスキイ君! 左様なら、公爵、なるべく早く食事に歸つて來たまへ。』といふ聲々が起つた。『我々は君に捕まつてるよ。』

『出来るだけ糧食供給や、道路の整頓を賞め給へ、皇帝と話しをする時にね。』ボルコンスキイを控室まで送り出しつゝ、ビリーピンは言つた。

『賞めたいのは山々だが、僕の知つてる限りではさういふ譯に行かないね。』ほゞ笑みながら、ボルコンスキイは答へた。

『ぢや、全體に出来るだけ餘計話し給へ。皇帝の道樂は謁見なんだから。その癖、自分で話す事は好きでもないし、上手でもないがね。それは今に分るよ。』

一一一

第 參内式の時フランス皇帝は、奥太利の將校たちの間に指定された席に立つてゐるアンドレイ公爵の顔にじつと見入り、長い頭を振つて頷いて見せただけであつた。が、參内式の後に昨日の侍從武官が、彼に謁見したいといふ皇帝の希望を慫慂に傳へた。フランス皇帝は室の真中に立つて彼を迎へた。奏問を始める前、アンドレイ公爵が奇異に感じたのは、皇帝が何を言つていゝか分からないやうに、もぢく顔顔をを赧かくした事である。

『どうです、戦争はいつ始まりました?』と彼はせか／＼と訊ねた。

アンドレイ公爵はそれに答へた。その間に續いて、『クトゥゾフは健勝か? クトゥゾフはもう大分前にクレームスを出たのか?』といった風な同じぐらゐる單純な質問が提出された。皇帝の話をする表情は丁度「自分の目的は單に一定量の質問をするにとゞまつてゐるのだ」といつたやうな工合であつた。これ等の質問に對する答が、決して彼の興味をそゝる筈のない事は、明瞭すぎるくらゐ見え透いてゐた。

『戦争は何時に始まりましたか？』と皇帝は訊ねた。

『正面の戦闘が何時に始まったかは、ちよつと申し上げ兼ねますが、しかしわたくしの居りましたデュレンシュタインでは、夕方の五時すぎに隊が攻撃を開始しました。』

ボルコンスキイはこの際、すべて自分の見聞した事を、今まで頭の中で準備した通り、まざまざと描寫開陳することが出来ると考へたので、急に活氣づきながら答へた。

しかし皇帝は微笑して彼を遮つた。

『幾哩ありますか？』

『どこから何處まででございますか、陛下』

『デュレンシュタインからクレームスまで？』

『三哩半でございます、陛下。』

『佛蘭西軍は左岸を撤退したのですか？』

『斥候の報告によりますと、最後の軍隊が夜中筏で渡河したさうでございます。』

『クレームスには糧秣は充分ですか？』

『糧秣は要求しただけの量がまだ……』

皇帝は彼を遮つた。

『シヨミット將軍は幾時に戦死しましたか？』

『七時であつたと思ひます。』

『七時。哀悼の極みだ！ 哀悼の極みだ！』

皇帝は感謝に堪へぬ由を述べて一揖した。アンドレイ公爵が退出した時、すぐさま宮廷附の人が四方から彼を取り圍んだ。あちらからもこちらからも優しい目が彼を眺め、優しい言葉が耳を撫でた。昨日の侍従武官は、なぜ宮中に泊らなかつたかと彼を咎め、自分の家へ来るやうに勧めた。陸軍大臣は彼の傍へ近づいて、皇帝が彼に功二級マリア・テレーゼ勳章を下賜された事を知らせ、祝辭を述べた。皇后附の侍従は彼を陛下の許へ招待した。大公妃も彼に謁見を望まれる旨を傳へた。彼は誰から先に返事をしていゝか分らず、幾秒かのあひだ考へを纏めてゐた。露西亞公使は彼の肩を抑へ、窓の方へつれて行つて暫く談話を交へた。

ビリービンの言葉に反して、彼の齎した報知は歡びをもつて迎へられた。謝恩祈禱式の時日も定められ、クトゥゾフは大十字マリア・テレーゼ勳章を授けられた上、全軍ことごとく賞與を受ける事となつた。ボルコンスキイは四方八方から招待を受けて、朝の間ぢゆう、奥太利のおも立つた政治家を歴訪しなければならなかつた。夕方の四時すぎに訪問を終へたボルコンスキイは、今度の戦闘とブリュンヌ行を、父に知らせる手紙を胸の中で考へながら、ビリービンの家へ歸つて來た。と、ビリービンの借りてゐる家の玄關先に、半ば荷物を積み込まれた馬車が立つてゐて、ビリービンの下男フランツがやつとの事で鞆を擔ぎながら、扉の中から出て來た。

ビリービンの住居へ歸る前にアンドレイ公爵は、行軍中の書物を準備するために本屋へ寄つて、そこで可なり長居したのである。

『どうしたんだね?』とボルコンスキイは訊ねた。

『Ach, Erlaucht (あ、開)』やつとの思ひで鞍を馬車の上へ押し上げつゝ、フランツは答へた。『わたし達はまた先の方へ出掛けて行くところでございます。悪黨め、もうわたし達のすぐ後を跟けて来やがつたんでございますよ!』

『何だつて? どうしたつて云ふんだ?』アンドレイ公爵は問ひ返した。

ビリービンはボルコンスキイと出會ひがしらにやつて来た。いつも落着き拂つたビリービンの顔に動搖の色が見えた。

『Non, non, avouez que c'est charmant. (駄目、駄目、自状し給)』と彼は言つた。『あの維納の

タボール橋の一件は! 敵は何の抵抗も受けないで、橋を通過しちまつたんだよ。』

和平と 争戦

アンドレイ公爵はてんで譯が分らなかつた。

『一たい君はどこにゐたの? 市中の馭者までが、みんな知つてゐる事を知らないなんて。』

『僕はいま大公妃殿下のところから歸つて来たんだ。あそこでは何も聞かなかつたがね。』

『そして何處でもかしくでも荷造りしてゐるのを見なかつた?』

『見なかつたよ……一體どういふ譯なんだい?』じれつたさうにアンドレイ公爵は訊ねた。

『どういふ譯だつて? かういふ譯さ、アウエルスベルヒの守つてゐた橋を佛蘭西軍が渡つたんだ。橋は爆破されなかつた。そしてミューラーはブリュンヌ街道を疾驅してゐるから、けふ明日にもこゝへ来る筈だ。』

『え、こゝへ? 一體どうして橋を爆破しなかつたんだらう、ちやんと地雷装置がしてあるのに?』

『それはこつちから君に伺ひたいくらゐさ。それは誰も、恐らくボナパルト自身も知らないだらうよ。』

ボルコンスキイは肩をすくめた。

『しかし橋が占領されたら、つまりわが軍は破滅だね。わが軍は敵に遮断されたんだね。』と彼は言つた。

第

『あゝ、そこなんだよ。』とビリービンは答へた。『ねえ、聞き給へ。昨日いつたやうに、佛蘭

二

西軍は維納へ入つた。何もかも至極結構。ところでその翌日、つまり昨日ミューラー、ランヌ、ベ

編

リヤールなどといふ元帥連中が、騎馬で橋の方へ出掛けたのだ。三人揃つてガスコン生れだとい

ふ所に、注意してくれ給へ。「諸君、」とその中の一人が言ひ出した。「御承知の通り。タボールの橋は地雷装置と、對抗装置がしてあります。そしてその前には脅威的な橋頭堡と、一萬五千の軍隊がゐて、萬一の時には橋を爆破し、我々を通さぬやうに命じられてゐます。しかし、もし我がこの橋を奪取したら、ナポレオン皇帝陛下は嗚かし御愉快に思召すでせうな。一つ三人で乗り込んで、この橋を取らうぢやありませんか。」「やりませう。」と他の連中も應じた。そこで彼等は橋に乗り込んで占領し、無事に通過した譯なのさ。で、いや全軍を率ゐてドゥナイ河のこ

* 佛蘭西の一州の名、この土地の人傲慢不遜なるをもつて、ガスコンの名はこの性質を現はす普通名詞となれ

ちら側を、我々や君方や、また君方の交通線を指して前進してゐるんだ。』
『冗談は澤山だよ。』アンドレイ公爵は沈んだ調子で眞面目に言った。

この報告はアンドレイ公爵に取つて憂はしく、また同時に快かつたのである。

露西亞軍がかりした絶望的状态にある事を知るや否や、彼の頭に次のやうな想念が浮んだ。露西亞軍をこの状態から救ひ出すのは、餘人ならぬ自分の使命ではなからうか。この出来事こそ自分を將校團の有象無象の間から擢き出して、光榮に達する第一歩を示してくれるト*。ロンではなからうか？ ビリービンの言葉を聞いてる中に、彼はもう自分が軍隊へ歸來して、軍事會議で全軍を救助すべき唯一の議案を提出し、その實行を自分一人が委任される、などと想像してゐるのであつた。

『冗談は澤山だよ。』と彼は言った。

『冗談ぢやない。』とビリービンは語を續けた。『これ以上正直で、これ以上かなしい話はありません。この元帥達は單獨で橋へやつて來て、白い手巾を掲げた。そしてもう休戦だ、自分達が來たのは、アウエルスベルヒ公爵と話をするためなのだ、と誓つたものさ。當直將校は彼等を橋頭堡に入らせた。彼等はこの將校にガスコン式の與太話を、ありつたけして聞かして、やれ戦争は終つたの、やれフランス皇帝がボナパルトに會見を申し込んだの、やれ今ちよつとアウエルスベルヒ公爵に會ひたいのと、後から後からガスコン式の出たら目を並べ立てた。で、將校はアウエルスベルヒを呼びにやつたんだ。元帥達は將校達をかゝへたり、冗談を言つたり、大砲の上

に乗つかつたりしたさうだ。さうかうしてゐる間に佛蘭西の一隊が、そつと見えないやうに橋の上によつて來て、燃焼物の入つた袋を水の中へ捨てちまつたのさ。さして橋頭堡に近寄つたと思ひ給へ。兎角する中に到頭わが愛すべき公爵、アウエルスベルヒ・フォン・マウテルン中將が現はれた。『おゝ愛すべき敵よ！ 奧太利軍の花、土耳其戦争の英雄！ 敵對關係は終を告げました。我はもう手を握り合つてもいゝのです。ナポレオン皇帝は、アウエルスベルヒ公爵を親しく知りたといふ希望に燃えてゐられます。』手つ取り早く言つて了へば、ガスコン人の名に背かぬぬこれらの元帥達は、美しい言葉の有りたけをアウエルスベルヒに振り撒いたので、こちらは有名な佛蘭西の元帥達から、急に狎々しく持ち掛けられたのが嬉しくなつて了つたんだ。そしてミニラーの外套や駝鳥の羽根にすつかり目がくらみ、たゞもうその火のやうな輝きにばかりに見とれて、敵に對して當然ひらくべき義務のある自分自身の火(砲)を忘れて了つたのさ。』

その生き生きした眞剣な調子にも似ず、ビリービンはこの警句を言つた後で、それを評價し咀嚼する餘裕を與へるために、ちよつと言葉を休む事を忘れなかつた。

『佛蘭西の大隊は橋頭堡に駆け込んで、大砲を破壊し橋を占領して了つた。いや、しかし何より面白いのは、』己れの物語りの巧みさに自らを慰めつゝ、彼は言葉を續けた。『ほかでもない、地雷に點火して、橋梁爆破の信號發砲をする筈になつてゐる、砲の掛りをしてゐた軍曹は、佛蘭西の軍隊が橋へ闖入して來るのを見つけて、既に發射しようとしたんだよ。するとランヌがその

* フランスの軍港、ナポレオンが第一の勳功を立てたる所

手を控へた。察するところ、味方の將軍よりも伶俐だつたらしいこの軍曹は、アウエルスベルヒに近寄つて、「公爵、閣下は騙されていらつしやいます。あれを御覽なさい、もうそこに佛蘭西兵がをります！」ミューラーはもし軍曹に勝手にものを言はしたら、事は破れてしまふと思つたので、わざとびつくりしたやうな顔附をして（真正正銘のガスコン人だ）、アウエルスベルヒに向つて、「あれほど全世界に稱揚されてゐる、塊太利の軍規にも似合ひませんね、閣下が下級の兵士にあんな口の利き方を許されるなんて！」*C'est génial.*（實に天）アウエルスベルヒ公爵は侮辱を感じて、軍曹に禁錮を命じた。ねえ、さうぢやないか。全く見事ぢやないか、このタポール橋の顛末は！これは本當に馬鹿げてると言ふのでもなければ、陋劣と言ふのでもないし……』

と 争 戦
『*C'est trahison peut-être.*（もしかしたら裏切、かも知れないよ）』とアンドレイ公爵は言つた。灰色の外套、負傷、火薬の煙、そして自分を待つてゐる名譽——などを生き生きと胸に描きながら。

和 平
『でもないんだ。だから餘計に塊太利の皇室は、馬鹿々々しい位置に立たされちまつたのさ。』とビリーピンは語り續けた。『これは裏切でもなければ、陋劣でもなく、また愚劣でもない。これはあのウルム事件と同じさ。』彼は適當の表現を探すやうにちよつと考へ込んだ。『これは……これは例のマック式なんだよ。我々はすつかりマック化して了つたのさ。』自分はまた一つ警句を吐いた、而もそれは清新な警句で、いつまでも繰り返されるに相違ない、とかう感じながら彼は言葉を結んだ。

その時まで額に寄せられてゐた皺は、満足のしるしにぱつと伸びた。彼は心もち微笑しながら自分の爪を眺め始めた。

『君どこへ？』急に立ち上つて、自分の部屋をさして歩き出したアンドレイ公爵に向つて、彼は問ひかけた。

『僕は出掛ける。』

『どこへ？』

『隊へ。』

『だつて、君はまだ二日逗留するつもりだつたぢやないか。』

『いや、今度はもうすぐ出立するよ。』

二 アンドレイ公爵は出發の指圖をして、自分の部屋へ去つた。

編 一 『ねえ君、』彼の部屋へ入つて來ながら、ビリーピンはかう言つた。『僕は君の事を考へたんだよ。なぜ君は歸るんだね？』

この論法に辯駁の餘地がない事を證明するやうに、彼の顔の皺が一時に消え失せた。

アンドレイ公爵は訝かしげに相手を見やつたが、何とも返事しなかつた。

『なぜ君は歸るんだね？ いや分つてる、いま君の軍隊が危険な状態にあるので、さつそく軍隊へ駆けつけるのを、自分の義務と考へてるんだらう？ 僕にはそれが分るよ、*C'est de l'héroïsme.*（それは立派な、英雄主義だ）』

『決してそんな。』とアンドレイ公爵は言つた。

『しかし君は一箇の哲學者だから、すつかりそれになり切つた方がいゝよ。もし別の側面から觀察したら、君の義務は寧ろ自己を護るに在るといふ事が、今に分つて来るから。そんなことは誰か他の連中に——もうそれ以外なんの役にも立たない連中に任して置き給へ……君は別に歸つて來いと命令されてもゐないのだし、こゝでも君を放さなかつたのだから、従つて君はこゝに居残つて、僕等と一緒に不幸な運命の導くがまゝに、どこへなりと出掛けて構はないよ。何でも話によると、オルミューツへ行かざうだ。オルミューツはなか／＼愛すべき町だよ。一つ僕と一緒に、呑氣にあの馬車に乗つて行かうぢやないか。』

『冗談はやめてくれ給へ、ビリービン君。』とボルコンスキイは言つた。

と争戦 『僕は君に親友として眞底から言つてるんだよ。冷静に判斷して見給へ。君は今こゝに居残つて構はないのに、どこへ何のために出掛けようと言ふんだい？ 目下、君を待つてるものは二つに一つだ（彼は左のこめかみの上に皺を拵へた）。君が軍隊まで行き着かない中に講和が締結されるか、或ひはクトゥゾフ全軍の敗北と汚辱か。』

ビリービンは、相手のデレムマが最早あらそふ餘地のない事を知らせるやうに、皺を伸ばした。『僕はそんな事を判斷してゐる譯に行かない。』冷やかにアンドレイ公爵は言つた。そして心の中では「俺は友軍を救ひに行くんだ。」と考へた。

『Mon cher, vous êtes un héros. (公爵、君は英雄だ)』とビリービンは言つた。

一三

その夜、陸軍大臣に告別したボルコンスキイは、どこで友軍を見つけられる事やら自分でも分らず、みち／＼佛蘭西軍の虜となるのを恐れ乍ら、クレームスへ向けて馬車を驅つた。

ブリュンヌの宮廷に屬する人々は全部荷造りをして、重い物は既にオルミューツへ發送されたのである。エツェルスドルフの附近で、アンドレイ公爵はとある街道に乗り入つたが、そこには露西亞の軍隊が無性に急ぎながら、滅茶々な混亂状態で進んでゐる道であつた。街道はすつかり車輛で堰き止められ、とても馬車で行く譯に行かないので、アンドレイ公爵は哥薩克兵の上官から馬と兵卒を借り、饑ゑて疲れた體を馬上に揺られつゝ、輜重の列を追ひ越し追ひ越しして、總指揮官と自分の行李を探しながら進んだ。友軍の状況に關するこの上なく忌はしい風説が、途々彼の耳に入つた。而も無秩序にのがれ走る軍隊の様は、この風説を裏書するやうであつた。

『英吉利の富が世界の涯よりこの地へ運び來し露西亞軍も、やがて同様の運命（ウムルに於ける煥軍の運命）に陥るべし。』戦役の開始前、ボナパルトが麾下の軍隊に與へた訓令の一句を、彼は今おもひ起した。そしてこの言葉は彼の心に、不出世の英雄に對する驚異の念と、誇を傷つけられた感じと、名譽に對する希望とを、同じくらゐるな力をもつて呼び醒ますのであつた。「が、もし死ぬより他に仕様がなくなつたら？」と彼は考へた。「必要とあらば仕方がないさ！ 俺だつて他の者に劣らないくらゐの死に方をして見せる。」

これ等の果しもなく入り交つて連なる軍隊、聯隊行李、砲廠車、砲兵隊、そしてまた車輛、また車輛と、三列もしくは四列に並んで泥道を堰きながら、互に追ひ附いたり追ひ越したりしてゐる、種々様々な恰好をした車輛をば、アンドレイ公爵は蔑むやうな眼附で眺めた。前からも後ろからも、車輪の軋み、馬車や砲車の轟き、馬の足掻き、鞭の響き、馬を叱する聲、兵卒や従卒や將校の互に罵り合ふ聲などが、聽覺の及ぶ限り四方から聞えて來るのであつた。道の兩側にはところ／＼斃馬の皮を剥がれたのや剥がれないのや、毀れた車輛や（その傍には何を待つものやら兵士が幾人か寂しさうに坐つてゐる）、落伍した兵士などが見受けられた。これ等の兵士は群をなして、近村へ押し掛けて行つたり、或ひは雞や、羊や、乾草や、何か一杯つめた袋などを引つ張つて、村の方から歸つて來たりしてゐる。

下りや上りにさし掛ると、兵士の群は一層ぎつしりと押し詰められて、呻くやうな人々の叫び聲がやみ間なく聞えた。兵士らは膝まで泥濘に没して、砲や車輛にしがみついてゐた。鞭は振られ、馬蹄は迂り、馬具の革紐は切れ、胸は叫喚の聲に破れんばかりであつた。軍の行動を管理してゐる將校たちは、輜重の間をあちこち乗り廻してゐた。彼等の聲はわあつといふ全體のどよみのために、力なく聞えるのであつた。この混亂を制することは所詮出來ない、かう云ふ絶望の色がその顔附で分つた。

「これがわが親愛なる正教國の軍隊だ。」ふとビリービンの言葉を思ひ出しながら、彼は考へた。

この中の誰かに總指揮官の所在を聞かうと思ひ、彼は輜重隊の方へ近づいた。と、彼のすぐ眞正面に、兵隊が有り合せの材料で作つたらしい、田舎馬車と有蓋一頭曳馬車と幌馬車との混血兒のやうな、一頭立の奇態な馬車が進んでゐた。馬車の中には馭者を勤めてゐる兵隊と、顔から肩をすつかり布でくるんで、皮の日蔽ひの陰に坐り、膝かけに腰から下を隠した女が乗つてゐた。

アンドレイ公爵がその方へ近寄つて、兵隊に問ひ掛けようとする途端、有蓋馬車に乗つてゐる女の恐ろしい叫び聲が、彼の注意を引いた。輜重隊の管理をしてゐる一人の將校が、他の車を乗り越さうとしたからと言つて、この小馬車の馭者をしてゐる兵隊を打つたのである。鞭は馬車の膝掛けにびし／＼と當つた。女は突き刺すやうな悲鳴を上げてゐる。アンドレイ公爵を見つけると、彼女は膝かけから體を抜き出し、毛氈のやうな布の中から瘦せた兩手をさし出して、聲を限りに叫ぶのであつた。

『副官どの！……副官どの！……後生ですから……助けて下さい……まあ、一體どうなるんでせう？……わたしは第七獵兵隊附の軍醫の家内ですが……通してやらないと仰しやいますから……わたし共は遅れて了つて、つれの者にはくれたのでございます……』

『煎餅のやうに叩き潰してくれろぞ、歸れ！』と將校は憎々しげに兵隊を囁きつけた。『その阿魔をつれて歸つちまへ。』

『副官どの、助けて下さい。一體どうしたと言ふんでせう？』と軍醫の妻は叫んだ。

『この車を通しておやんなさい。あなたはこの人が女だつて事に氣が附かないんですか？』ア

ンドレイ公爵は將校に近寄りかう言つた。

將校は彼をちらと見たが、返事もせずにもたまた兵隊の方へ向いた。「貴様ひどい目に合ふんだぞ、返さんか！」

「通しておやりなさいと言つてるぢやありませんか。」唇を噛みながらアンドレイ公爵はまた繰り返した。

「一たい貴様は何者だ！」不意に酔つ拂ひらしい狂憤を帯びて、將校は彼の方へ振り向いた。

「貴様は全體なに者だ？ 貴様は（彼は貴様といふ言葉に特に力を入れた）長官でもあると言ふのかい？ この長官は俺だぞ、貴様ぢやない。こら、後へかへれ。」と彼はまた繰り返す。

「煎餅のやうに叩き潰してくれろぞ。」

察するところ、この言ひ廻しが將校の御意に召したらしい。

「小氣味よく副官の奴をやつつけたなあ。」といふ聲が後ろから聞えた。

アンドレイ公爵はこの將校が、自分でも何を言つてるか分らないほど、いはれの無い、酔ひどれじみた狂憤の發作状態にある事を悟つた。小馬車に乗つてゐる軍醫の妻を保護しようとする態度には、自分が何より最も惧れてゐる、ridicule（笑ふ事）なるものに満ちてゐることも、彼は知つてゐた。しかし本能は別な事を彼に囁いた。將校が最後の言葉を語り終へない中に、アンドレイ公爵は忿怒のために顔を醜くしながら、相手の傍へ詰め寄つて鞭を振り上げた。

「通しておやりなさい！」

將校は片手を一振りして、急がしげに傍を離れた。

『いつでもこの連中のお蔭で、參謀連中のお蔭で、萬事めちや／＼になつちまふのだ。』と彼はぶつ／＼ぼやいた。「勝手にするが、い。」

アンドレイ公爵は目も上げないで、彼を救ひ主と呼ぶ軍醫の妻の傍を忙しげに立ち去つた。そして今的一幕を極めて微細なふし／＼まで思ひ返し、嫌惡の念を抱きながら、總指揮官がゐると教へられた村の方へと先を急いだ。

村へ入ると彼は馬をおりて、まづ目に映つた家をさして進んで行つた。せめてちよつとの間でも休息して、何か一口食事をし、絶えず自分を苦める腹立たしい思想を、はつきり整頓しようといふつもりであつた。

「あれは無頼漢の群で軍隊ぢやない。」最初に行き當つた家の窓に近寄りつゝ、彼はさう考へた。と、聞き覚えのある聲が彼の名を呼んだ。

彼は邊りを見廻した。小さな窓からネスギーツキイの美しい顔が覗いてゐる。ネスギーツキイは沾ひのある口で何やらにちや／＼噛みながら、彼を手招きしてゐるのであつた。

『ボルコンスキイ、ボルコンスキイ、聞えないのかね一體？ 早く來給へ。』と彼は叫んだ。

家の中へ入るとネスギーツキイのほかに、いま一人の副官の何やら食べてゐる姿が、彼の目に入つた。彼らは慌たゞしげにボルコンスキイに向つて、「何か新しい事を知らないか？」と問ひ掛けた。二人の友の見馴れた顔に、アンドレイ公爵は恐怖と不安の表情を讀んだ。いつも笑つて

ばかりゐるネスギーツキイの顔に、この表情が特に著しかった。

『総指揮官はどこ？』ボルコンスキイは訊ねた。

『こゝだよ、あの家さ。』と副官は答へた。

『え、どうなんだね、講和とか降伏とかいふのは本當かね？』とネスギーツキイは訊ねた。

『それは僕の方から君達に訊きたいとこさ。僕は命懸けでこゝへ着いたといふよりほか、なんにも知らないんだよ。』

『ところで友軍の有様は、君、何といふ事だらう！ 實に恐ろしい！ 僕は、君、つくづく後悔してゐるよ！ あの時マックの事を笑つたが、あれよりもまだ酷いはめになつたんだからね。』とネスギーツキイは言つた。『まあ、腰を掛けて何か食べ給へ。』

『今はとても行李も何も探し出せやしませんよ、公爵。あなたのピョートルはどこにあるやら、さつぱり行きがた知れずです。』と、いま一人の副官が言ふ。

『一たい本營はどこにあるんですか？』

『ツナイムに宿營してゐるんです。』

『僕はねえ、いるものをすつかり一纏めにして、二頭の馬に積んで了つたんだ。』とネスギーツキイが言つた。『しかも立派な荷造りをして貰つてね。ボヘミヤの山越しに逃げたつて大丈夫なくらゐさ。いや、もう散々だよ。おや、君どうしたんだい、きつと工合がわるいんだらう、何だつてそんなに慄へるんだい。』アンドレイ公爵がまるで電池にでも觸れたやうに、びくり／＼

と痙攣してゐるのに氣づいて、ネスギーツキイは訊ねた。

『何でもない。』とアンドレイ公爵は答へた。彼はこの瞬間さきほどの軍醫の細君と、輜重隊

將校との衝突を思ひ出したのである。

『総指揮官はこゝで何をしてみられる？』と彼は問ひかけた。

『なんにも分らんよ。』とネスギーツキイ。

『僕にはたつた一つ分つてる。それは、何もかも下劣だつて事だ、實際下劣だ、下劣だ。』とアンドレイ公爵は言つた。そして総指揮官の宿泊してゐる家をさして出掛けた。

大きな聲で互に話し合つてゐる哥薩克兵たちや、疲れてへと／＼になつた幕僚の乗馬や、クトゥゾフの馬車などの傍を通り抜けて、アンドレイ公爵は玄關へ入つた。アンドレイ公爵が聞いて來た通り、クトゥゾフはバグラチオン公爵とヴィローテルと共に、その百姓家の中にゐた。ヴィローテルは戦死したシュミットの後任となつた奥太利の將官である。玄關では小柄なコズロフスキイが、書記の前にしゃがんでゐ、書記は軍服の袖口を折り返して、逆さに伏せた桶の上で急がしげに書き物をしてゐる。コズロフスキイはやはり一晩ぢゆう寝なかつたと見えて、疲れ切つたやうな顔附をしてゐる。彼はアンドレイ公爵の方をちらと眺めたが、お愛想に首を振らうともしなかつた。

『第二線……書いたか？』と彼は書記に口授しながら言葉を續けた。『キーエフ選抜兵隊、ボ
ドリーリ……』

『それではとても追ひ附けませんよ。』と書記はコズローフスキイの方へ振り向きながら、ぞんざいな腹立たしげな調子で答へた。

このとき扉の陰から、クトゥゾフの元氣らしい而も不満げな聲が、とき／＼聞き覚えのないも一人の聲に遮られながら聞えて來た。この聲の響や、コズローフスキイが自分を見た時のそつけない表情や、疲れた書記のぞんざいな調子や、コズローフスキイと書記が總指揮官のそば近く、床の上に桶を伏せてその傍に蹲んでゐる事や、馬の口を取つてゐる哥薩克たちが窓の下で大聲に笑つてゐる事など、これらすべての状態から推して、何か異常な、そして不幸な出來事が突發するに相違ない、とアンドレイ公爵は直覺した。

アンドレイ公爵はいろ／＼な質問を振り翳して、執拗にコズローフスキイに迫つた。

『今すぐ、公爵。』とコズローフスキイは言つた。『バグラチオン將軍に授ける作戰命令を書いてるんだ。』

『ぢや降伏は？』

『そんな事は決してない。戦闘準備はすっかり出來ちやつたんだよ。』

アンドレイ公爵は聲の聞える戸口へ進んだ。しかし彼が扉を開けようとした途端、部屋の中の聲はばつたり熄んで、扉がひとりでに開いた。そして腫れぼつたい顔に鷲鼻を聳やかした、クトゥゾフが闕の上に現はれた。アンドレイ公爵はクトゥゾフの眞向ひに立つた。けれど種々の想念や配慮が根強く總指揮官の心を領して、その視覺を曇らしてゐるかのやうであつた。それは鋭

い隻眼の表情で見分けられた。彼は自分の副官の顔を眞正面から見ながら、まだそれと氣が附かなかつたのである。

『どうだ、濟んだかな？』と彼はコズローフスキイに聲をかけた。

『たゞ今すぐでございませう、閣下。』

バグラチオンはしつかりした、動きの少い、東洋型の顔をした、脊の低い、沾ひのない、まださほど年取つてゐない男であつたが、總指揮官の後から出て來た。

『たゞ今歸つて參りました。』アンドレイ公爵は封書を差し出したが、かなり大きな聲で繰り返した。

『あゝ、維納からか？ 宜しい。また後で、後で！』

クトゥゾフはバグラチオンと一緒に、玄關の方へ出て行つた。『ぢや公爵、失敬。』と彼はバグラチオンに言つた。『どうか無事で。君が偉勳を樹てるやうに祝福するよ。』

クトゥゾフの顔は不意に柔らぎ、涙がその目に現はれた。彼は左手を伸してバグラチオンを引き寄せ、指環の嵌まつてゐる右手で、さも馴れたやうな手ぶりで十字を切り、自分の片頬を前へ差し出した。が、バグラチオンはそこでなく頸筋に接吻した。

『どうか無事で！』からクトゥゾフは繰り返し、幌馬車に近寄つた。『俺と一緒に乗らんか。』と彼はボルコンスキイに言つた。

『閣下、わたしはこゝで何かお役に立ちたうございます。どうかバグラチオン公爵の枝隊に残して下さい。』

『まあ乗れ。』とクトゥゾフは勧めた。そしてボルコンスキイの躊躇してゐるのを見て、『わたし自身にもいゝ將校が必要なんだ、わし自身にも必要なんだよ。』

二人は幌馬車に乗つて、數分のみひだ無言のまゝ進んだ。

『これから先にまだく澤山いろんな事があるよ。』恰もボルコンスキイの心中を察した様に、彼は老人らしい明察の表情を浮べながら言つた。『もしあの枝隊の中から、せめて十分の一だけでも、明日無事に歸還したら、わしは神に感謝するよ。』とクトゥゾフは獨りごとのやうに言ひ足した。

平 アンドレイ公爵はクトゥゾフを眺めた。と、一尺あまり離れた邊に、クトゥゾフの片一方つづられた目と、イズマイルの役で銃丸に貫かれた顛顛の傷痕の綺麗に洗ひ上げた皺が、アンドレイ公爵の眼に映つた。「さうだ、將軍は部下の人々の死について、あゝいふ冷靜な口をきく權利を持つてゐるのだ！」とボルコンスキイは考へた。

『それですから、わたしもあの枝隊へ遣つて下さいと、お願いするんです。』と彼は言つた。

クトゥゾフは答へなかつた。彼はもう自分の言つた事を忘れて了つたやうに、物思はしげにじつと坐つてゐた。五分ばかりたつてから、柔かい馬車の發條に調子よく體を揺られながら、クトゥゾフはアンドレイ公爵の方へ振り向いた。その顔には興奮の跡すら見えなかつた。彼は微妙

な冷笑を浮べつゝ、フリンツ皇帝謁見の詳細や、クレームスの役に關し宮中で耳にした批評や、互に知り合つてゐる婦人の噂などを、アンドレイ公爵に訊くのであつた。

一四

十一月一日クトゥゾフは味方の斥候を通じて、麾下の軍隊を殆ど救ひのない状態に陥らせる様な、恐ろしい情報を受け取つた。斥候の報告に依ると、佛蘭西の大軍は維納の橋を渡つて、目下露西亞内地から急行してゐる援軍と、クトゥゾフ軍との交通線を目がけて進んでゐるのであつた。もしクトゥゾフがクレームスにとゞまらうと決心すれば、十五萬のナポレオン軍は一切の交通路を遮斷し、僅か四萬の疲憊しつくした軍勢を圍んで、ウルムに於けるマックと同じ状態に陥らせるに相違ない。もしクトゥゾフが、露西亞の援軍と友軍とを繋ぐ道路を放擲すれば、彼は優越せる敵の軍勢を防ぎながら、不案内な道もないボヘミヤの山地に分け入つて、ブクスゲヴェンとの連絡に對する、一切の望みを放棄しなければならぬ。もしクトゥゾフが増援軍との連絡を望んで、クレームスからオルミューツに向つて退却を決心すれば、維納の橋を渡つて來た佛蘭西軍に、途中で先んじられる慮れがある。さすれば三倍も優勢な敵に兩方から挟まれたまゝ、すべての重砲類や輜重類に煩はされながら、行軍中の戦闘を餘儀なくされる事になる。クトゥゾフはこの最後の方法を選んだ。

* ロシヤ増援軍の指揮官、一七五〇—一八一二年

斥候の報告に依れば、佛蘭西軍は強行軍でツナイムへ進んでゐるのであつた。ツナイムはクトゥゾフの退却の途上に横はつてゐる町で、こゝからは百露里^(我三)以上も前方にある。佛蘭西軍に先んじてツナイムに達するのは、つまり友軍救助に大光明を得る事となる。佛蘭西軍をして味方よりも先にツナイムに入らせるのは、つまり確實に友軍をウルム役と同じ恥辱に陥れるか、或ひは全滅させて了ふか、二つに一つを意味するのだ。しかし全軍悉く引率して佛蘭西軍に先んじるのは、到底不可能であつた。維納からツナイムに至る佛蘭西軍の道路は、クレームスからツナイムに至る露西亞軍の道路より、短くしてしかも良好である。

報告を受け取つた夜クトゥゾフは、四千人より成るバグラチオンの前衛隊を右方の山ごしに、クレームス・ツナイム街道から、維納ツナイム街道へ向けて出發させた。バグラチオンはこの行程を不眠不休で押し通し、ツナイムを後ろに維納に面して軍を止め、もし佛蘭西軍に先んじる事が出来たなら、能ふかぎり敵を牽制する手筈であつた。クトゥゾフ自身は一切の重砲・輜重類を率ゐて、ツナイムさして出發した。

空腹を抱へた跣足同様の兵士を率ゐ、嵐の吹きすさむ夜四十五露里の山中を、路らしい路もなく乗り越えて、落伍者のために三分の一の兵力を減しながら、バグラチオンは維納ツナイム街道筋のホルラブルンに出た。それは維納からホルラブルンに向つて進行中の佛蘭西軍よりも、二三時間まへの事であつた。クトゥゾフが重砲類を曳いてツナイムに到着するには、まだまる一晝夜行進を続けなければならなかつた。で、味方の軍を救ふために、バグラチオンは僅か四千の餓を

疲れた兵士を率ゐて、ホルラブルンに相會した敵軍を、一晝夜の間支へなければならぬ。が、それは明かに不可能の事であつた。けれども不思議な運命は、不可能を可能にしたのである。

かの戦はずして維納の橋を、佛蘭西軍の手に與へた偽りの成功は、今度も同様にミューラーをして、クトゥゾフをも欺いて見ようといふ氣を起さした。ツナイム街道でバグラチオンの微弱な枝隊を迎へたミューラーは、これをクトゥゾフの全軍であると考へた。この軍勢を確實に潰滅させるために、彼は少し遅れて維納を出發し、いま前進の途上にある本軍を待ち合せることにした。彼はこの目的をもつて、兩軍が己れの位置を換へず、また今の場所から少しも移動しないといふ條件の下に、三日間の休戦を申し込んだ。ミューラーは目下和議が進行中であるから、無益の流血を避けるために、休戦を申し込むのだと稱した。尖兵に立つてゐた奥太利の將軍ノスチツ伯爵は、ミューラーの軍使の言葉を信じ、バグラチオンの枝隊を曝露しながら退却した。いま一人の軍使は露西亞の線内に入つて来て、やはり講和條約の情報を披露し、三日間の休戦を露西亞軍に提議した。バグラチオンは一存で休戦を承諾することも、また拒絶することも出来かねる由を答へて、休戦の申込を報告すべく副官をクトゥゾフの許へ遣はした。

休戦はクトゥゾフにとつて、時日の餘裕を生み出す唯一の方法であつた。その間に疲れきつたバグラチオンの枝隊を休息させ、輜重や重砲類をツナイムに向けて、僅か一行程だけでも進めることが出来る(輜重・重砲類の輸送は佛蘭西軍に隠して行はれてゐたのである)。休戦の申込は友軍を救助する唯一の、そして思ひがけない可能を與へたのである。この報告を受け取ると、ク

トッゾフはさつそく自分の屬僚である侍従武官ギンツェンゲローデ將軍を敵の陣營へ送つた。ギンツェンゲローデは單に休戦を受諾するのみならず、降伏の條件をも提出すべき手筈になつてゐた。その間にクトッゾフは副官たちを後方へ遣はし、全軍の輜重類をクレームス・ツナイム街道に沿うて、出来るだけ急がすやうに命令した。疲れて餓ゑきつたバグラチオンの軍隊は、本軍と輜重隊の動作の墻をしながら、八倍も優勢な敵軍と、單獨に對峙してゐなければならなかつた。クトッゾフの豫察は的中した。何らの義務をも生じないこの降伏の申込は、輜重の幾部分を通過させる餘裕を與へるだらうといふ豫想も、またミュラーの過失は即刻發見されるに相違ないといふ想像も、立派に的中したのである。ホルラブルンより二十五露里はなれてゐる、シェンブルンヌにあつたボナバルトがミュラーの報告と、休戦および降伏に關する案文を受け取るや否や、即座に敵の詭計を見破つた。そしてミュラーにあてて次の書翰を認めた。

和 平 争 戰
 ミュラー公へ。千八百五年霧月二十五日

午前八時、シェンブルンヌにて

余は卿に對する不満を表はすべく、適當の言葉を發見するに苦しむ。卿は余の前衛を指揮するのみにて、余の命令を待たずして休戦をなすの權を有せず、卿は余をして戦役の果實を失はしめたり。即刻休戦を破棄して敵に向はれよ。この降伏狀に署名せし將軍は、これをなすべき權限を有せざるのみならず、露西亞皇帝一人を除くのほか、何人もこの權を有せずと宣告せられよ。

さはれ、もし露西亞皇帝にしてこの條件を承諾なさば、余も亦これに贊同すべし。然れども、こは一箇の奸策に他ならず、行きて露西亞軍を潰滅せよ……卿は露西亞軍の輜重と大砲を鹵獲するの便宜を有す。

露西亞皇帝の侍従武官は要するに一箇の……權利を有せざる將校輩に何らの意味なし。この侍従武官も同じく權利を有せず……奧太利軍は維納渡橋の際、卿の手に乗りたり。今や卿は露西亞侍従武官の手に乗りつゝあるなり。

ナポレオン

二 ボナバルトの副官はこの恐ろしい手紙をもつて、全速力でミュラーの許へ馬を驅つた。ボナバルト自身も、もはや將軍を信任できなくなつたので、殆ど調理の出來あがつてゐる犧牲を逸する事を懼れ、全軍を率ゐて戰場に向つた。折しもバグラチオン枝隊の四千人は、愉快げに焚火を圍んで、濡れたものを乾かしたり、體を暖めたり、三日目にやつと始めて粥を煮たりしながら、唯一人として目前に迫つてゐる事を知りもしなければ、考へもしなかつた。

一五

午後三時すぎにアンドレイ公爵は、たつて自分の願ひをクトッゾフに承知して貰つて、グルント

* フランス第二共和政の時用ひし曆の第二月、太陽曆十月二十二日より十一月二十日に至る間をいふ。

へ到着すると、猶豫なくバグラチオンの許へ出頭した。ボナバルトの副官はまだミュラーの枝隊へ着かなかつたので、戦ひは開始されてゐなかつた。バグラチオン枝隊では大局の進行を知らないで、講和の噂などしてゐたけれど、その實現の可能を信じるものはなかつた。また戦鬪の噂もしてゐたが、やはり間近く戦鬪のある事を信じなかつた。バグラチオンはボルコンスキイが、クトゥゾフの愛と信任を受けつゝある副官だと知つてゐたから、特別に破格な待遇をするのだと云ふやうな、上官らしい態度で彼を引見し、恐らく今日明日にも戦争があるだらうと言ひ、戦鬪ぢゆう自分の傍に居るとも、または後衛にあつて退却の秩序を監督するとも（これもやはり非常に重要な事だ）、どちらでもボルコンスキイの自由に任せると言つた。

『尤も今日は多分戦鬪はないだらう。』アンドレイ公爵を安心させるかのやうに、バグラチオンはかう言ひ足した。

「もしこの男が、たゞ勳章にありつくために出掛ける世間なみの參謀つきの伊達男なら、後衛にゐたつて賞與を貰ふに違ひない。が、もし俺と一緒にゐたいといふなら、それもよからう：勇氣のある將校なら何かの役に立つだらう。」とバグラチオンは考へた。アンドレイ公爵は何も答へないで、陣地を一巡して軍の配置を知りたいと許可を乞うた。それは何か命令を託された場合、自分の行くべき所を知つて置かねばならぬからであつた。はいからな服装をして、人差指にダイヤモンドの指環を嵌め、下手な癖に佛蘭西語で話したがる美男子の當直將校が、アンドレイ公爵の案内を自から申し出た。

どちらを向いても濡れしよぼけた沈んだ顔附で、何やら探してでもゐるやうな將校たちや、近在から戸、床几、垣根など引つ張つて來る兵士らが見受けられた。

『公爵、この連中には迎もかなひませんよ。』當直佐官はこれ等の人々を指さし乍ら言つた。

『隊長たちが勝手に出歩かせるもんですから、ほらこゝに、』その邊に張られた酒保の天幕を指さして、『皆あつまつて坐り込んでゐるんですよ。今朝ほどすつかり追つ拂つたんですが、御覽なさい、また一杯です。公爵、一つあそこへ寄つて、脅かしてやらなきやなりません。ほんのちよつとです。』

『寄りませう。わたしも乾酪と麵麩を買つて行きますから。』まだ腹を拵へる暇のなかつたアンドレイ公爵はさう言つた。

『どうして言つて下さらなかつたのです、公爵？ わたしが何かお振舞しましたのに。』彼等は馬をおりて酒保の天幕へ入つた。疲れ切つた眞赤な顔附の將校が幾人か、卓に向つて飲んだり食つたりしてゐる。

『え、諸君、一體これは何事ですか？』もう幾度も幾度も同じ事を繰り返した人のやうな調子で、當直佐官は詰るやうに言つた。『そんなに部署を離れちやいかんぢやありませんか。誰もこゝへ來ちやいけないといふ、將軍の御命令ですよ。あゝ、君、二等大尉。』脊の低い、汚い、瘡せた砲兵將校に向つて、彼はかう言つた。こちらは靴なしの（彼は靴を酒保に渡して、乾かさせてゐたのである）鞆ひとつで、あまり自然でない微笑を浮かべながら、入つて來た二人の前に突つ立つ

て居た。

『え、トッシン大尉、どうしたんです、君は恥かしくないんですか？』と當直佐官は續けた。『君は砲兵將校として、一軍に範を示すべき筈ぢやありませんか。それなのに、靴も穿かないでゐる。警報があつた時、その靴なしの恰好はさぞ結構な事だらうね（當直佐官はさう言つて苦笑した）。さあ、諸君、めい／＼自分の部署に就いて下さい、みんな、みんな。』と彼は長官らしい調子で附け足した。

戦 アンドレイ公爵は二等大尉トッシンを眺めつゝ、我ともなしにほ／＼笑んだ。トッシンは無言で微笑を含んだまゝ、はだしの足を代るがはる踏み換へながら、大きな、賢さうな、しかも人の好い目で、アンドレイ公爵と當直佐官を見較べてゐる。

平 『兵隊がよく言ふぢやありませんか——はだしの方が身軽だつて。』トッシンは微笑し乍ら、おつおつと言つた。察するところ、ぼつの悪い自分の位置を、冗談めいた調子に變へようとしたものらしい。

和 が、言ひも終らぬ中に、彼は自分の洒落が洒落として受け取られず、失敗に歸したのを見て取り、へどもどして了つた。

『さあ、それ／＼部署についてくれ給へ。』どこまでも眞面目な調子を押し通さうとして、當直將校はかう言つた。

アンドレイ公爵はいま一度この砲兵將校の小柄な姿を眺めた。彼の體つきには幾分滑稽ではあるけれど、而も非常に人を惹き付けるやうな、全然非軍隊式な、一種特別なある物があつた。

當直佐官とアンドレイ公爵は馬に跨つて、なほ先へ進んだ。

途中しつきりなしに色々の隊の兵士や將校に、追ひ付いたり行き會つたりしながら、漸く二人が村を出はづれると、目下工事中の堡塞が左手に聳え、いま掘り起されたばかりの新しい粘土が赤く見えた。幾大隊かの兵士が寒風にも拘らず襦袢一枚になつて、この堡塞の上を白蟻か何ぞのやうに動いてゐる。壘の蔭からは誰の仕事やら、しきりに赤いねば土がシヨベルで抛り上げられる。二人は堡塞に近寄つて暫く眺めた後、また先の方へ進んで行つた。堡壘のすぐ後ろで、絶えず入れ換つては逃げ出して行く、數十人の兵士に行き當つた。二人はこの有毒瓦斯を含んだ空氣からのがれるために鼻に蓋をし、早足で馬を驅けさせなければならなかつた。

二 『Voilà l'agrément des camps, monsieur le prince. (これが陣中の樂ですよ、公爵)』と當直佐官は言つた。二人は正面の小山へ登つた。この山からはもはや佛蘭西の軍が見えた。アンドレイ公爵は立ち止まつて展望を始めた。

『ほら、あすこの處に味方の砲兵中隊がゐるのですよ。』一ばん高い地點を指さしつゝ、當直佐官は言つた。『あの例の靴なしである變人の中隊です。あすここからすつかり見渡せますよ、参りませうか、公爵。』

『どうも有難うございました、もうわたし一人で出掛けますから。』この當直將校から這れたかつたので、アンドレイ公爵はさう言つた。『もう御心配なく、どうぞ。』

當直佐官は別れて歸つた。公爵は一人で先へ進んだ。

彼がだん／＼敵へ近づくに随つて、軍隊は次第に秩序だつて樂しげに見えて來た。最も烈しい混雑と疲弊を示して居たのは、今朝アンドレイ公爵が通つて來た、佛蘭西軍から十露里はなれてゐるツナイム市前面の輜重隊であつた。グルントでも若干の不安と、何物かに對する恐怖が感じられた。しかし、アンドレイ公爵が佛蘭西の散兵線へ近づくとつれて、次第に友軍の様子が恃む所ありげに見えて來た。外套姿の兵士が列を正して立つてゐると、曹長と中隊長が人員の點呼をしながら、小隊の一番はじに當る兵士の胸を指でついて、手を上げるやうに命じてゐる。見渡す限り、一面に撒き散らされた兵士たちは、薪や柴を運んだり、樂しげに笑つたり、話し合つたりしながら、假小屋を拵へてゐる。焚火の傍には服を著たのや裸の兵隊が、シャツだの脚絆だのを乾かしたり、靴や外套を繕つたりしながら暖まつてゐるし、釜や粥鍋の傍にも大勢たかつて騒いでゐる。ある中隊では食事の支度が出來あがつて、兵士らは物欲しさうな顔附で湯氣の立つ釜を眺めながら、味きゝが濟むのを待ち兼ねてゐた。炊事係の下士は出來あがつた食物を椀に入れて、自分の假小屋の前の丸太に腰掛けてゐる將校の所へ運んで行く。

またそれよりもつと仕合せのよい中隊もあつた（どの中隊にもフォートカがあるといふ譯でなかつた）。一人のあばた面をした、肩幅の廣い特務曹長が、兵士の群に圍まれたながら、樽を傾けて順々に差し出す水筒の蓋に酒を注いでゐた。兵士らは、さも勿體なささうに、水筒の蓋を口の傍へもつて行き、ぐつと一息に傾けると、口嗽ひして外套の袖で口を拭きながら、愉快さうな顔附

で曹長の傍を離れる。一同の顔は驚くほど落着き拂つてゐて、少くとも支隊の半數はこゝに遺棄されねばならぬといふ大事を控へて敵前に立つてゐるらしい風はなく、まるで故國のどこかの地方で、穩かな宿泊を待つてゐるやうな工合であつた。

二 第
アンドレイ公爵は獵兵隊を通り過ぎて、元氣のいゝ若者揃ひのキーエフ精兵隊の列へさし掛つた。こゝでも同じ平和な仕事に従つてゐたが、一目で他の小屋と見分けのつく聯隊長の高い假小屋から程遠からぬあたりで、精兵小隊の正面に行き當つた。と、その小隊の前に、一人の男がすつ裸にされて臥てゐる。二人の兵士がその男を掴まへてゐると、いま二人がしなやかな鞭を振つて、規則たゞしく間隔を置いて、あらはな背中を打ち据ゑるのであつた。處罰に遭つてゐる男は不自然な聲を立てて叫んだ。よく肥えた少佐は正面を歩きながら、その叫び聲には注意を拂はず、やみ間なしにかう言ふのであつた。

編 『兵士たるものが人の物を盗むといふのは恥づべき事だ。軍人は正直で潔白で勇敢でなけりやならん。もし友達の物を盗んだ奴があれば、その男には廉恥心がないのだ。そいつは唾棄すべき卑劣漢だ。もつと、もつと！』

一人の若い將校は顔に疑惑と苦痛の色を浮べ、物問ひたげな様子で通りすがりの副官を振り返りながら、處罰を受けてゐる兵士の傍を離れた。

135
アンドレイ公爵は第一線へ出て、正面に沿うて進んで行つた。敵味方の散兵線は左翼も右翼も遠く離れてゐたが、けさ軍使の往復した中央部隊は、極めて近く相接して、互に顔を見合つたり、

話し合つたり出来るくらゐであつた。敵の方からも味方の方からも、こゝで戦線を固めてゐる兵士のほかに、物好きな連中が大勢あつまつて、不思議な見馴れぬ敵を笑ひながら、眺め合つてゐる。

戦線に近寄つてはならぬといふ禁令にも拘らず、早朝から押し掛けて来るもの好き連中を、上官たちも追つ拂ひ切れなかつた、戦線に立つてゐる兵士らは、何か珍しい物でも見せる人のやうに、もう佛蘭西軍の方を見ないで、押し掛けて来る人々の觀察をしながら、退屈に苦しみ交替を待ち兼ねてゐた。アンドレイ公爵は佛蘭西兵を眺めようと立ち止つた。

『見ろつたら見ろよ。』と一人の兵卒が友達に、ある露西亞の銃兵を指して見せながら言つた。この銃兵は一人の將校と共に戦線に近寄つて、佛蘭西の選抜兵と何やら早口に、熱した調子で話してゐた。

『どうだ、箆棒に巧く喋るぢやないか。佛蘭西の奴も後から追つついて行けないくらゐだ。おい、どうだ、シドロフ！』

『待て、聞いてろよ。いや、巧いもんだなあ！』佛蘭西語の名人とされてゐるシドロフがかう答へた。

兵士らが笑ひ乍ら指さしてゐたのはドーロホフであつた。アンドレイ公爵はそれと氣づいて、會話に耳を傾け始めた。ドーロホフは中隊長と一緒に、自分の聯隊の屬してゐる左翼の方から、この接觸線へやつて來たのである。

『さあ、もつと、もつと！』前の方へ屈み掛つて、自分には譯の分らぬ言葉を一と言たりとも聞き落すまいと焦りながら、中隊長はかう言つて啖しかけた。『どうかもつと早くやつてくれ給へ、一體あいつは何を言つてるんだね？』

ドーロホフは中隊長に答へなかつた。彼は佛蘭西選抜兵との烈しい爭論で夢中になつてゐた。當然さうあるべき事だが、彼等は戰爭の話をしてゐるのであつた。佛蘭西兵は埃太利を露西亞と一緒にして、露西亞軍が降伏してウルムから遁走したのだと論じると、ドーロホフはまた露西亞は降服などしない、かへつて佛蘭西軍を撃破したのだと論證する。

『こゝからお前たちを追つ拂へといふ命令なんだから、本當に追つ拂つて見せらあ。』とドーロホフが言つた。

『ぢや、お前達は御自慢の哥薩克兵と一緒に、擒にならないやうに用心しろい。』と佛蘭西の選抜兵が答へた。

佛蘭西側の見物人や聽手は笑ひ出した。

『以前スズーロフ將軍がやつたやうに、今度もお前達を踊らして見せるぞ。』とドーロホフが言ふ。

『Qu'est ce qu'il chante? (何を彼奴は唱つてやがるんだ?)』と一人の佛蘭西兵が言つた。

『De l'histoire ancienne. (昔の話)』以前の戰爭の事を言つてゐるのだと氣がついて、いま一人の

佛蘭西兵が答へた。『皇帝陛下はお前等の「スズーラ」だつて、他の奴等と同じやうに、酷い目

にあはしておやりになるから……』

『ボナバルト……』とドーロホフが言ひかけた。が、佛蘭西兵は遮つて、

『ボナバルトぢやない。神聖なる皇帝陛下だぞ……』と腹立たしげに叫んだ。

『勝手にしやがれ、手前の皇帝陛下なんぞ！』

ドーロホフは露西亞語で兵隊式に亂暴な言葉つかひで罵り、銃を肩に擔ぐとその場を離れてしまつた。

『行きませう、イヴン・ルキッチ。』と彼は中隊長を促した。

『なるほど、あれが佛蘭西語か。』戦線の兵士らがかやく話し出した。『さあ、今度はお前の番だ、シドロフ！』

和平と戦争

シドロフは目をぱちりとさして佛蘭西人に向ひ、譯の分らない言葉を全速力で喋り出した。

『カリ、マラ、タフア、サフィ、ムーテル、カスカア！』自分の聲に表情のある調子を付けようと苦心しながら、彼はこんな事を喋るのであつた。

『ホ、ホ、ホ！ ハ、ハ、ハ、ハ！ ウフ、ウフ！』などといふ健やかで愉快さうな笑ひ聲が、どつと兵士らの間に起り、それが自然と戦線を越えて、佛蘭西兵にも移つて行つた。それを聞いてみると、今にもみんなが銃の装弾を抜いて爆發させ、そのまゝめい／＼の家へ分れて歸らねばなるまい、と思はれるほどであつた。

しかし銃は裝填されたまゝで残り、銃眼は人家に設けられたのも堡壘にあるのも、依然として嚴めしげに前方を睨み、前車からはつされた砲車は前と變らず、互に相對して向き合つたまゝであつた。

一六

右翼から左翼まで、軍の全線を廻り盡したアンドレイ公爵は、當直佐官の言によると、戰場が一面に見晴らせるといふ、砲兵中隊を指して登つて行つた。こゝで彼は馬をおり、前車を外した四門の大砲の中、一ばん端の砲に近く立ち止つた。砲の前には歩哨の砲卒が歩いてゐ、將校と見てそり反らうとしたが、アンドレイ公爵が合圖をしたので、また規則たゞしい退屈な歩みを繰り返し始めた。砲の後ろには前車、そのまた後ろには繫馬杭と焚火があつた。右端の大砲に近く、枝で編んだ新しい小屋があつて、その中から將校連の賑やかな話し聲が聞えた。

實際この砲兵隊からは露西亞軍全部と、敵軍の配置が大部分展開して見えた。砲兵隊の眞向ひに當る小山の上には、シェングラーベンの村が見える。右にも左にも焚火の煙の間から、三箇所ばかりに佛蘭西軍の集團が見分けられる。尤も大部分は村の中央部や、山の向う側にあるらしかつた。村の左寄りに煙の蔭から、何か砲兵隊らしいものが見えたが、肉眼ではよく見分けがつかない。わが軍の右翼は、佛蘭西軍の陣地の上に臨んでゐる可成り險しい高地に配置されてあつた。その中に歩兵隊が置かれて、一ばん端には龍騎兵が見えてゐた。今アンドレイ公爵が立つて陣形を観察してゐるトゥッシンの中隊を含む中堅部は、最も勾配の急な所で、友軍とシェングラーベ

村とを別つ小川へ達するまでに、傾斜の烈しい昇降があつた。左方に陣取つたわが軍は森に接してゐたが、そこでは薪を切る歩兵の焚火が煙を立ててゐる。佛蘭西軍の戦線は味方のそれよりも廣いから、敵が容易に我の兩翼を迂廻し得ることは、一見して明かであつた。また味方の陣地の後ろには險阻な深い谷があつて、それを越えて退却する事は、砲兵や騎兵に取つて困難である。

アンドレイ公爵は砲に靠れて紙入れを取り出し、自分の控へとして軍の配置圖を引き始めた。彼はバグラチオンに報告するつもりで、二箇所鉛筆で注意の印をして置いた。彼は第一にすべての砲兵隊を中央に集中し、第二に騎兵を後方——すなはち谷の向う側に移さうと考へた。アン
 戦 ドレイ公爵は常に總指揮官の傍にあつて、大集團の行動や一般作戦に注目し、絶えず戦闘の史的
 争 研究にのみ従事してゐたので、まさに起らんとしてゐるこの戦ひについても、自然大體の運動し
 と か想像に上らないのであつた。彼の頭には、次のやうな大掴みな場合ばかり浮んで來た。「もし
 和 敵が右翼に向つて攻撃を試みたなら」と彼は獨りこちた。「キーエフ精兵隊とポドーリスク獵兵
 隊とは、中央の豫備軍が到着するまで、自己の陣地を支持しなくてはならぬ。この際、龍騎兵は
 敵の側面を突いて潰走させる公算がある。もし中央を突かれた場合には、この高地に中央部の砲
 兵隊を据ゑ、その掩護のもとに左翼を引いて、梯陣で谷の所まで退却する。」彼は獨りでこんな
 事を考へてゐた。

よくある事だが、彼がこの中隊で砲の傍に立つてゐる間ぢゆう、小屋の中から將校たちの話し
 聲がやみ問もなく聞えてゐたけれど、彼はそれが何の話やら少しも分らなかつた。と、不意に小
 屋から洩れる話し聲の中で或る一人の聲が、しんみりとした調子で彼の耳朶を打つたので、彼は
 我ともなく耳を傾け始めた。

『違ふよ、君。』何だかアンドレイ公爵に取つて聞き覚えのある、氣持のいい聲が言つた。『僕
 はね、死んでからどうなると言ふ事が知れたら、誰一人死を恐れるものがなくなつて了ふ、とか
 う言ふんだよ。さうだらう、君。』

もう一人年若らしい聲が遮つた。
 第 『恐れたつて恐れなくなつて——どうせ遁れつこなしだ。』

『結局恐れずにやゐられないんだ——本當に君等みたいなき者にやかなはんよ。』と第三の男
 二 らしい聲が二人を遮つた。『全く君たち砲兵將校は餘り學者すぎるぜ。それと言ふのが、ヲート
 カも下物も、みんな持つて歩けるからだよ。』

編 かう言つて男らしい聲の持主——歩兵將校らしい——は笑ひ出した。

『結局恐れずにやゐられない。』と第一の聞き覚えのある聲が語り續けた。『未知が恐ろしいん
 だ、それなんだよ。靈魂が天へ昇るとか何とか言つたつて……天などなくてたゞ大氣がある切
 りだつて事を、我々はちゃんと承知してゐるんだからね。』

再び男らしい聲が砲兵將校を遮つた。

『おい、君の草入り酒でも奢らんか、トッシン。』と彼は言つた。

「あゝ、これはあの靴なしで酒保にゐた大尉だ。」この哲學論をしてゐる、氣持のいい聲の主

に氣付き、アンドレイ公爵は満足な氣持でさう考へた。

『草入り酒もいゝけれど、』とトッシンは言つた。『とにかく來世を理解するといふ事は……』
彼は了ひまで言ひ終らなかつた。このとき空中にひゆうといふ唸り聲が聞えたのである。いよ
いよ近く、いよ／＼迅く音高く、いよ／＼音高く迅く、砲彈は恰も必要な事を皆まで言ひ終らな
かつたやうに、人間業とも思はれぬ力をもつて砂煙を上げながら、小屋からほど遠からぬ地面に
當つて炸裂した。大地はこの恐ろしい打撃に悲鳴を上げたやうに見えた。

その刹那、小屋の中から第一番に小柄なトッシンが、パイプを横銜へにしたまゝ飛び出した。
人の好きさうな、利口らしい彼の顔は幾分あをざめてゐた。續いて男らしい聲の持主の歩兵將校
が出て來て、歩きあるき服の釦を掛けながら、自分の中隊の方へ駆け出した。

一七

アンドレイ公爵は馬上のまま砲臺に佇み、いま彈丸を飛ばした大砲から出る煙を眺めてゐた。
彼の目は廣々とした戰場を走つてゐた。けれども、以前じつとしてゐた佛蘭西兵の集團が色めき
始めたのと、左の方に見えてゐたのが果して砲隊であつた、といふ事だけしか分らなかつた。砲
隊はまだ煙に包まれてゐた。副官らしい二人の佛蘭西騎兵が小山の上を疾驅してゐる。散兵線の
増兵のためでもあらう、小山の麓へ向けて餘り大きくない敵の縦隊が進んでゐるのが、明かに指
點された。まだ第一發の煙が散りうせない中、早くも次の煙が現はれ、續いて發射の音が聞えた。

戦闘は始まつた。アンドレイ公爵は馬首を轉じて、バグラチオン公爵を探し出すべく、グルント
の方へ一散に引つ返した。彼は後ろで、砲撃の音がだん／＼頻繁に高まつて行くのを聞いた。味
方も應戦を始めたらしい。下の方の、けさ軍使の往復した所では、小銃の發射が聞えてゐた。

ボナバルトの恐ろしい手紙を携へたレマロアが、たつた今ミュラーの所へ着いたばかりなので
ある。辱められたミュラーは己れの過失を償はうと思つて、直ちに麾下の兵を中央と兩翼に進出
させ、夕がた皇帝の到着までに、自分の前に立つてゐる取るにも足らぬ一枝隊を、粉碎してくれ
んと心構へた。

「始まつた！ 到頭やつて來た！」血が更に烈しく心臓に押し寄せるのを感じながら、アンド
レイ公爵は心に思つた。「しかし俺のトッロンはどこにあるのだ、そしてどんな工合に現はれる
のだらう。」と彼は考へた。

編 とい十五分まへに粥カシヤを食べたり、フォートカを飲んだりしてゐた中隊の間を通りながら、彼は到
る處で同じやうに列を組んだり、又銃を解いたりしてゐる兵士らの、慌たゞしい動作を見た。彼
の心中に感じてゐると同じ生き生きした感情は、誰も顔の上に讀まれた。「始まつた！ 到頭
やつて來た！ 恐ろしい、だが愉快でもある！」兵隊から將校に至るまで、各々の顔がかう言つ
てゐた。

工事中の堡塞まで行き着かぬ中に、彼は秋の曇り日の暮に近い光を透して、自分の方へ向けて
やつて來る騎馬の一隊を見つけた。先頭の人人は哥薩克風の外套に灰色羊の毛皮の略帽をかぶり、

白馬に跨がつてゐる。それはバグラチオン公爵であつた。アンドレイ公爵は彼を待ち受けて立ち止つた。バグラチオン公爵は馬を停めた。そしてアンドレイ公爵に氣がつくと、軽く頷いて見せた。彼はアンドレイ公爵が自分の見聞を報告してゐる間、じつと向うの方を眺めてゐた。

「始まつた！ 到頭やつて来た！」といふ表情は、バグラチオン公爵のがつしりした蒼色の顔にさへ讀まれた。彼はちやうど寢の足りないやうな、どんよとした、半ば閉ぢたやうな眼附をしてゐた。アンドレイ公爵は不安な好奇心を抱きながら、この顔に見入つてゐるうちに、果してこの人はこの瞬間に、考へたり感じたりしてゐるのだらうか？ もしさうとすれば何を考へ、何を感じてゐるのだらうか？——それが知りたくて堪らなくなつた。「全體として、このじつと動かない顔の蔭に、何か隠れたものがあるのだらうか？」とアンドレイ公爵は彼を見つめながら、自分で自分に問ひ掛けて見た。バグラチオン公爵は、アンドレイの言葉に同意を表はするやうに首を傾げて、「よろしい」と言つたが、それはまるで今起つてゐる事や、アンドレイの報告した事は、果して自分の豫期したところである、といつたやうな表情であつた。アンドレイ公爵は餘り早く馬を驅つたために、息を切らしながら早口に物を言つたが、バグラチオン公爵は「何も急ぐ事はない」と言ひ聞かせるやうに、東洋風のアクセントで格別ゆつくり發音した。しかし彼は早足でトッシンの中隊さして馬を急がした。アンドレイ公爵も幕僚と共に、その後からついて行つた。バグラチオン公爵に隨つてゐる人々は、公爵附の副官である幕僚將校、傳令のジェルコフ、美しい英吉利仕立の馬に跨がつた當直佐官、單なる好奇心のため戰場に同行を許した文官の理

事であつた。理事は顔の丸々とした肥えた男であつたが、子供らしい満悦の微笑を浮べて、馬の上に揺られながら邊りを見廻してゐた。駱駝の外套を着て輻重の鞍に跨がつたその姿は、輕騎兵や哥薩克や副官などの中に交つて、異様な對照を示してゐる。

『この人は戦争が見たいと言ふんですが、』ボルコンスキイに理事を指して見せながら、ジェルコフは言つた。『もう今から心窩が痛いんださうですよ。』

『え、もう澤山ですよ。』と理事は晴ればれた子供らしい、同時にするさうな微笑を浮べながら言つた。その様子から察すると、ジェルコフの冗談の的となるのが嬉しくて、わざと實際より間拔に見せ掛けようと努めてゐるらしい。

『Près drôle, mon monsieur prince. (實に滑稽で、公爵)』と當直佐官は言つた (彼は佛蘭西語で公爵といふ稱號に何か特別な言ひ方があるのを覚えてゐたが、どうしてもそれが出て來ないので)。

この時一同はもう大分トッシンの中隊に近寄つてゐた。と、彼等の前方に砲彈が落下した。『いま落ちたのは何ですか？』と素朴な微笑を浮べながら理事が訊いた。

『佛蘭西のお菓子ですよ。』ジェルコフは答へた。

『あれでもつて殺すんですな、して見ると！』と理事は訊ねた。『恐しいもんですね、實に！』と言つた彼は、満足のあまり顔の紐を弛めたやうに見えた。が、彼が口を噤むか噤まないかに、不意にまた思ひ掛けなく、ひゆうといふ凄じい響がしたかと思ふと、急に何かぐしゃぐしゃした物に打つ突かつて、唸り聲がやんだ——シュ、シュ、シュ、グシャリ——すると、少し右手に寄つ

て、理事の後ろから進んでみた哥薩克が、馬と共に地上に崩れ落ちた。ジェルコフと當直佐官は鞍に身を屈め、急いで馬をわきの方へ轉じた。理事は哥薩克の眞向ひに立ち止つて、注意ぶかい好奇心をもつて眺め廻してゐる。哥薩克は死んでゐたが馬はまだびく／＼してゐた。

バグラチオン公爵は目を細めつゝ振り向いた。そして今の動搖の原因を見つけると、「そんな下らん事にかゝづらつてゐる事があるか？」といった風に、自若としてまた頭を元へ轉じた。彼は馬を止めて、巧妙な騎手らしい態度で心もち半身を屈めながら、外套に絡まつた刀を正した。刀はいま一般に用ひられてゐるのと違つて、昔風のものであつた。アンドレイ公爵はスズーロフが伊太利で、バグラチオンに刀を贈つたといふ話を思ひ出した。この場合かうした追憶が殊に快く感じられた。一同は、先ほどボルコンスキイが立つて戰場を視察した、かの砲兵中隊へ乗り近づいた。

『誰の中隊だ？』バグラチオン公爵は、砲車の傍に立つてゐる火工卒に訊いた。彼は「誰の中隊だ」と訊いたけれども、實際は「お前らもうびくついてゐるんぢやないか？」と訊いたのである。で、火工卒もそれと悟つて、

『トッシン大尉であります、閣下。』雀斑まじりかすだらけの赤毛の火工卒は、そり返りながら愉快さうな聲で叫んだ。

『さうか、さうか。』とバグラチオンは何やら考へ合せるやうに言ひ、一ばん端の砲を目ざして前車の列を通り過ぎた。

彼が近づかうとした時にこの大砲から、彼をはじめ幕僚の耳を聳せんばかりの發射の音が、響き渡つた。見るみる砲を包んで行く煙の隙から、砲身につかまつて全力をこめながら、元の位置へ押し戻さうとする砲卒らの姿が見えた。肩幅の廣い大柄な第一砲手が手に砲弾を持ち、兩股を廣く踏み開きながら車輪の方へ飛びのいた。第二砲手は慄へる手で砲腔に裝藥を入れた。小柄で猫背のトッシン大尉は、砲身に突き當りながら前の方へ駆け出して、將軍には氣もつかず、小さな手を翳して彼方を見やつてゐた。

『もう二度増せ、それで丁度うまいんだ。』と叫んだ。彼はその細い聲に壯快な調子を附けようと苦心したが、それは彼の風采にふさはなかつた。『第二砲車うて！』彼は黄色い聲で叫んだ。『やつける、メドギーヂェフ！』

バグラチオンはこの將校に聲を掛けた。するとトッシンは普通に軍人が敬禮するのは全然ちがつて、僧侶が祝福でもするやうな臆病な無器用らしい手つきで、三本指を帽子の庇へ當てながら、將軍の方へ近寄つた。トッシンの砲は凹地の攻撃を命ぜられてゐたのだが、彼は前方に見えるシェングラールベン村を焼夷弾で砲撃し始めた。村の前面には、佛蘭西の大軍が進出してゐたのである。

どの方向を何で攻撃しろと言ふやうな命令は、誰からも受けてゐなかつたので、彼は常々非常に尊敬してゐる曹長のザハルチェンコと相談して、村を焼いたがよからうといふ事に決めたのである。

『よし！』とバグラチオンは砲兵將校の報告に答へると、何やら思ひめぐらすさまで、残りなく眼前に展けてゐる戦場を見まはすのであつた。右翼の方はどこよりも一ばん佛蘭西軍に接近してゐた。キーエフ聯隊の立つてゐる高地より稍々下つた小川に近い凹地の上では、胸を掻きむしるやうな小銃の音がばち／＼と鳴り續けた。またそれよりずつと右寄りの龍騎兵隊の向うに當つて、佛蘭西の縦隊がわが軍の側面を迂回せんとしてゐるのを、幕僚將校が公爵に指さして見せた。左翼の方は森のために視野を遮られてゐた。バグラチオンは中央の二箇大隊を、援助のため右翼へ移すやうに命じた。幕僚將校は、もしこの二箇大隊が去つたら、砲の掩護隊がなくなるだらうと、忌憚なく公爵に注意した。バグラチオン公爵は幕僚將校を振り返つて、鈍い目で黙つて彼を見つめた。アンドレイ公爵にも幕僚將校の注意は至極もつともで、實際、争ふ餘地がないやうに思はれた。しかしこの時、凹地に陣してゐる聯隊長の所から、一人の副官が駆けつけて、佛蘭西の大軍が低地から來襲して來たため、聯隊は潰走してキーエフ精兵隊の方へ退却しつゝある、との報告を齎らした。バグラチオン公爵は、承諾と賛成のしるしに首をかしげた。彼は竝足で右方へ馬を進め、佛蘭西軍を攻撃せよとの命令をもたして、副官を龍騎兵隊へ遣はした。が、そこへ送られた副官は三十分後に歸つて來て、龍騎兵聯隊長は既に谷の向うに退却した由を報告した。それはこの聯隊へ猛烈な砲火が注がれて、空しく兵員を失つたので、狙撃兵を森の中へ急がしたといふのである。

『よし！』とバグラチオンは言つた。

戦争と平和

第

二

編

彼がこの砲兵中隊を立ち去らうとした時、左手の森の中でも發砲の音が聞えた。自分で左翼の方へ駆けつけるには餘り遠すぎたので、バグラチオン公爵はジェルコフを其の方へ派遣した。それは古參の將軍（例のブラウナウでクトゥゾフから聯隊の檢閲を受けた將軍）に向つて、もはや長く敵を支へる力が右翼にはないから、出来るだけ急いで谷の向うへ退却せよ、といふ命令を傳へるためであつた。トゥッシンの隊やそれを掩護してゐる大隊の事などは、完全に忘れられて了つた。アンドレイ公爵は、バグラチオン公爵と他の上官達との會話や、彼等に授けられる命令などに注意ぶかく耳を傾けた。が、驚くべき事には、命令といふやうなものは少しも發せられなかつた。バグラチオン公爵は、かうして必然と偶然と、各部々々の指揮官の意志によつて行はれた一切の事が、よし自分の命令によつて行はれたのではない迄も、自分の企畫に一致したものだといつたやうな風を見せようと努めてゐるに過ぎない。ボルコンスキイもこれに氣がついた。しかしこれ等の事件が悉く偶發的で、指揮官の意志と没交渉であるにも拘らず、バグラチオン公爵の存在は非常な効果を齎した。それはバグラチオンの戦争のこつを呑み込んだ態度によつて、慌ただしげな顔附をして近づいて來る上官たちも、暫くすると落着いて了ふし、兵士や將校たちも愉快さうに彼を迎へ、彼の面前では何となく活氣づいて來るのみか、彼に對して自分の勇氣をひけらかすやうであつた。アンドレイ公爵もそれに氣がついたのである。

バグラチオン公爵はわが右翼の最高地點に出ると、下の方へ降り始めた。そこにはばち／＼爆せるやうな銃聲が聞え、硝煙のために一物をも見分けることが出来なかつた。彼らが段々と凹地へ下るに従つて、次第に状況が分らなくなつて来たが、本當の戦場の近づいた事は、いよいよ明瞭に感じられる。とき／＼負傷兵に出くはすやうになつた。帽子もない血みどろの頭をした一人の兵士を、二人がかりで兩腋を交へながらやつて来た。負傷者はせい／＼と嘔れた息をつきながら、しきりに唾を吐いてゐる。恐らく弾丸が口か咽喉に當つたのであらう。次に一行にゆき當つた兵士は、たゞ一人銃もなしに元氣よく歩いてゐたが、大きな聲でお／＼お／＼と呻きながら、新しい傷の痛みに堪へ兼ねて手を振る。その手からは、まるで瓶から溢れるやうに血が流れて、ぽたぽたと外套の上に垂れる。彼の顔は苦しきといふより、寧ろ吃驚したやうな表情を浮べてゐた。この男はつい一分前に負傷したのである。一行は道路を越えて急な坂を下り始めた。坂の途中では幾人かの倒れた人達が目に入つた。また負傷しない人々をも交へた一群の兵士らに行き會つた。兵士らは重々しい息をつきながら坂を登つて行き、將軍の姿が見えてゐるのも構はず、大聲に話し合つたり、手を振つたりしてゐる。

前方の煙の中にはもう灰色の外套の列が見えた。一人の將校がバグラチオンを見掛けるや否や、聲高に呶鳴りながら、群をなして行く兵士等の後を追つ掛けて、引つ返すやうに命じた。バグラチオンは列に近づいた。列の間ではあすこでもこ／＼でも、ばち／＼と忙しげな發射の音が起つて、人の話し聲や號令の叫びを揉み消すのであつた。空氣はすつかり硝煙がしみ込んで、兵士らの顔

はどれもこれも火薬に煤けて、活氣づいてゐる。ある者は藥杖をがちや／＼やつてゐるかと思へば、ある者は袋から裝薬を取出して薬池に籠め、又ある者は發射してゐる。併し彼等が誰に向つて射撃してゐるかは、風にも散らされぬ硝煙のために少しも分らなかつた。ぶん／＼といふ音、しゅつしゅつといふ音、かうした快い響はかなり頻繁に聞えてゐた。「一體これらは何だらう？」これら兵士の群に近寄りつゝ、アンドレイ公爵は考へた。「これは突撃であらう筈がない。なぜつて動かずじつとしてゐるから。また方陣であらう筈もない、隊形がまるで違つてゐる。」

第 聯隊長は瘦せた一見孱弱さうな老人であつた。臉は半分以上も年寄らしい目を蔽つて、その顔に謙遜な表情を帯びさせてゐた。彼は氣持のよい微笑を浮べながら、バグラチオン公爵に近づいて、家のあるじが貴顯の客に對するやうに彼を迎へた。彼はバグラチオン公爵に向つて、自分の聯隊を佛蘭西騎兵が襲撃した事、そしてその襲撃は撃退されたが、聯隊は半數以上の人員を失つたことを報告した。聯隊長は、自分の聯隊で生じた出來事にこの兵語を適用して、「襲撃は撃退された」と言つたが、實際のところ自分に委任されてゐる隊の中で、この三十分間に何が生じたのやら、彼自身にも分つてはゐなかつた。果して襲撃が撃退されたのか、或ひは襲撃のために自分の隊が潰滅したのか、正確に言ふことが出来なかつた。たゞ戰鬥の始まつた頃、聯隊へ砲彈や榴彈が飛んで兵員を殺しはじめ、やがて暫くたつて誰かが「騎兵だ！」と叫ぶと、味方が射撃を開始した、と、これだけの事しか知らなかつた。かうして今まで射撃を續けてゐるが、その目標は最早疾くに姿を隠した騎兵ではなく、凹地に現はれて友軍を射撃してゐる佛蘭西歩兵であつた。

バグラチオン公爵は、それはみな自分が希望し、かつ豫想してゐたと全然おなじ事だ、といつたやうに首を傾けた。そして副官の方へ振り向き、今そばを通つて来たばかりの第六獵兵聯隊の二箇大隊を、山から此方へ移せと命じた。この瞬間バグラチオン公爵の顔に起つた變化は、アンダレイ公爵を驚かせた。彼の顔は暑い日に水の中へ飛び込まうとして、最後の力を奮つて疾驅する人によくある、一生懸命な幸福らしい決斷を現はしてゐた。今まで寢不足のやうにどんよりした眼附も、わざとらしく考ふかさうな様子も悉く消え失せ、丸いすっかりした、隼を欺く兩眼は、幾分輕蔑したやうな勝ち誇つた色を帯びて前方を眺めたが、別段何にその視線を落着けようとすゝるでもない。尤も彼の舉動には、以前の遲鈍と中庸とが残つてゐた。

聯隊長はバグラチオン公爵に向つて、どうか引つ返してほしいと懇願を始めた。こゝにゐる事があまりに危険な業だつたからである。『どうぞ閣下！ お願ひでございます！』と彼は相槌うつて貰ひたさに、幕僚將校の方をちよい／＼と見やりながら言ふ。こちらはその度にそつぽを向いた。『あれ、御覽なさいまし！』と彼は、邊りで絶えず甲高い聲を揚げたり、唱つたり、口笛を吹いたりしてゐる彈丸に、上官の注意を向けさせる。彼の言葉の哀願と譴責の調子は、ちやうど大工が斧に手を掛ける主人に向つて、「わたくし共にしては馴れ切つた仕事でございませうが、あなた方はすぐ手に肉刺^{うづ}を出してお了ひになります。」といふかのやうであつた。彼は、これらの彈丸が決して自分を殺すやうな事はないと、信じ切つてゐるやうな調子で話したが、その半ば閉ぢた目はそれにもまして相手を説伏せんに置かねやうな表情を彼の言葉に與へるのであつた。當

直佐官も聯隊長と一緒にたつて懇願を始めた。しかしバグラチオン公爵は彼等に答へず、ただ射ち方やめを命じて、いま應援のためこちらへ向つてゐる二箇大隊に場所を與へるやう、隊形の轉換を命令した。彼がかう言つてゐるとき、恰も目に見えぬ大きな手の仕業か何ぞのやうに、凹地を蔽つてゐる煙の幕が吹き起る風につれて、右から左の方へ棚びいた。すると眞向ひの山と、それを沿うて動いてゐる佛蘭西軍とが、彼等の眼前に現はれた。一同の目は我ともなしに、こちらを指して進みながら地形の凹凸に随つて蜿々と續いてゐる、この佛蘭西の縦隊へ注がれた。もう老毛だつた兵士の帽子まで見え出した。やがて將校と兵士との區別さへ出来るやうになつた。軍旗が柄に當つて、はた／＼と鳴るのも聞き分けられた。

『なか／＼見事な行進だなあ。』とバグラチオンの幕僚の中で誰やらが言つた。

縦隊の先頭は既に凹地の中へ没して了つた。衝突は傾斜のこちら側で起るに相違ない。實戰に加はつてゐたわが聯隊の殘部は、急がしげに列を作つて右の方へ去つた。その蔭から第六獵兵聯隊の二箇大隊が、遅れた連中を追ひ散らすやうにしなから、隊伍整然と近寄つて来た。彼等がまだバグラチオンの傍まで來ない中に、もう大群集が一齊に踏みしめるとつしりと重々しい足音が聞える。左翼の方から一番バグラチオンに近いところを、愚かしい仕合せさうな表情をした、丸顔で格幅のいゝ一人の中隊長が歩いてゐた。これは例のトッシンの假小屋から飛び出した將校である。見受けたところ、彼はこの瞬間、立派に上官の傍を通過せねばならぬとより他、なんにも考へてゐないらしかつた。

彼はいさゝかの努力もなく半身をそり返らせ、自分の歩調に随ふ兵卒らの重苦しい足取とは、まるで違つた軽い歩き振りで、晴れがましいやうな自足の色を浮べながら、筋肉の發達した脚をすつ／＼と運んでゐる。細身の抜刀（武器とは思はれない程小さな、反りの強い刀）を股の邊に支へ、上官と後方とを代るがはる見返りながら、歩調を亂さぬやうにして、強健らしい體を自由にしな／＼と曲げる。察するところ、彼の全精神の力は、この上なく立派に上官の傍を通過しよう、といふ事だけに注がれてゐるらしい。而も見事にそれを實行してゐると感じ、彼はこよなく幸福であつた。「左、右、左、右、左、右……」と一足毎に心の中で繰り返してゐるやうに見えた。十人十色のしかつめらしい顔をした、背囊や銃の重みに壓された兵士等の姿が、壁のやうに連りながら、この拍子につれられて動いて行く。これら數百の兵士らは一人々々心の中で、一歩毎に「左、右……左、右……」といつてゐるかのやう。肥滿した少佐ははあ／＼息をつきながら、歩調を亂して道端の灌木を迂回した。また落伍した兵卒は自分の不規律に慥えたやうな顔附で、息を切らせ切らせ、駄足で中隊に追ひ附かうとしてゐる。と、砲彈が空氣を壓縮しながら、バグラチオン公爵とその幕僚の頭上を掠め、「左、右——左、右！」の足拍子に合せて縦隊に落下した。「列を合せ！」中隊長の氣取つた聲が響いた。兵士らは砲彈の落下した箇所、弓狀に彎曲しながら何物かを迂回した。年取つた翼下士の騎兵は、暫く戦死者の傍に残つてゐたが、やがて自分の中隊に追ひつき、飛び上るやうに踏替へをして歩調を合せ、腹立たしげに邊りを見廻した。何となく威嚇するやうな沈黙と、一齊に地を打つ足の單調の響の陰から、「左、右……左、右……左、右……」といふ聲が聞えるやうな氣がした。

「皆しつかりやつてくれ！」とバグラチオン公爵は言つた。

「……下の……めに！」といふ叫びが列の間に起つた。左の方から進んでゐた難かしい顔附の兵隊は、呷鳴りながらバグラチオンの方へ視線を向けたが、その表情は、「自分で心得てゐますよ」といふ風に見えた。また一人は氣が散るのを恐れるやうに、振り向かうともせず、大きく口を開けて、喚きながら通り過ぎた。

やがて停止して背囊を下すやうに命令が下つた。

自分の傍を通り過ぎた列を残らず一巡して、バグラチオンは馬から下りた。彼は手綱を哥薩克に渡し、次に外套を脱いで、これも矢張り従者に渡すと、兩足を踏みひろげて、頭の軍帽を正した。佛蘭西縦隊は數人の將校を先頭に、山の下から現はれた。

『では頼むぞ！』バグラチオンはしつかりした明瞭な聲でかう言つて、ちよつと正面を振り返り、軽く兩手を振りながら、騎兵出身の人に特有の危かしの難かしさうな足取で、でこぼこした原を前方へ進んで行つた。アンドレイ公爵は何かしら強い不可抗力が、自分を前方を牽いて行くのを感じ、非常な幸福を覺えた。

既に佛蘭西軍はちか／＼と迫つて來た。バグラチオン公爵と並んで進んでゐたアンドレイ公爵は、もう明かに佛蘭西兵の負革や赤い肩章や、顔すらも見分ける事が出來た（彼は脚絆ばきの兩足を外輪に擴げて、やつとの事で山を登つて來る、一人の年寄つた佛蘭西將校をはつきりと見と

めた。バグラチオン公爵は新たに命令を發せず、依然として無言のまま、列の前に立つて進んで行く。不意に佛蘭西兵の間に銃聲が一つ響くと、續いて二つ三つ……やがて混亂した敵の全線に互つて、煙が漲り銃聲がばち／＼と響き出した。味方の兵が五六人倒れたが、その中には、例の愉快さうに一生懸命で歩調を取つてゐた、丸顔の將校も交つてゐた。しかし最初の一發が響き渡ると同時に、バグラチオンは後を振り向いて叫んだ。「ウラア！」

『ウラア！ウラア！』といふ引き伸ばしたやうな叫喚が、味方の全線に響き渡つた。と、バグラチオン公爵を追ひ越して、互に追つかけ合ひながら、整つてはゐないけれど愉快げな生き生きした群をつくつて、味方は混亂した佛蘭西軍の後を追つて山を馳せ下つた。

一九

第六獵兵聯隊の突撃は右翼の退却を安全にした。忘れられたトウシンの中隊は、その間にシェングラーベン村を焼き拂つて、中央に於ける佛蘭西軍の動作を阻止した。佛蘭西軍は風に擴がる火事を消さうとして、わが軍に退却の餘裕を與へた。谷を越えて行く中央部隊の退却は、慌たゞしく騒々しく行はれたが、それでも各隊は退却の際に、指揮を間違へるやうな事をしなかつた。しかしアゾフ及びポドリリスク歩兵聯隊と、バヴログラード輕騎兵聯隊から成つてゐる左翼は、ランヌ指揮下の優勢な佛蘭西軍に、同時に攻撃され迂回されて、完全な混亂に陥つた。バグラチオンはジェルコフを左翼指揮官の將軍に遣はして、即時退却を命じた。

ジェルコフは帽子から手を放さず、元氣よく馬を驅つて出かけた。がバグラチオンの傍を離れるか離れないかに、早くも氣力が彼に背いた。彼は打ち克ち難い恐怖に襲はれ、危険な方面へ出て行く事が出来なかつたのである。

左翼の隊に近づいた時、彼は戰鬪の行はれてゐる正面へは出ず、あるべき筈のない所で將軍や長官達を探しにかゝつたので、とゞのつまり命令を傳へることが出来なかつた。

左翼の指揮權は古參順によつて、彼のブラウナウでクトゥゾフの檢閲を受けた聯隊——例のドロホフが一兵卒として勤務してゐる聯隊の長官に屬してゐた。ところで、左翼末端部の指揮權は、ロストフの勤務してゐるバヴログラード聯隊の聯隊長に屬してゐた。そのため一つの紛擾が生じたのである。兩聯隊長は互に何か憤懣を感じ合つて、もはや右翼では疾くに戰鬪が開始され、佛蘭西軍が攻撃に着手してゐるにも拘らず、相手を侮辱し合ふことを目的とした交渉に夢中になつてゐた。騎兵聯隊も歩兵聯隊も目前に迫つた戰鬪に對しては、本當に準備してゐなかつた。聯隊の兵員は將軍より一兵卒に至るまで、戰鬪を豫期しないで呑氣な仕事にいそしんでゐた——騎兵では馬を水かひ、歩兵隊では薪を集めてゐたのである。

『けれども、あの人は階級わたしより高くありますから、』騎兵聯隊長の獨逸人は赧くなつて、使に來た副官に言つた。「まあ、あの人のしたいやうにさせて置くがよくあります。が、わたし自分の部下を犠牲にすること出来ません。喇叭手！ 退却！」

しかし事態はだん／＼急になつて來た。砲聲と銃聲は一緒になつて、右翼にも中央にも轟き始

め、ランス部下の佛蘭西狙撃兵の上衣が、既に水車場の土手をこちら側へ越え、うて銃の構へで二列横隊に整列した。歩兵の聯隊長は、ひよい／＼飛び上るやうな足どりで馬に近寄り、ひらりとその上に跨がると、恐ろしくそり返つて脊を高くしながら、バヴログラード聯隊長のもとへ赴いた。二人の聯隊長は胸に毒念を潜めつゝ、恭しい會釋をもつて相對した。

『しつこいやうですがね、』と少將は言ひ出した。『わたしはどうも兵の半數を、森の中へ残して置くやうな事は出来んです。わたしは君にお願ひします、わたしは君にお願ひします。』と彼は繰り返した。『陣地を占領して、攻撃に着手して下さいませんか。』

『わたしは閣下にお願ひします、他人のこと干渉しないで下さい。』と大佐は熱くなつて答へた。『もし閣下が騎兵將官であつたなら……』

『わたしは騎兵將官ぢやないです、大佐、しかしわたくしは露西亞帝國の將官ですぞ。もし君がそれを御承知だつたら……』

『よく存じてあります、閣下。』不意に大佐は馬を進め乍ら、紫色になつて叫んだ。『しかしいつそ戦線へ出て、よく御覽なされたらよくありませんか、そしたら、この陣地が何の役に立たんことお分りにたります。わたし閣下の満足のために自分の聯隊を滅ぼす厭であります。』

『君は前後を忘れてみられる、大佐。わたしは自分の満足を求めてるんぢやありません。そんな事を黙つ一言はせて置く譯に行かんです。』

將軍は大佐の勇氣くらべの申込を承諾し、胸を張り眉を擡めながら、戦線を指して俱に馬を進

めた。それは恰も自分達の不和は其處で——戦線で——彈丸の下でのみ決せられねばならぬ、と信じ切つてゐるやうであつた。彼らは戦線へ出た。幾つかの彈丸は二人の頭上を飛び過ぎた。二人は黙つて立ち止つた。事實、戦線へ出て見る必要は更になかつた。なぜなら、彼等が先ほどまで立つてゐた所からでも、かういふ灌木や谷の中に騎兵の活動する餘地のないこと、佛蘭西軍が既に左翼を迂回してゐることは、明かに見えてゐたからである。將軍と大佐は、今にも蹴合ひに掛らうと身構へてゐる二羽の雄鶏よろしく、相手の氣隠れのしるしを空しく待ち設けつつ、嚴めしく意味ありげに何時までも互の顔を見詰めてゐた。が、兩方とも試験に及第した。言ふまでもなく、どちらも「あれは俺より先に彈丸の中から逃げ出した」などと相手に言はれたくなかつた

ので、打つちやつて置いたら、いつまでそこに立ち通してゐたか知れない。が、折しも殆んど彼等のすぐ後ろの森の中で、ぱち／＼と爆ぜるやうな小銃の發射の音と、わあつといふ多くの聲の入りまじつた鈍い叫喚が聞えた。それは薪を取りに森へ入つてゐた兵士らに、佛蘭西軍が襲ひかかつたのである。輕騎兵隊はもう歩兵と共に退却することが出来なくなつた。彼等は左方から佛蘭西軍のために、退却の途を遮斷されて了つた。今はもういかに地形が不利であらうと、自ら血路を切り開くために、是が非でも攻撃せねばならぬ破目になつた。

ロストフの勤務してゐる中隊は、やつと馬に乗つたか乗らぬかに、早くも敵に直面して立たされて了つた。かのエンス河の橋上に於ける如く、またもや中隊と敵との間に何もものもなくなり、兩者の間を分つものとは、生者と死者を分つ一線のやうな、恐ろしい未知と畏怖の線が横たは

るのみであつた。一同はこの一線を直覺した。果してこの線を超えるかどうか、また超えるとすればどんな風に？　といふ疑問が、人々の胸を波立たすのであつた。

隊の前面へ聯隊長が近づいて、將校たちの間に答へて腹だたしさうに何やら言つた。そして滅茶苦茶に自説を主張する人のやうな調子で、何か命令を下した。誰もはずきりした事を言はなかつたにも拘らず、突撃の噂は中隊ぢゆうに擴まつて了つた。整列の號令が響き渡ると、暫くして鞘を拂ふ刀の音が、帛を裂くやうに聞えた。しかしそれでも、まだ誰ひとり動き出すものがなかつた。左翼の各隊は、歩兵も輕騎兵も一樣に、上官自身すらどうしていゝか分らないのである、と悟つた。長官の逡巡の氣持は部下の各隊にも感染したのである。

「早く、早くやつてくれればいゝ！」今では友達からいろ／＼聞かされてゐた、突撃の快感を味はふ時機が遂に到来したのだと感じながら、ロストフは心の中でかう思つた。

和 平 と 争 戦
『進め、』といふヂェニソフの聲が響いた。『速足——進めつ！』

第一列で馬の胴が動き始めた。グラーチックは手綱を引いて、自分から動き出した。

ロストフは右手に輕騎兵の先頭の數列を見た。ずつと先の方には何かよく分らないが、恐らく敵兵と思はれる暗い一條の帯が見えた。銃聲は聞えてゐたが、遠い所だつた。

『歩度を伸ばせ！』といふ號令が聞えた。ロストフは、グラーチックが早足から駈足に步調を變へながら、尻に力を入れるのを感じた。

彼はあらかじめ馬の動作を推察することが出来、次第に愉快になつて來た。初め彼は前方に風

立してゐる一本の樹を認めた。この木は最初まへの方にあり、あの恐ろしく思はれる線の真中にはあつた。ところが、最早この線も通り越して了つたから、何も恐ろしいものはない、ただ次第に心持が愉快に生き生きして來るばかりだ。「おゝ俺はあいつを擲つ斬つてやるんだ。」とロストフは刀の柄を握り緊めながら心に思つた。

第 一 『ウラア！　アアア!!』と叫ぶ人々の聲が一齊に轟いた。「さあ、今こそ何奴でもやつて來て見ろ。」と、グラーチックに拍車を當てながら、ロストフは考へて、他の者を追ひ越し追ひ越し、全速力に飛ばすのであつた。前方には早くも敵が見えてゐた。と、不意に何者かが幅の廣い箒を振つたかのやうに、中隊全體をさつと一薙ぎした。ロストフは擲き斬る用意に刀を振り上げたが、この時、今まで目の前を疾驅してゐた兵のニキーチェンコが、急に彼の傍を離れて了つた。ロストフは夢でも見てゐる時のやうに、不自然なほどの速力で前方へ突進を續けてゐる癖に、それと同時に一つ所でじつとしてゐるやうな思ひであつた。見覚えのある輕騎兵のボンダールチュクが、後ろから彼の上に乗懸りさうになつて、腹だたしげに睨みつけた。が、ボンダールチュクの馬は驚いて一跳ねすると、忽ち傍を駈け抜けて了つた。

「一體どうして俺は動かないんだらう？——俺は落馬して殺されたんだ。」と一瞬間に自問自答した。彼はもう原中にたつた一人とり残されてゐた。走り動く馬と輕騎兵の背中への代りに、彼は黙々たる大地と刈り入れの濟んだ畑を、周りに見出したのである。温い血が彼の體の下にあつた。「いや俺は負傷したのだ、そして馬が殺されたんだ。」グラーチックは前足で起き上らうとし

だが、またばかりと倒れて主人の足を敷いた。その頭からは血が流れてゐる。馬はびくりびくりと跳いたけれど、立ち上ることが出来なかつた。ロストフも立ち上らうと思つたが、やはり同じやうに倒れて了つた。劔が鞍に引つ掛つたのである。味方がどこにゐるのか、佛蘭西軍がどこにゐるのか、皆目見當がつかない。あたりには誰一人ゐなかつた。

足を抜き出して彼は立ち上つた。「二つの軍隊をあんなにもかつきり分けてゐた、あの恐ろしい線は今どこに、どの方角にあるのだらう？」と彼は自ら問うたが、答へることは出来なかつた。

「何か悪い事が俺の身に起つたのではないか知らん？ 一體こんな場合がしよつちうあるものかなあ。そしてこんな場合どうしたらいゝんだらう？」と彼は立ち上りながら、自分で自分に訊いて見た。このとき何か餘計なものが、麻痺した左手にぶら下つてゐるやうな気がした、手首はまるで他人のもの見たいに思はれた。彼は血を見つけようと、空しくその手を眺め廻した。「や、あすこに人が来る。」ふと自分の方へ走つて来る幾たりかの人に氣がつき、彼は喜ばしげに考へた。「あの人達が俺を助けてくれるんだ！」奇妙な尖帽シヤボを冠つて青い外套シヤコを著た、髪カミの黒い、顔の日に焼けた、鉤鼻の男が、この人達の先頭に立つて走つて来る。まだ二人、いやまだ大勢その後から走つて来る。その中の一人が何か露西亞語でない妙な言葉を口走つた。後ろから進む同じ尖帽を冠つた人々の間に、露西亞の輕騎兵が一人まじつてゐたが、大勢でその手を捕まへて、後からはその乗馬を曳いて来る。

「きつと味方の俘虜だ……さうだ。一體おれも矢張り捕まるのかしら？ あれは何者だらう？」

自分で自分の目を信じかねつゝ、ロストフは考へ續けた。「あれが佛蘭西人だらうか？」彼は次第に近寄つて来る佛蘭西兵を見据ゑた。そしてたつた一分前までは、たゞこの佛蘭西人の所へ駆けつけて、片端からぶつた斬るつもりで、夢中で突進してゐたにも拘らず、今は敵がこんな近い所にゐるといふ事が、我とわが眼を信じかねるほど恐ろしかつた。「あいつらは何者だ？ 何しに走つてゐるんだ？ それとも俺を目ざしてゐるのかしらん？ 俺の方へ走つて来るのかしらん？ 一たい何のためだらう？ 俺を殺しに？ 俺を？ あれ程みんなに愛されてゐるこの俺を？」と自分と自分に對する母や家庭や親友などの愛が、彼の頭に浮んだ。すると自分を殺さうとする敵の意圖が、あり得べからざる事のやうに思はれた。「だが、本當に殺さうといふのかも知れんぞ！」彼は十秒間以上その場を動かからず、自分がどのやうな位置にゐるかも悟らないで、ぼんやり立つてゐた。先頭に立つた鉤鼻の佛蘭西兵は、顔の表情を見分けられるほど近々と駆け寄つたが、銃劔を掲げて息を凝らしつゝ馳せ近づく馴染のない顔のいきり立つた表情は、ロストフを冷つとさした。彼は拳銃を手を取つたが、相手に向けて火蓋を切らうとはせず、それを佛蘭西兵目がけて投げ附けると、ありたけの力を出して藪の方へ駆け出した。この時は最早、エンス河の橋へ赴いた時のやうな疑惑と鬭争の感じはなく、たゞ／＼犬をのがれ走る兎に似た感情が彼を領してゐた。たゞ自分の若々しい幸福な生に對する一心不亂な恐怖の情が、彼の全存在を捕へたのである。まるで鬼ごつこの時のやうな猛烈な勢で、彼は畑と畑との境界を跳り越えた。そしてとき／＼蒼ざめた、若々しい、人の好ささうな顔を後ろへ振り向けながら、原なかを飛んで行

く。振り返るたびに恐怖の寒けが背筋を流れた。「いや、いつそ見ない方がいゝ！」と考へたが、灌木の藪に近づいた時、いま一度振り返つて見ると、佛蘭西人は大分おくれれてゐる。彼が振り返つた瞬間に、先頭の男は蹶足を竝足に換へ、振り返りさま、後から来る仲間は何やら烈しく呶鳴りつけた。ロストフは立ち止つた。「何だか様子が變だ。」と彼は思つた。「あの連中が俺を殺さうとするなんて、あり得べからざることだ。」が、その間にも彼の左手は、二ブードもある錘を吊したやうに重かつた。彼はもう先へ進むことが出来なかつた。佛蘭西兵も同様に立ち止つて彼を狙つてゐる。ロストフは目をつぶつて背を屈めた。一發二發、彈丸が唸りを生じながら傍を掠めた。彼は最後の力を絞つて、左手を右手に握るや、一散に灌木の藪まで駈けつけた。藪の中には露西亞の狙撃兵がゐた。

二〇

森で不意を襲はれた歩兵聯隊は、あわてて森の外へ駈け出した。そして中隊と中隊とが一緒に入りまじりながら、亂雑な群をなして遁れ走つた。一人の兵卒が愕えたやうに、「遮斷された！」と言つた。戦場でこそ恐ろしいけれど、平時は意味もないこの言葉が、恐怖の感情と共に全群集に傳はつた。

『迂回された！ 遮斷された！ もう駄目だ。』と遁れ走る人々の聲が叫んだ。

聯隊長は後方に射撃の音と叫喚の聲を聞きつけた時、自分の聯隊に何か恐ろしい事が生じたの

だと悟つた。そして自分のやうに永年勤務して、何一つ失策をしたことのない模範將校が、怠慢とか不行届とかいふことで、上官から譴責されることがないとも限らぬ——かうした想念が極度に彼を脅かしたので、彼は即座にしづとい騎兵大佐の事も、自分の將軍としての威嚴も——また危険も自衛の感情も忘れ果て、鞍の前橋まへはしにしがみつき、馬に拍車を當てながら、雨霰と注いでゐるものの、幸にして彼を外れて過ぎる彈丸の下を潜つて、聯隊の方へ疾驅した。彼が望んでゐるのはたゞ一つしかなかつた。即ち事の真相を知つてこれに援助を與へ、もし自分に過失があつたら、何事があらうとも是非それを正し、二十二年間勤続して、かつて一度も注意を受けた事のない模範的將校である自分が、非難を蒙ることのないやうにしなければならぬ。

二 運よく佛蘭西兵の間を駈け抜けて、彼は味方の兵が走つてゐる森のかたの、野原をさして駈けつけた。兵士らは號令を聞かうともせず、坂を馳せ下つて行く。かの戦鬪の運命を決する、精神的動搖の瞬間が到來したのである。これらの亂れに亂れた兵士の群が、指揮官の聲に従ふか、さなくばその方をちよつと振り返つただけで、依然先へ先へと逃げて行くか、二つに一つである。前は兵士らに取つてあれほど恐ろしかつた聯隊長が、見違へるほど物凄く紫色の顔をして、指揮刀を振り廻しながら恐ろしい聲を振り絞つて、死物ぐるひに叫んでゐるにも拘らず、兵士らは依然としてがや／＼話し合つたり、空中に發砲したりしながら走り続け、號令に耳を假さうともしなかつた。戦鬪を決する精神的動搖は、恐怖に勝を占められたやうに見えた。

將軍は叫喚と硝煙とのために咳き込み、絶望して立ち止つた。最早一切が失はれたやうに感じ

られた。しかしこの時、今までわが軍を追撃してゐた佛蘭西兵が、それらしい原因もなく急に引返して、森の蔭に隠れて了つた。すると、森の中に露西亞の狙撃兵が現はれた。これは例のチモーヒンの中隊である。この中隊だけは森の中で秩序を保つて踏みとどまり、林端の溝の中に潜んでゐて、不意に佛蘭西軍を襲撃したのである。チモーヒンは死物ぐるひの叫喚を上げて佛蘭西軍に跳り掛り、氣ちがひか酔つ拂ひじみた勢で、刀を振り廻しながら敵を襲つたので、佛蘭西軍ははつと思ふ間もなく、武器を捨てて逃げ出した。チモーヒンと竝んで走つてゐたドーロホフは、力任せに一人の佛蘭西兵を斬り殺し、第一番に降伏した將校の襟首を引つ掴んだ。逃げ走つてゐた兵士らは引つ返し、大隊は集合した。かくして、わが左翼を二分せんとした佛蘭西軍は、寸時の間に壓迫されて了つた。豫備隊も本隊に結合して、遁走兵も踏みとどまつた。

聯隊長はエコノモフ少佐と橋の袂に立つて、退却して行く中隊をやり過してゐたが、不意に一人の兵士が彼に近寄つて鎧を捕へ、殆ど馬にもたれ掛るやうにした。彼は青みがかつた、上等の羅紗の外套を着てゐたが、背囊も帽子もなかつた。頭には繻帯を巻き、肩に佛蘭西式の彈藥盒を吊し、手に將校用の軍刀を握つてゐた。兵士は蒼褪めた顔をしてゐたが、その空色の目は傲慢に聯隊長の顔を見詰め、口には微笑を浮べてゐる。聯隊長は、エコノモフ少佐に命令を授けるのに忙しかつたものの、この兵士には注意を向けずにゐられなかつた。

『閣下、この通り捕獲品が二箇あります。』佛蘭西の軍刀と藥盒をさし示しながら、ドーロホフはかう言つた。『そして將校をひとり捕虜にしました。中隊の逃げ足を止めたのはわたしであります。』ドーロホフは疲勞のために重々しく息をつき、一句々々きりながら話すのであつた。

『中隊全部が證人です。どうぞお憶え置きを願ひます。閣下！』

『よし、よし。』と言つて、聯隊長はエコノモフ少佐の方へ向いた。

けれどもドーロホフは退かたかつた。彼は繻帯を解いて引つべがし、毛の中に乾固まつてゐる血を示した。

『銃劍の傷であります。わたしは正面に踏みとどまつてみました。お憶え置きを願ひます、閣下。』

トッシンの砲兵中隊はすっかり忘れられてゐたが、やうやく戦鬪の終る頃になつて、いつまでも中央方面に砲撃が聞えるので、バグラチオン公爵は初め當直佐官を、それからまた暫くしてアシンドレイ公爵をそこへ遣し、出来るだけ迅速に退去を命じた。トッシンの砲の傍に配置されてゐた掩護隊は、戦鬪の中頃、誰かの命令でほかへ行つて了つた。しかし中隊がいつまでも佛蘭西軍を砲撃して、捕獲されないで済んだのは、たゞ何者にも保護されない四門の砲が、かくまで大膽な事をしようとは、敵も夢さう想像しなかつた丈の話である。のみならず、この砲兵隊の活潑な操作から推して、敵はこの中央に露軍の主力が集中されてゐる事と思ひ、二度までこの地點の攻撃を試みたが、二度ともこの高地に孤立してゐる四門の砲に、霰彈をもつて撃退された。バグラチオン公爵の立ち去つたのち間もなく、トッシンはシェングラーベン村の焼打ちに成功

した。

『見ろ、騒ぎ出したぜ、燃える燃える！ どうだあの煙は！ 巧いぞ！ 素敵ぢやあないか！ あの煙を見ろ、あの煙を！』と砲手らは元氣ついで口々に叫んだ。

すべての砲は命令もないのに火事の方面へ向けられた。一發はなす度に兵士らは後から追つ掛けるやうに、『巧いぞ！ さうだく！ いや貴様は……豪いぞ！』などと叫ぶのであつた。火事は風に煽られて、見る見る擴がつて行つた。村ざかひまで進出した佛蘭西縦隊は、後へ引つ返した。しかしこの失敗に對する報復であるかのやうに、敵は村から右寄りの方へ十門の砲を引き出し、トッシンの隊を目掛けて撃ち始めた。

火事のために呼び醒まされた子供らしい歡びと、佛蘭西軍砲撃の成功が齎した興奮のために、砲手らはこの砲兵隊にてんで氣がつかなくなつた。やつと二箇の砲弾と、續いてまた四箇の砲弾が砲の間に落下して、一箇が馬二頭を斃し、いま一箇が砲車長の足を切斷した時、初めてはつと思つた。しかし一旦もえ立つた士氣は容易に衰へなかつた。たゞ氣分が變つただけである。馬は豫備砲車から新しいのをつれて來て附け替へたし、負傷者は片づけて了つた。そして四門の砲は、十門の砲を有する中隊へ向けられた。トッシンの同僚將校は戦闘の初めに斃れ、一時間のあひだに四十人の砲手の中、十七人を奪はれた。が、兵士らは、それでも相變らず愉快さうに元氣がよかつた。たつた二度、ほど遠からぬ下の方に佛蘭西兵が現はれたので、そのとき霰彈を浴せ掛けただのである。

動作の弱々しく無器用な小男のトッシンは、絶えず從卒に向つて、今の賦負にもか一服と命じた。そしてパイプから火を吹き散らしながら、前の方へ駆け出して、小さな手を翳し敵を眺めるのであつた。

『さあ、やつつけて了へ！』と彼は言つて、自分で砲の車輪に手を掛け螺旋を廻しなどした。

絶間なく聞える耳を聳するやうな砲聲に、きつと一々身慄ひしながら、トッシンのはべつパイプを銜へたまゝ、砲から砲へと煙の中を飛び廻つた。そして、時には狙ひをつけたり、時には装薬を敷へたり、時には斃れ傷ついた馬の取り替へや附け替への指揮をしながら、持前の弱々しい思切りの悪い細い聲で叫び續けた。彼の顔は次第に活氣を増して行つた。たゞ兵士が殺されたり負傷したりする時は、眉を顰めて戦死者から顔を反け、いつものやうに負傷者もしくは戦死者を抱き起すのを躊躇してゐる兵卒に向つて、腹立たしげに呶鳴りつけた。兵士らは大部分立派な若者で、常に砲兵中隊で見受けられるやうに、自分の指揮官より一尺以上も脊が高く、幅も倍からあるやうな大男であつたが、誰も途方に暮れた子供たち同然、指揮官の顔を見つめてゐる。そしてトッシンの顔に現はれる表情は、必ず彼等の顔にも映つて行くのであつた。

この恐ろしい轟きと喧噪のため、そして注意と敏活の必要な結果、トッシンは不快な恐怖の感情を少しも味はなかつた。自分が殺されるとか、或ひは非常な重傷を負はされるとか云ふ考は、瞬時も彼の頭に浮ばなかつた。それどころか、彼は次第に愉快になつて來た。初めて敵を見て最初の發射をしたのは、何だかもうずつと前——昨日あたりの事ではないかとさへ思はれた。そし

ていま自分の立つてゐる原中の一片の土地は、自分に取つて懐かしい、生れ故郷の土みたいな気がした。しかし彼は一切を記憶し、一切を考慮して、同じ状況に置かれた優良な將校のなし得る凡ての事をし得るにも拘らず、熱病やみか酔つ拂ひのやうな心の状態にあつた。

四方から起る耳を聳せんばかりの味方の砲聲、敵弾の唸りと落下、砲の周りを忙しさに動き廻る眞赤になつた汗みどろの砲卒の姿、かなたに見ゆる敵の砲煙（この煙の見えた後は、きつと砲丸が飛んで来て、地面か人か砲か馬かに落下する）、これらの様々な物の姿から、彼の頭には自己獨特の幻想的な世界が組み立てられて、それが今の彼の悦びをなしてゐるのだ。彼の想像の中では、敵の砲は砲でなくパイプであり、その蔭に隠れてゐる目に見えない男が、時をり煙草の烟を圈に吹いてゐるのだ。

『また吹き出しやがつたな。』ちやうど山から煙の圈が飛び出して、風のために帶のやうに左へ流れて行つた瞬間、トッシンは小聲で獨りごちた。『今に毬が飛んで来るぞ、すぐに抛り返してやるから。』

『何と仰しやいましたか、大尉殿？』傍ちかく立つてゐて、彼が何やら呟いたのを聞きつけた下士が、かう訊ねた。

『何でもない、榴弾、こめ……』と彼は答へた。

「さあ、うちのマトゼーヴナさん。」と彼は心の中で言つた。マトゼーヴナといふのは、一番はじめにある大きな古い型の大砲の事である。遙かかなた砲門の傍に立つてゐる佛蘭西兵は、曠のやうに思はれた。第二號砲つきの、美男子で呑んだくれの一番砲手は、彼の世界では伯父さんであつた。トッシンは誰よりも一ぱん餘計この男に目を注いで、その一舉一動に悦びを感じた。時に衰へ時に烈しくなる麓の銃聲は、誰かの息つかひのやうに聞えた。

『ほうら、また息をついた、また息をついた。』と彼は獨りごちた。

彼自身はまた、砲弾を両手に摺んで佛蘭西軍の方へ抛りつける、脊の高い猛者のやうな気がした。

『いゝか、マトゼーヴナ、へまな事をせんやうに頼むぞ！』砲の傍から離れながら、彼がさう言つてゐると、不意に聞き馴れぬ人の聲が頭の上で響いた。

『トッシン大尉！ 大尉！』

トッシンはどきりとして振り返つた。これはグルントで彼を酒保から追ひ出した、例の當直佐官である。彼は息ぎれのする聲で叫んだ。

『君、どうしたんです、氣でもちがつたんですか？ もう二度も退却の命令が下つたのに、君は……』

「何だつてあいつらは俺を……」恐怖の念をいだいて上官を見上げつゝ、トッシンは心の中で考へた。

『わたしは……なんにも……』二本指を帽子の庇に當てながら彼は言つた。『わたしは……』しかし大佐は言ひたい事を終ひまで言ひ得なかつた。近々と飛び過ぎた砲弾は、彼を潜るやう

に馬上へ屈み込ましたのである。彼はちよつと口を嚙んでみたが、また何か言ひ出さうとする刹那、またもや砲弾が彼の言葉を押し止めた。彼は馬首を轉じてかなたへ駈け出した。

『退却だ！ みんな退却だ！』と彼は遠くから喚いた。

兵士らは笑ひ出した。一分の後に副官が同じ命令を齎して來た。

これはアンドレイ公爵であつた。トッシンの砲兵隊が陣してゐる地點へ乗り入らうとした時、彼の目に入つた最初の物は、脚を撃たれた放れ駒であつた。この馬は車につけられた別の馬の傍で嘶いてゐたが、その脚からは泉のやうに血が流れ出てゐた。前車の間には幾人かの戦死者が横はつてゐる。彼が中隊に近寄つたとき、砲弾はしつきりなしに頭上を掠めた。彼は神經的な痙攣が背中を走るのを感じた。しかし俺は恐れてゐるかと考へただけで、彼は更に勇氣をふるひ起した。「俺は恐れることは出来ない。」と考へて、彼は徐ろに砲の間で馬をおりた。彼は命令を傳へた後も中隊を去らなかつた。彼は自分の目前で砲を陣地から取り拂はせて、運ばせる事にしようと思つたのである。トッシンと共に死體を踏み越え踏み越えて、恐ろしい佛蘭西軍の猛火の下を歩みつゝ、彼は砲の取り片づけに力を添へた。

『たつた今、上官が一人みえましたが、すぐにすたこら逃げ出されましたつけ。』と下士がアンドレイ公爵に言つた。『副官殿とはまるで違ひます。』

アンドレイ公爵はトッシンと少しも話をしなかつた。彼等は二人とも忙しくしてゐたので、互に殆ど顔を見合はせなかつたほどである。四門のうち完全な砲を二門前車に聯結し終ると、一同

麓へ向つて進んだ。一門の毀れた砲と一角砲とは遺棄することにした。アンドレイ公爵はトッシンの傍へ馬を寄せて、『では失敬します。』とトッシンに手を差し出した。

『失敬しました、副官殿。』とトッシンは言つた。『あなたは實にいゝ人ですわ！ 左様なら。』なぜかしら不意に目頭に浮んで來る涙と共に、トッシンはかう言つた。

二一

風は靜まつた。黒い雨雲は地平線のあたりで硝煙と溶け合ひながら、戰場の上に低く垂れかゝつた。だん／＼暗くなつて來たけれど、二箇所に映る火事の空明りは、かへつてはつきりと浮み出るのであつた。砲撃は次第に勢を減じたが、ばち／＼といふ銃聲は後ろの方でも右手でも、ますます／＼繁く近くなつて來た。トッシンが自分の大砲を曳いて、負傷者をよけて通つたり、その上へ乗り掛けたりしながら、砲火の中から出て谷へ下つた時、上官や副官たちが彼を迎へた。その中に當直佐官も、二度トッシンの隊へ派遣されて一度も行き着く事の出来なかつたジェルコフも交つてゐた。彼等は互に遮り合ひながら、どこへどう行けといふやうな命令を、下したり傳へたり、トッシンを譴責をしたり注意を與へたりなどした。トッシンは何一つ處置を取らうとせず、また口を利く事を恐れながら（それは彼が一口ものを言ふたびに、自分でもなぜか分らず、妙に泣き出したくなつたのである）、砲兵のやくざ馬に乗つて、無言のまま後からついて行つた。

負傷者は遺棄せよとの命令であつたが、それでも多くの者は、軍の後からとぼ／＼と跟いて來

て、砲車に乗せて貰ひたかつた。戦争の前にトッシンの假小屋から飛び出した、活潑な歩兵將校は腹部に弾丸を受けて、砲車「マトゼーヴナー」に載せられてゐた。山の麓で、蒼い顔をした輕騎兵の見習士官が、片手で今一方の手を握り乍らトッシンに近づき、乗せてくれるやうに頼んだ。

『大尉殿、どうぞお願ひです、僕は手に壓傷を負うたのですから』と彼はおづ／＼言つた。

『後生です。僕もう歩けません、後生です！』

察するところ、この見習士官は既に一度ならず、方々で乗せてくれと頼んでは、到る處ではねつけられたものらしい。彼は愚圖々々した憐れつばい聲で頼んだ。

『乗せてやると言つて下さい。後生です。』

戦
争
と
平
和

『乗せて上げろ、乗せて上げろ。』とトッシンが言つた。『おい、伯父さん、外套を敷いて上げんか。』彼は氣に入りの兵卒に向つてかう言つた。『あの負傷した將校の方はどこにゐる？』

『おろしました、亡くなられたのであります。』と誰かが答へた。

『乗せて上げろ。乗り給へ君、乗り給へ。おい、外套を敷け、アントーノフ。』

この見習士官はロストフであつた。片手を支へてゐる彼の顔は蒼白く、下頰は熱病的な痙攣にがた／＼と慄へた。彼はマトゼーヴナー——先ほど死んだ將校を取りおろしたばかりの砲車に載せられた。下に敷かれた外套には血がたれてゐ、ロストフは乗馬袴と手を汚した。

『どうしたね、君、負傷したのかい？』ロストフの乗つてゐる砲に近寄りつゝ、トッシンは言葉をかへた。

『いゝえ、壓傷です。』

『どうして側板（側板）に血がついてるのか？』とトッシンが訊いた。

『これは大尉殿、あの將校の人が汚されたのであります。』一人の砲卒が外套の袖で血を拭きながら答へた。その様子は砲の裏（背）れに對して謝罪するやうであつた。

第
二
編

歩兵の助を借りて無理やりに砲を坂の上へ曳き上げて、グンテルスドルフの村に行き着くと、軍は行進を止めた。もはや十歩の外は、兵卒の外套も見分けかねるほど暗くなり、交射の音も静まりかけた。不意に右手に當つて、再びちか／＼と叫喚と銃聲が聞えた。發射の光がもう暗の中に閃いてゐた。これは佛蘭西軍の最後の攻撃であつた。村の民家に腰をおろしてゐた兵士らは、これに應戦した。またもや、あらゆるものが村から飛び出した。が、トッシンの砲隊は動く事が出来なかつたので、砲手もトッシンも見習士官も、自分の運命を待受けつゝ、黙つて目と目を見交してゐた。銃聲は段々と静かになつて行つた。と、横手の往來から兵士らが、賑やかに話し合ひながらばら／＼と飛び出した。

『無事かい、ベトロフ？』と一人が訊ねた。

『一つ熱い奴をくらはしたから、もうちよつかいを出すまいよ。』ともう一人が言つた。

『まるでなんにも見えやしねえ。彼奴らが同士打ちをやつた様（さま）はどうだい？ なんにも見やあしねえ、暗いなあ、おい。何か飲むものはないか？』

佛蘭西軍は遂に撃退された。そして再び眞の暗の中を、がや／＼とどよめく歩兵隊に杵のやう

に圍まれたトウシンの大砲は、どこか前方へ動き出した。

目に見える暗澹たる一筋の川は、囁きと話し聲と馬蹄と車輪の響きをどよもしつゝ、闇の中をいつまでも何時までも同じ方向に流れて行く。全體にわあつと云ふ雑音の中で、他の如何なる響きよりも一番はつきりと、負傷者の呻き聲が夜の闇の中に聞える。彼らの呻吟は、軍隊をとり巻いてゐるこの夜の闇を、一杯に充たしてゐるやうな氣がした。彼らの呻吟とこの夜の闇——それは實際おなじものであつた。暫くたつた時、この動き行く大群集の中に動揺が生じた。誰か幕僚を引きつれた人が白馬に跨つて通過したが、通りすがりに何やら言つたのである。「何と言つたんだ？ これからどこへ行くんだい？ 夜營でもするんかね？ お禮でも言つてつたのかい、一體？」かういふ貪るやうな問が四方から聞えた。そして動き進む群集は互ひにぶつ突かり始めた（多分先頭が立ち止つたものらしい）。止れの命令が出たといふ聲が、どこからとなく傳はつた。一同は今まで歩いてゐた泥ぶかい道の真ん中に立ち止つた。

火がともされて、話し聲が次第に高く聞え出した。トウシン大尉は中隊の處理を濟ますと、兵士の一人に命じて、見習士官のために繃帶所か軍醫を探しにやり、兵士たちが道路の上に燃やした焚火の傍へ坐つた、ロストフも同じく火の傍へ這ひ寄つた。疼痛と寒さと濕氣から起る熱病やみめいた痙攣は、彼の全身を震はすのであつた。睡魔は堪へ難いほど襲ふのであつたが、じくじくうづいて置場のない手の痛みに、寢つくことも出来なかつた。彼は時に目をふさいだり、時に恐ろしく赤く見える火に見入つたり、時にはまた自分の傍に胡坐を組んでゐるトウシンの、唇を

丸くした弱々しい姿を眺めたりしてゐた。人の好い懶巧さうなトウシンの大きな目は、同情と憐愍を帯びて彼に注がれてゐた。トウシンが眞底から自分を助けたいと思ひながら、どうする事も出来ないでゐるのは、彼にもあり／＼と分つてゐた。

第 徒歩や乗馬で通り過ぎたり、周りに陣取つたりしてゐる、歩兵の足音や話し聲などが四方から聞えた。人聲、足音、泥濘の中を進んでゆく馬蹄の響き、それから遠く近く薪のはぜる音——かういふものが一つに溶け合つて、揺れ慄へるやうなどよめきになつてゐた。

第 今はまだ以前のやうに、目に見えぬ川が暗の中を流れてゐるのでなく、嵐の後の暗澹たる海が、波を斂めつゝ顫へてゐるやう。ロストフは自分の眼前周圍に起るものを、意味もなく見たり聞いたりしてゐた。一人の歩兵が焚火の傍へ近寄つてしやがみながら、手を火の中に突つ込んで顔をそむけた。

編 『構ひませんか 大尉殿？』彼は物問ひたげに、トウシンに向つてから言ふ。「自分の中隊にはぐれちまつて、自分で自分がどこにゐるか分らんであります。困つちやつた！」

頬に繃帶をした歩兵將校が兵卒を一人つれて焚火に近寄り、トウシンに向つて、中隊行李を通さねばならぬから、ほんのちよつと砲を片寄せさしてくれと頼んだ。この中隊長の後から、二人の兵士が焚火を目かけて飛んで來た。彼らは何か長靴のやうな物を引つ張り合ひながら、死物ぐるひに罵つたり掴み合つたりしてゐる。

『何だ、貴様が拾つたんだつて！ ふん、巧いことを言つてらあ！』と一人がしや嘎れ聲で喚

その後から血みどろの巻脚絆で頸を結へた、瘦せた蒼白い兵隊がやつて来て、腹だたしげな聲で砲兵たちに水を請求するのであつた。

『何だつてんだ、犬ころみたいに死んぢまへつてのかい？』と彼は言ふ。

トッシンは彼は水を與へるやうに命じた。その後から陽氣な兵隊が飛んで来て、歩兵隊へ火種を分けてくれと頼んだ。

戦 『火種の熱いところを歩兵にやつて下さいな！ やあ、御機嫌よう、兄弟。さてと、どうも火種を有難う、後で利子をつけてお返ししませう。』赤い薪の燃えさしをどこか闇の中へ持つて行きながら、彼はさう言つた。

和平 それに續いて四人の兵卒が、何か重さうなものを外套に載せて運びながら、焚火の傍を通つて行く。その中の一人が何かに躓いた。

『ちよつ、こん畜生、道路に薪なんか置きやがつて。』とぼやく。

『死んぢまつたものを、何だつてこんなに擔いで行くんだい？』といま一人が言ふ。

『ちよつ、實に貴様らは！』

と彼等はその重荷を昇いで暗の中に隠れた。

『どうだね？ 痛みますか？』トッシンは小聲でロストフに訊いた。

『痛いです』

『中隊長、閣下がお呼びであります。あすこの小屋の中にをられます。』と下士がトッシンに近づいてかう言つた。

『よし来た、いま行くぞ。』

トッシンは立ち上り、外套の釦を掛け、身繕ひしながら焚火を離れた。

砲兵の焚火からほど遠からぬ、特別に準備された百姓家の中に、バグラチオン公爵は自分の所へ集まつて来た各部隊の長官數人と、食事を共にしながら談話を交へてゐた。その中にはがつがつと羊の骨をしやぶつてゐる、半分目を閉ぢたやうな小柄の老人や、一杯のヲートカと食事のために眞赤になつた二十二歳の立派な將軍や、名前入りの指輪を嵌めた當直佐官や、不安げに一同を見廻してゐるジェルコフや、蒼い顔をして唇を噛みしめ、熱病やみのやうに目を光らしてゐるアンドレイ公爵などがゐた。

編 百姓家の中には鹵獲した佛蘭西軍旗が、片隅に立てかけられてあつた。例の理事はとぼけた顔をして、軍旗の布地をいぢくり廻しながら、不審さうな顔で小首を傾げてゐたが、それは事實、この軍旗が彼の興味を惹いたのかも知れないが、或ひはまた空腹な彼に取つて、他人の食事を見てゐるのが苦しかつたせゐるかも知れぬ。彼は食器が足りないために、陪食できなかつたのである。隣の部屋には龍騎兵の俘虜になつた佛蘭西の大佐がをり、味方の將校連がその周りに集まつてじろく見廻してゐる。バグラチオン公爵は箇々の長官に謝辭を述べ、戦闘の詳細、わが軍の損失などについて質問した。ブラウナウで檢閲を受けた聯隊長は、戦闘が開始されるや否や森の外へ

退却し、伐木隊を集めて自分の傍を通過させ、二箇大隊を率ゐて銃剣突撃を試み、佛蘭西軍を顛覆させて了つたと報告した。

『閣下、わたくしは、第一大隊に混乱が生じたのを見たとき、道路に立つて考慮しました。そして「この大隊を退却させて連發攻撃をもつて迎へよう」とかう決心して、早速實施したのであります。』

聯隊長はこれを實行したくて堪らなかつたので、實戦でさうする暇がなかつたのを痛く残念に思つた。それゆゑ今も何だか、それが實際行はれた事のやうに思はれたのである。いや、一歩進んで、本當にさうだつたのかも知れない。一體かうしたてんやわんやの騒動の中で、實際にあつた事となかつた事を、きつぱりと區別できるものだらうか？

『この際、閣下に一言申し添へて置きたいのは、』と彼は、クトゥゾフとドーロホフの會話、それに自分とドーロホフとの今日の出あひを思出して、語をついた。『ほかでもありません、奪官兵のドーロホフがわたくしの前で、敵の將校を捕虜にして殊勳を樹てた事であります。』

『その際わたくしはバヴログラード聯隊の突撃を見ました。』この日すこしも輕騎兵隊を見た事がなく、たゞ歩兵將校の話で聞いたばかりのジェルコフは、不安げに邊りを見廻しながら口を挿んだ。『方陣を二つまで蹂躪しました、閣下。』

ジェルコフの言葉に對して二三の人は、いつものやうな洒落を期待して微笑した。けれども彼の言葉が、やはり今日の友軍の讚美に傾いてゐるのに氣づき、また元の眞面目な表情に歸つた。

尤も多數の人は、ジェルコフの言葉が何の根據もない出たら目なのを、よく承知してゐた。バヴラチオン公爵は小柄な老大佐に向つて、

『一同に感謝します、歩兵、騎兵、砲兵、各部隊とも、悉く勇敢な働きをしてくれました。ところで、どうして中央では砲二門を遺棄したのですか？』と彼は目で誰やら探しながら訊ねた。

(バヴラチオン公爵は左翼の砲の事を訊かなかつた。彼は戦鬪のごく初めに、左翼の砲が悉く棄てられた事を、既に知つてゐたのである) 『わたしは何でも君に頼んだやうだね？』と彼は當直佐官に向つた。

『一門は破壊されましたが、』當直佐官は答へた。『いま一門の砲は分り兼ねます。わたくしは始終あすこで指圖してをりまして、ちよつと前に歸つて來たばかりであります……全くどうも激烈でございました。』と彼は謙抑な調子で附け足した。

誰やらトゥッシン大尉が此の村に駐屯してゐるので、もう今むかへにやつた所だと言つた。

『あゝ、君も行つてたんですね。』とバヴラチオン公爵は、アンドレイの方へ向いて言つた。

『あゝさうですね、あなたとはちよつとの間、一緒に落ち合つてましたつけね。』と當直佐官は氣持よく微笑しながら、ボルコンスキイに向つてかう言つた。

『わたくしは不幸にして、あなたとお目に懸る光榮を有しませんでした。』と、冷やかなぶつきら棒な聲でアンドレイ公爵は答へた。

一同は暫く口を噤んでゐた。そのとき將校たちの後ろからおづ／＼と進み出ながら、闕の上に

トッシンが姿を現はした。トッシンはいつもの如く、上官の顔を見るとへどもどして了つて、狭い小屋の中に竝んでゐる將官たちをよけて通る時、よく足もとを見ないで軍旗の柄に躓いた。幾たりかの笑ひ聲が起つた。

『どういふ工合で砲を遺棄したのかね？』バグラチオンは大尉に對するよりも、寧ろ笑つた者に對して（その中でジェルコフの聲が最も高く聞えた）、眉を顰めながら、訊ねた。

トッシンは嚴めしい上官の顔を見、今はじめて自分の罪と恥辱の恐ろしさが、まぎ／＼と心に浮んで來た。自分はおめ／＼と生きながらへながら、二門の砲を失つたではないか。彼はすつかり興奮してゐたので、この瞬間まで、その事を考へる餘裕がなかつたのである。將校連の嘲笑は一そう彼に度を失はせて了つた。彼は下頤を顫はしながら、バグラチオンの前に立つて、やつとの事でこれだけ言つた。

和 平 『存じません：閣下：兵員が足りなかつたからであります、閣下。』

『掩護隊の方から取れた筈ぢやないか！』
掩護隊がなかつた事を、トッシンは言はなかつた。それは明々白々たる事實であつたにも拘らず、彼は他の長官に累を及ぼす事を恐れ、答につまつた小學生が試験官の目を見つめるやうに、じつと据わつたまゝ動かぬ目で、バグラチオンの顔を眞直に眺めてゐた。

沈黙はかなり長く續いた。バグラチオン公爵はあまり苛酷な役を勤めたくないらしく、何と言つていゝか分らない様子であつた。他の人達は敢てこの問答に口を入れようとしなかつた。アン

ドレイ公爵は額ごしにトッシンを眺めてゐたが、その指は神經的に顫へてゐた。

『閣下。』とアンドレイ公爵は持前の鋭い聲で沈黙を破つた。『閣下はわたくしをトッシン大尉の中隊へ派遣なさいました。わたくしはそこで三分の二の兵士と馬を失ひ、二門の大砲をめちやめちやに破壊されてゐるのを見ました。掩護隊などは少しもありませんでした。』

バグラチオン公爵とトッシンは、興奮の情を壓しつけるやうにして話すボルコンスキイを、一様にじつと見つめてゐた。

『閣下、もし閣下がわたくしに忌憚なく意見を吐露さして下さるならば、』と彼は續けた。『今日の成功に對しては我々は何よりも一番に、この砲兵中隊の行動と、トッシン大尉およびその中隊一同の、英雄的な持久力に負ふ所が最も多いのであります。』かう言つてアンドレイ公爵は、答も待たないでつと立ち上り、卓を離れた。

編 バグラチオン公爵はトッシンを眺めた。そしてボルコンスキイの極端な意見に對する疑の色を示すのも好まないが、さりとてまた全然その言葉を信ずる事も出來ないやうな氣がしたので、ちよつと小首を傾けながらトッシンに向つて、もうさがつてもいゝと注意した。アンドレイ公爵もその後から部屋を出た。

『いや、實に有難う、お蔭で助かりましたよ、君。』とトッシンは彼に言つた。

アンドレイ公爵は彼の方を振り向いたが、なんにも言はず傍を離れた。アンドレイ公爵は何となく氣が鬱いで心が重かつた。これらの事はすべて實に奇怪で、彼の期待に毫も似た所がなかつ

た。

「あの連中は何者だ？ 何しに來たのだ？ 何があの人達に必要なんだらう？ そしていつになつたら、こんな事がすっかり片附いて了ふのだらう？」目の前に入り替り立ち替る人影を眺めつゝ、ロストフはさう考へた。睡魔は堪へ難いほど襲つて、赤い圈は目の中で跳つた。そしてこれらの顔の印象や孤獨の感じは、疼痛の感じと一緒に融け合つた。これはあの負傷したのや乃至負傷しない兵隊らの仕業だ——あいつらが他人の挫折した手や肩の筋をおしたり、重くしたり、振ぢ廻したり、肉に火をつけたりするのだ。この人達を道れるために、ロストフは眼を閉ぢた。

戦

と 彼はほんの一瞬間、忘我の境に落ちた。しかしこの短い忘我の瞬間に、彼は無數の幻を見た。

平

母とその大きな白い手、ソーニャの瘦せた肩、ナターシャの目と笑ひ聲、ヂェニーソフとその聲

和

その聲、チェリヤーニン、そして例のチェリヤーニンとボグダレヌイチに關する一件などを夢うつゝに見た。この一件と、ついそこにある疝高い聲の兵隊とは、全然おなじ物である。この一件

と兵隊とが、いつまでもしつこく彼の手を掴まへて壓しつけながら、絶えず一方へぐんぐんと引つ張るのだ。彼はそれらのものを避けようとするけれど、こちらは一分一厘も、一秒間も、彼の肩を放さない。もしこの連中が引つ張らなかつたら、肩は少しも痛まずに達者であるのだが、しかしこの連中を免れる事は金輪際出來ない。

彼は目を開けて上の方を眺めた。黒い夜の帷は炭火の明りから二三尺うへの方に垂れてゐる。

降り始めた雪が、この明りの中を粉のやうに飛んでゐる。トッシンも歸つて來ず、軍醫も見舞はない。彼はたつた一人ぼつちである。たゞ一人の兵士が裸で焚火の向う側に坐りながら、瘦せた黄色い體を暖めてゐた。

「俺は誰にも用のない人間なんだ！」とロストフは考へた。「誰ひとり救けてくれる者も、憐れんでくれる者もない。ところが、俺もいつか以前は自分の家にゐて、強健で快活で、皆に好かれた事もあるんだ。」彼は嘆息したが、嘆息と共にひとりでに唸り聲が出た。

第

『どこか痛むのでありますか？』と兵隊は火の上で襦袢をふるひながら訊ねた。そして返事も待たず、咳き拂ひして言ひ添へた。「けふ一日にどれだけ人が死んだり、怪我をしたりしたか知

二

れやしない——恐ろしいこつた！」

ロストフは兵隊のいふ事を聞いてゐなかつた。彼は火の上を飛びかふ粉雪を見ながら、露西亞の冬——暖く明るい家、むく／＼した毛皮外套、矢のやうな櫛、健康な體、家族の愛情と心づかひ、かういふものを思ひ起してゐた。「あゝ、何だつてこんな處へ來たんだ！」と彼は考へた。

翌日、佛蘭西軍は襲撃を繰り返さなかつたので、バグラチオン支隊の残兵はクトゥゾフの軍に合した。

第三編

一

ワシーリイ公爵は、自分の計畫を深く考へるやうな事をしなかつた。彼はまた己れの利益のため、他人に禍を及ぼさうなどは、尙さら思つてゐなかつた。要するに、彼はただ單に社會で成功して、その成功を習慣とした人に過ぎなかつた。彼の心中には四圍の事情とか、他人の接近とかによつて、常にさまざまの計畫や考案が出来あがつて行く。そして彼自身もさうした計畫や考案を、明白に意識してゐなかつたけれど、それが彼の生活興味の全部なのであつた。このやうな計畫や考案は一つや二つでなく、二十も三十も彼の頭の中で運用されてゐた。その中には、やつと心に浮び始めたばかりのものもあり、また着々進捗してゐるものもあり、また立ち消えになつて了ふものもあつた。彼は決して腹の中で、「この男はなか／＼權勢があるから、俺はこの男の信用と友誼を得て、その助力で一時金の下賜を受けねばならぬ。」とか、もしくは「あのピエールは財産家だから、あの男を唆かして娘を娶せ、俺に入り用な四萬ルーブリの金を借りなくちやならぬ。」などといふ考へを毛頭起しはしなかつた。しかし權勢ある人に邂逅するとすぐその瞬間に、この男は何かの役に立つかも知れないぞ、と本能が彼に囁く。で、ワシーリイ公爵はその

の人に接近して、機會ある度に、別だん下用意をする譯ではないけれど、生來の本能によつてお世辭を言つたり、馴々しく口を利いたりしながら、自分に必要な話をするのであつた。

莫斯科ではピエールがちやうど彼の鼻先にゐたので、ワシーリイ公爵は彼のために、當時においては今この三等官に相當する、侍從武官の地位を周旋した上、自分と一緒に彼得堡へ行つて、自分の家へ落着くやうにと、熱心にピエールを説いた。ちよつと上へは何の氣もないやうでありながら、同時にまた是非ともさうしなくちやならんだ、といふ確乎たる自信をもつて、ワシーリイ公爵はピエールに娘を娶すのに必要なすべての手段を盡した。もしワシーリイ公爵が豫め自分の計畫を熟考したなら、地位の上下に拘らずあらゆる人に對し、かくまで自然な、かくまで單純な、かくまで馴々しい態度をとる事は出来なかつたであらう。彼はしじゆう自分よりも強く富める人の方へ、何ものかの力によつて引き寄せられてゐた。彼は他人を利用する必要と可能の兼ね備つた一瞬間を捕へるのに、稀有な天賦の才能をもつてゐたのである。

ついでこの間まで孤獨で呑氣な身の上であつたピエールは、とつぜん財産家のベズーホフ伯爵となり、急に多くの人々に取り巻かれる忙しい體になつたので、夜床に入つた時、やつと一人きりになれる思ひであつた。彼は書類に署名したり、自分でもはつきりした理解を持たない諸官省との交渉をしたり、なにかの事を總支配人に訊ねたり、莫斯科附近の領地へ出かけたり、多數の人を引見したりしなければならなかつた。以前、彼等はピエールの存在など知らうともしなかつた癖に、今ではもし彼が會ひたくないなど言はうものなら、それこそ腹を立てたり、悲觀したり

するやうになつた。これらの種々雑多な人々——事務家、親戚、知人などは、悉くこの年若い相續者に對して愛想がよかつた。彼等は疑もなくビエールが優れた資質を持つてゐることを、飽くまで信じ切つてゐるらしかつた。二言目には、「世にも珍しく親切なあなたのことですから、」とか、「あなたのやうな美しい心を持つていらつしやるお方は、」とか、「伯爵、あなた御自身實に純潔なお方です、」とか或ひは「もしあの方があなたくらゐ賢い人間でしたらね、」と言つたやうなことを口にする。でビエールはだん／＼と眞底から、自分は並々ならぬ親切な男で、非凡な才能をもつてゐると信じるやうになつた。まして彼は以前から心の奥の方で、まこと自分は極めて親切な賢い男だ、といふやうな氣持がしてゐたのであつてみれば尙更である。

のみならず以前彼に對して意地悪く、明かに敵意を抱いてゐるらしかつた人達すら、急に優しく愛想よくなつて來た。あれほど怒りつぽかつた一番上の公爵令嬢（例の長い胴をし、人形のやうにぴつたり髪を撫でつけた令嬢）までが、葬式が済んだ後わざ／＼彼の部屋へやつて來た。伏し眼になつて、しつかりなしに顔を眞赤にしたが、彼女は自分とビエールとの間に生じた誤解を、非常に残念に思つてゐる由を述べ、あゝいふ打撃を受けた今となつては、自分はもう何を言ふ権利もない、たゞこれまで非常に愛してゐたこの家——自分が多くの犠牲を捧げたこの家に、たつた二三週間、逗留の許しを乞ふよりほかはないと言つた。かう言つた時、彼女は怵へ切れなくなつて泣き出した。あの石像のやうな令嬢が、かくも變るものかと、ビエールはすっかり感動し、彼女の手を取りながら、自分でも何のためか分らずに赦しを乞ふのであつた。この日から令嬢はビエールのために絹の襟巻を編み始め、全く彼に對する態度を一變して了つた。

『ね君、どうか彼女のためにさうしてやつてくれ給へ、何と言つても、あれは故人の事ですらぶん苦勞したんだからね。』何か令嬢の利益を圖つた書類に署名を求めながら、ワシーリイ公爵はかう言つた。

ワシーリイ公爵の考では、何と言つてもこの紙きれを——三萬ルーブリの手形を、可哀さうな公爵令嬢に抛つてやらねばならぬ。それは例のモザイクの折衝事件にワシーリイ公爵が關係した事を喋り散らされては大變だから、そんな考へを起させまいための魂膽である。ビエールは手形に署名した。それからといふものは、令嬢は彼に對してますます親切になつて來た。二人の妹令嬢も同様愛想よくなつたが、殊に黒子のある可愛い末の令嬢は、ビエールの姿を見る度に恥かしさうにほゝ笑んでは、彼をまごつかすのであつた。

編 ビエールはすべての人が誰も彼も自分を愛してくれるのが、極めて自然に思はれた。だから、もし誰かが彼を愛さなかつたら、恐ろしく不自然に感じたに相違ない。彼は自分を取り巻く人々の眞情を疑ふ譯にいかなかつた。それに、彼はこれ等の人々の眞情不眞情を顧る暇がなかつたのである。彼はいつも忙しくて、いつもつましく楽しい酣醉の状態にあつた。何かしら重大な世間全體の運動があつて、自分がその中心になつてゐるやうな氣がし、また自分が何かしら或る物を、絶えず人々から期待されてゐるやうな感じもした。で、もしそれを果さなかつたら、多くの人々を悲しませ、その希望を奪ふ事になる。もしそれを果せば、一切の事がよくなるのだ——か

う考へて彼は要求される通りをして行つた。けれどもこの何かしら善い事は、いつも前の方に取り残されるのであつた。

かうした最初の時期に、誰よりも一ばん餘計にピエールの事務ばかりでなく、ピエール自身までも自由にしてゐたのは、ヴシーリー公爵である。ベズーホフ伯爵の死後、彼は暫しもピエールを手放さなかつた。そして「わたしはいろんな仕事に悩まされて、疲れ切つてゐるのだけれど、この哀れな若者——しかも莫大な財産を持つた親友の忘れがたみ（これが一ばん大事なことだ）を、運命の神や悪者どもの掌中に醜弄させるのは、情に於て忍びないのだよ。」といつたやうな顔附をしてゐた。ベズーホフ伯爵の死後、彼が莫斯科に過した幾日かの間に、彼は度々ピエールを自分の居間へ呼び寄せたり、また自分からピエールの部屋へ出かけたりにして、ピエールのなすべき事を一々指圖した。その疲れたやうな而も確信に充ちた調子は、「まるで君も知つての通り、わたしは両手に餘るほどの仕事をかゝへてゐる。だからわたしが君の世話を焼くのは、全くの慈悲心から出る事なんだよ。そればかりでなく、わたしが君に言つてゐる事は、實行し得る唯一の方法なんだから、それを承知して貰ひたい。」とでも言ふやうであつた。

『ねえ、君、明日はいよいよ一緒に立つんだよ。』あるとき彼は目を閉ぢて、指で相手の肘をさぐり乍ら、ピエールに言つた。それは宛然さながら、いま自分の言つてゐる事は、もうとつくに二人の間で取り決められた事で、その他にはもう何とも決めやうがない、と信じ切つてゐるやうな調子であつた。『明日はもう出發するんだよ。君の席はわたしの幌馬車の方で用意するからね。實に嬉

しい。こゝの重なる用件はすつかり片づいて了つた。わたしももう疾づくに歸つてゐるべき筈だつたんだよ。ところで、これはわたしが總理大臣から受け取つた手紙だ。わたしは君の事を依頼して置いたが、君も今度いよいよ外交團に編入されて、侍從武官になつたんだよ。これで君のために外交官としての道が開かれた譯さ。』

この言葉を發するに用ひられた疲労と確信の調子は、強い威力を持つてゐたにも拘らず、長いあひだ一生の方針について思ひ煩つたピエールは、あわてて言葉を返さうとした。けれどもヴシーリー公爵は例の鳩の鳴くやうな低音で彼を遮つた。この聲は是が非でも相手を説き伏せねばならぬ非常な場合に應用されるもので、これを遮る事は不可能であつた。

『Mais, mon cher (君)』これはわたしが自分のために、自分の良心を満足さすためにしたのだから、禮なぞ言ふ事は決して要らない。人から愛され過ぎて不平を言ふ者は、一人もありやしないよ。それに君は自由の身なんぞね、明日にもすぐ辭職することが出来るんだよ。まあ兎にかく彼得堡へ出て見たら、すつかり自分で分るさ。それに君はもう疾く、この恐ろしい記憶から遠ざかるべき筈だつたんだよ（ヴシーリー公爵は長大息した）。さうなんだよ、君、さうなんだよ……ところで、君の馬車にはわたしの從僕でも乗せてやつたらいい。あゝ、さうだ、わたしは危く忘れる所だつた。』とヴシーリー公爵はなほ言ひ足した。『實はねえ、君、わたしと故人との間に、ちよいとした勘定が残つてゐるのだ。わたしはリヤザンの領地から受け取つたものがあるんだが、暫くこのまゝにして置かう、君は別に必要がないんだからね。そのうちによく勘定し

よう。』

ヴシーリイ公爵が「リャザンの領地から受け取つたもの」と言つたのは、幾千ルーブリカの人頭税で、ヴシーリイ公爵が自分の手許に残して置いたのである。

彼得堡でも莫斯科と同じやうに、優しい愛に充ちた人々の雰圍氣がビエールを取り卷いた。彼はヴシーリイ公爵の肝いつてくれた職、といふよりも寧ろ官位を（なぜと言つて、ビエールは何もしなかつたからである）辭退することが出来なかつた。そして知己や招待や社會上の仕事は山のやうにあつたので、ビエールは莫斯科にゐた時よりも、一層ぼろつとしたやうなせか／＼した氣持と、絶えず近づいてはゐるけれど、いまだに成就されないある幸福を感じた。

以前の獨身者仲間の多くは彼得堡にゐなかつた。近衛師團は遠征の途に上り、ドーロホフは奪官され、アナトリーは地方の師團に勤務してゐるし、アンドレイ公爵は外國へ行つてゐたので、ビエールは以前好んでしたやうな風に夜を過すことも、またとき／＼畏敬する年長の友と隔てのない物語をして、氣晴らしをすることも出来なかつた。しじゆう彼は晚餐會や舞踏會で時を送つたが、主としてヴシーリイ公爵のもとで肥えた公爵夫人や、麗人エレンと一座して、遊び暮らす事が多かつた。

アンナ・シェーレルも一般社交界の人達と同じやうに、彼に關する意見の變化を示した。

以前ビエールはアンナ・シェーレルの前へ出ると、いつも自分の言ふ事はみんな不躰でぶつきらばうで、不必要な事ばかり、頭の中で用意してゐる間は實に氣が利いてゐると思つた話も、一た

ん口に出すや否や馬鹿げたものになつて了ひ、かへつてイッポリートの愚にもつかぬ話の方が、氣が利いて愛嬌があるやうに思はれてゐた。ところが、今はどんな事でも彼の口にする言葉は、悉く愛想よくに聞えるやうになつて來た。尤も、アンナ・シェーレルはそれを口に出して言はなかつた。實際は口に出したくて堪らないのだけれど、ビエールの謙遜の徳を尊重するために、強ひて我慢してゐるのだ。それは彼にも分つてゐた。

千八百五年から千八百六年へ互る冬の初めに、ビエールはアンナ・バーヴロヅナから、例の薔薇色の招待状を受け取つた。其の中には *Vous trouverez chez moi la belle Hélène qu'on ne se lasse jamais de voir.* (當夜はかの眺め飽きせぬ美しきエレンの君も驚らるべく候) といふ文句が附け足してあつた。

この所を讀んでゐる中に、ビエールは他人によつて承認された一種の關係が、自分とエレンとの間に形成されてゐる事を、はじめて感じたのであつた。この想念は、さながら堪へ得らぬ義務が落ち掛つたかのやうに、彼を憎えさせもしたが、また同時に愉快な想像として氣に入りもした。

アンナ・シェーレルの夜會は前と同じやうであつたが、たゞ一つ女主人が客のお接待に利用した新顔の人は、あのモルテマール子爵ではなく、こんど伯林から歸つて來た外交官である。この人はアレクサンドル皇帝のポーツダム行在や、二人の高貴なる親友が人道の敵に對して、飽くまで正道を防守せんがために、固き同盟の誓を立てられた事など、寔に珍しい詳細な報道を齎らした。アンナは愁ひの陰を帯びてビエールを迎へた。この愁ひの陰は、察するところ、最近ビエー